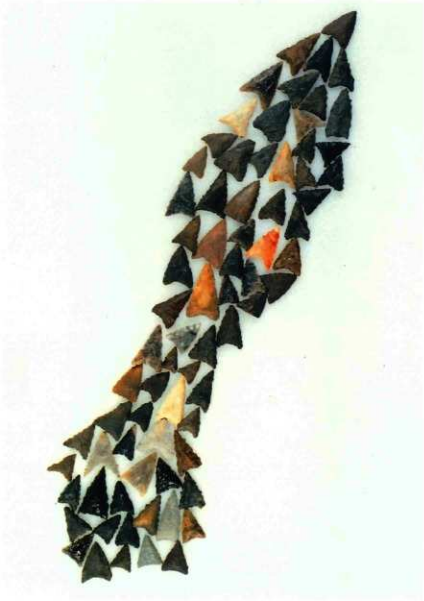
西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

緊急畑地帯総合整備事業（担い手育成型）
第二安城地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

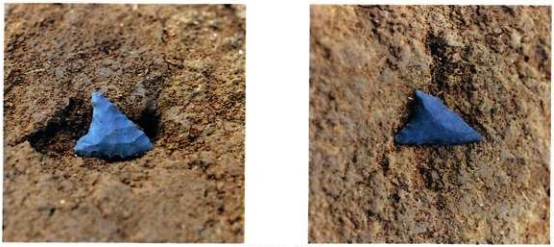
鬼ヶ野遺跡



2004年３月

鹿児島県西之表市教育委員会

石斧出土状況



石鏃出土状況

土器出土状況

土器出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

序　文

種子島は，黒潮海流の中に位置し，低平な大地と数多くの小川があり，照葉樹林が繁茂し，古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから，島の各所から遺跡が数多く発見されています。

この鬼ケ野遺跡は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が県営畑地帯総合整備事業を計画したことにより，西之表市教育委員会が調査主体となり，鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターの協力を得て，発掘調査を実施したものであります。

本発掘調査は約６ヶ月にわたり行われ，多くの出土物の中でも，特に注目すべきものは，300点以上におよぶ石鏃の出土であり，全国的に見ても非常に特異な遺跡であります。このことから縄文時代草創期にかなり発達した狩猟道具の製作技術があったこと，また専門的に作られていたことなどが想像されます。

この遺跡に立つと，眼下に太平洋が望まれ，後背地には豊かな照葉樹林帯が広がり，古代から狩猟生活に好環境であったことが理解できます。

本報告書が学術的文献として活用されるのはもとより，市民の文化財保護意識高揚の一助となることを念じる次第であります。

最後に，本報告書を刊行するにあたり，発掘調査に際して全面的にご協力をいただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ，安城地区の関係者，さらに貴重なご助言をいただいた諸先生方に対して厚くお礼を申し上げます。

平成16年３月

西之表市教育委員会教育長　有島　正之

報告書抄録

ふりがな	おにがの いせき
書名	鬼ヶ野遺跡
副書名	緊急畑地帯総合整備事業　担い手育成型　（第2安城地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	14
編集者名	沖田純一郎（西之表市教育委員会）・堂込秀人（鹿児島県教育庁文化財課）
編集機関	西之表市教育委員会
所在地	〒891－3193　鹿児島県西之表市西之表7612番地
発行年月日	2004年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鬼ヶ野遺跡	鹿児島県 西之表市 安城（あんじょう） 上之町（かみのまち） 鬼ヶ野	462136	98	30° 38′ 35″	131° 02′ 27″	確認調査 20000925 ～ 20001017 緊急調査 20010423 ～ 20011102	250㎡ 4,400㎡	緊急畑地帯総合整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鬼ヶ野遺跡	集落跡	縄文時代草創期	住居址　1基 竪穴状遺構　4基 配石　5基 集石　4基 土坑　6基	隆帯文土器 石鏃 尖頭器 楔形石器 剥片 石核 磨製石斧 ハンマーストーン 礫器 磨石，敲石，砥石 台石，石皿	

例　言

1．本書は，緊急畑地帯総合整備事業（担い手育成型）第二安城地区に伴う鬼ヶ野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本調査は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）の委託を受け，西之表市教育委員会が実施した。

3．本書に用いたレベル数値は，鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）が作成した地形図に基づく海抜高である。

4．本書の遺物番号は全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。

5．発掘調査における測量・実測・写真撮影は沖田と堂込が行い，高橋恵子・中村桂子が測量，実測の補助を行った。

6．本書の執筆と編集は沖田・堂込が行い，実測は沖田・堂込，中村桂子・荒井美佳子・安藤美津子・桑原とも子・下園恵・村松真由子が行った。土器の浄書は主に堂込が行った。石鏃・石斧・石核・剥片など石器類の一部は㈱九州文化財研究所に実測・浄書を委託し，他の石器類については上記の者が実測・浄書を行った。

7．写真図版の遺物撮影は鹿児島県立埋蔵文化財センター横手浩二郎氏が行った。

8．出土遺物の科学分析はパリノ・サーヴェイ㈱と小林謙一氏（総合研究大学院大学）・今村峯雄氏（国立歴史民俗博物館）・藤尾慎一郎氏（国立歴史民俗博物館）が行った。

9．発掘調査及び整理作業に関して，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。

10．出土遺物は西之表市教育委員会で保管し，展示・活用する。

目　次

巻頭カラー図版1
巻頭カラー図版2
巻頭カラー図版3

序　文
報告書抄録
例　言

第Ⅰ章　調査の経過 …… 2
　第1節　調査に至る経緯 …… 2
　第2節　調査の組織 …… 2
　第3節　調査の経過 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第1節　遺跡の位置 …… 7
　第2節　遺跡の環境 …… 7
第Ⅲ章　発掘調査の概要 …… 10
　第1節　調査の概要 …… 10
　第2節　層位 …… 10
　第3節　遺構 …… 15
　第4節　遺物 …… 35
　(1)　土器 …… 35
　(2)　石器 …… 118
第Ⅳ章　科学分析 …… 193
第Ⅴ章　調査のまとめ …… 201
　第1節　遺構 …… 201
　第2節　遺物 …… 201
　第3節　調査のまとめ …… 203

挿図目次

第1図　鬼ヶ野遺跡の位置 …… 1
第2図　鬼ヶ野遺跡と周辺遺跡図 …… 8
第3図　調査グリッド設定図 …… 11
第4図　土層断面図 …… 12
第5図　土層断面図 …… 13
第6図　遺構配置図 …… 14
第7図　1号住居址 …… 15
第8図　1号竪穴状遺構 …… 16
第9図　2号竪穴状遺構 …… 17
第10図　3号竪穴状遺構 …… 18
第11図　4号竪穴状遺構 …… 19
第12図　1号配石 …… 20
第13図　2号・3号配石 …… 21
第14図　4号配石 …… 22
第15図　5号配石・1号集石 …… 23
第16図　2号・3号集石 …… 24
第17図　4号集石 …… 25
第18図　1号土坑 …… 26
第19図　2号・3号・4号土坑 …… 27
第20図　5号土坑 …… 28
第21図　6号土坑 …… 29
第22図　遺物集中出土地 …… 30
第23図　遺構出土土器(1) …… 32
第24図　遺構出土土器(2) …… 33
第25図　遺構出土土器(3) …… 34
第26図　土器出土状況 …… 36
第27図　Ⅰ類土器出土状況 …… 38
第28図　Ⅱ類土器出土状況 …… 39
第29図　Ⅲ類土器出土状況 …… 40
第30図　Ⅳ類土器出土状況 …… 41

第31図　Ⅴ類・Ⅵ類土器出土状況 …… 42
第32図　Ⅶ類・Ⅷ類・Ⅸ類土器出土状況 … 43
第33図　Ⅹ類土器出土状況 …… 44
第34図　Ⅰ類土器(1) …… 46
第35図　Ⅰ類土器(2) …… 47
第36図　Ⅰ類土器(3) …… 48
第37図　Ⅰ類土器(4)・Ⅶ類土器 …… 49
第38図　Ⅱ類土器(1) …… 50
第39図　Ⅱ類土器(2) …… 51
第40図　Ⅱ類土器(3) …… 52
第41図　Ⅱ類土器(4) …… 53
第42図　Ⅱ類土器(5) …… 54
第43図　Ⅲ類土器(1) …… 55
第44図　Ⅲ類土器(2) …… 56
第45図　Ⅲ類土器(3) …… 57
第46図　Ⅲ類土器(4) …… 58
第47図　Ⅲ類土器(5) …… 59
第48図　Ⅲ類土器(6) …… 60
第49図　Ⅲ類土器(7) …… 61
第50図　Ⅲ類土器(8) …… 62
第51図　Ⅲ類土器(9) …… 63
第52図　Ⅳ類土器(1) …… 64
第53図　Ⅳ類土器(2) …… 65
第54図　Ⅳ類土器(3) …… 66
第55図　Ⅳ類土器(4) …… 67
第56図　Ⅳ類土器(5) …… 68
第57図　Ⅳ類土器(6) …… 69
第58図　Ⅳ類土器(7) …… 70
第59図　Ⅳ類土器(8) …… 71
第60図　Ⅴ類土器(1) …… 72
第61図　Ⅴ類土器(2) …… 73
第62図　Ⅴ類土器(3) …… 74
第63図　Ⅵ類土器(1) …… 75
第64図　Ⅵ類土器(2) …… 76
第65図　小型深鉢形土器(1) …… 77
第66図　小型深鉢形土器(2) …… 78
第67図　浅鉢形・皿形土器 …… 79
第68図　浅鉢形土器 …… 80
第69図　Ⅶ類土器(1) …… 81
第70図　Ⅶ類土器(2) …… 82
第71図　Ⅷ類土器(1) …… 83
第72図　Ⅷ類土器(2) …… 84
第73図　Ⅸ類土器 …… 85
第74図　Ⅹ類土器(1) …… 86
第75図　Ⅹ類土器(2) …… 87
第76図　Ⅹ類土器(3) …… 88
第77図　胴部(1) …… 89
第78図　胴部(2) …… 90
第79図　胴部(3) …… 91
第80図　胴部(4) …… 92
第81図　胴部(5) …… 93
第82図　胴部(6) …… 94
第83図　胴部(7) …… 95
第84図　胴部(8) …… 96
第85図　胴部(9) …… 97
第86図　胴部(10) …… 98
第87図　胴部(11) …… 99
第88図　胴部(12) …… 100
第89図　胴部(13) …… 101
第90図　胴部(14) …… 102
第91図　胴部(15) …… 103
第92図　胴部(16) …… 104
第93図　胴部(17) …… 105
第94図　胴部(18) …… 106
第95図　胴部(19) …… 107
第96図　胴部(20) …… 108
第97図　胴部(21) …… 109
第98図　胴部(22) …… 110
第99図　胴部(23) …… 111
第100図　胴部(24) …… 112
第101図　胴部(25)・底部 …… 113
第102図　底部 …… 114
第103図　底部 …… 115
第104図　底部 …… 116
第105図　土製円板 …… 117
第106図　石器出土状況 …… 119

第107図　石鏃・尖頭器出土状況 …… 120
第108図　石核・剥片出土状況 …… 121
第109図　楔形石器・彫器・掻器出土状況 … 122
第110図　石斧・磨石・敲石・礫器出土状況 … 123
第111図　石鏃(1) …… 124
第112図　石鏃(2) …… 125
第113図　石鏃(3) …… 126
第114図　石鏃(4) …… 127
第115図　石鏃(5) …… 128
第116図　石鏃(6) …… 129
第117図　石鏃(7) …… 130
第118図　石鏃(8) …… 131
第119図　石鏃(9) …… 132
第120図　石鏃(10) …… 133
第121図　石鏃(11) …… 134
第122図　石鏃(12) …… 135
第123図　石鏃(13) …… 136
第124図　石鏃(14) …… 137
第125図　石鏃(15) …… 138
第126図　石鏃・尖頭器・楔形石器 …… 139
第127図　楔形石器 …… 140
第128図　楔形石器・彫器 …… 141
第129図　彫器・掻器・剥片・石核 …… 142
第130図　石核(1) …… 143
第131図　石核(2) …… 144
第132図　石核(3) …… 145
第133図　石斧(1) …… 146
第134図　石斧(2) …… 147
第135図　石斧(3) …… 148
第136図　石斧(4) …… 149
第137図　礫器・ハンマーストーン …… 150
第138図　ハンマーストーン・磨石・敲石 … 151
第139図　磨石 …… 152
第140図　磨石 …… 153
第141図　磨石・敲石・砥石 …… 154
第142図　磨石・敲石 …… 155
第143図　磨石・敲石 …… 156
第144図　磨石・敲石 …… 157
第145図　磨石・敲石 …… 158
第146図　砥石・台石 …… 159
第147図　台石 …… 160
第148図　台石・砥石 …… 161
第149図　石皿 …… 162
第150図　石皿 …… 163
第151図　石皿 …… 164

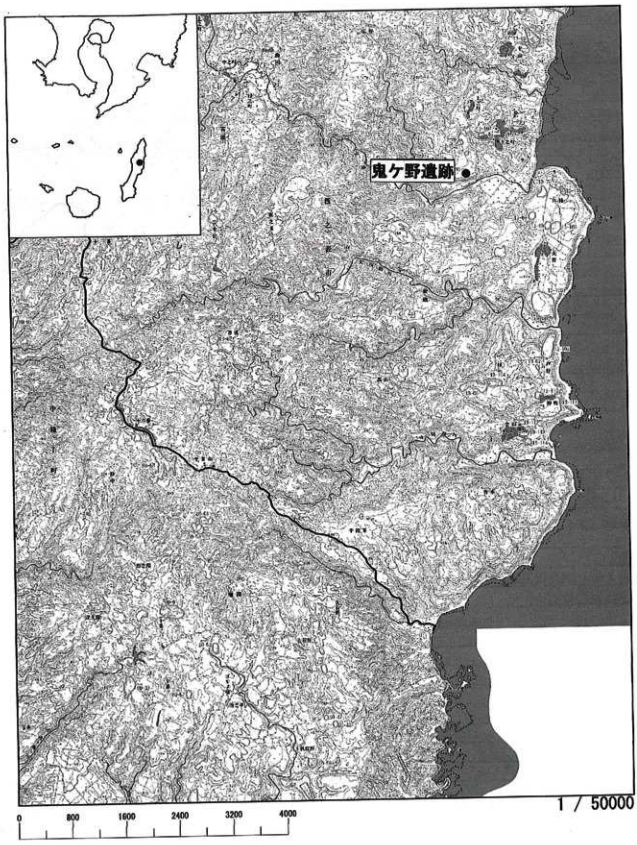
表目次

第 1 表　鬼ヶ野遺跡周辺遺跡地名表 …… 9
第 2 表　土器観察表(1) …… 166
第 3 表　土器観察表(2) …… 167
第 4 表　土器観察表(3) …… 168
第 5 表　土器観察表(4) …… 169
第 6 表　土器観察表(5) …… 170
第 7 表　土器観察表(6) …… 171
第 8 表　土器観察表(7) …… 172
第 9 表　土器観察表(8) …… 173
第10表　土器観察表(9) …… 174
第11表　土器観察表(10) …… 175
第12表　土器観察表(11) …… 176
第13表　土器観察表(12) …… 177
第14表　土器観察表(13) …… 178
第15表　土器観察表(14) …… 179
第16表　石器観察表(15) …… 180
第17表　石器観察表(1) …… 181
第18表　石器観察表(2) …… 182
第19表　石器観察表(3) …… 183
第20表　石器観察表(4) …… 184
第21表　石器観察表(5) …… 185
第22表　石器観察表(6) …… 186
第23表　石器観察表(7) …… 187
第24表　石器観察表(8) …… 188

第25表　石器観察表(9) …… 189
第26表　石器観察表(10) …… 190
第27表　石器観察表(11) …… 191
第28表　石器観察表(12) …… 192

写真図版

図版1　調査状況(1) …… 204
図版2　調査状況(2) …… 205
図版3　調査状況(3) …… 206
図版4　調査状況(4) …… 207
図版5　遺物出土状況(1) …… 208
図版6　遺物出土状況(2) …… 209
図版7　1号住居址(1) …… 210
図版8　1号住居址(2) …… 211
図版9　1号竪穴状遺構 …… 212
図版10　2号竪穴状遺構 …… 213
図版11　3号竪穴状遺構 …… 214
図版12　4号竪穴状遺構 …… 215
図版13　1号配石 …… 216
図版14　2号配石 …… 217
図版15　3号配石 …… 218
図版16　4号・5号配石 …… 219
図版17　1号・2号集石 …… 220
図版18　4号集石 …… 221
図版19　1号土坑 …… 222
図版20　2号土坑 …… 223
図版21　3号・4号土坑 …… 224
図版22　5号・6号土坑 …… 225
図版23　土器出土状況(1) …… 226
図版24　土器出土状況(2) …… 227
図版25　石鏃出土状況 …… 228
図版26　石鏃・台石・砥石出土状況 …… 229
図版27　尖頭器・石核出土状況 …… 230
図版28　石斧出土状況 …… 231
図版29　調査状況・発掘調査作業員の皆さん … 232
図版30　Ⅰ・Ⅱ類土器 …… 233
図版31　Ⅱ類土器 …… 234
図版32　Ⅱ類土器 …… 235
図版33　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類土器 …… 236
図版34　Ⅲ・Ⅳ類土器 …… 237
図版35　胴部，Ⅲ・Ⅳ類土器 …… 238
図版36　Ⅳ類土器 …… 239
図版37　Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類，小型深鉢形土器 … 240
図版38　胴部，Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類土器 …… 241
図版39　Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類土器 …… 242
図版40　Ⅰ・Ⅷ・Ⅹ類，小型深鉢形，
浅鉢形土器 …… 243
図版41　Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ類，浅鉢形土器 …… 244
図版42　Ⅶ・Ⅷ類土器 …… 245
図版43　石鏃 …… 246
図版44　石鏃 …… 247
図版45　石鏃 …… 248
図版46　石鏃 …… 249
図版47　石鏃・尖頭器 …… 250
図版48　尖頭器・楔形石器 …… 251
図版49　楔形石器・彫器 …… 252
図版50　掻器・彫器・剥片 …… 253
図版51　石斧 …… 254
図版52　石斧 …… 255
図版53　石核 …… 256
図版54　石核 …… 257
図版55　石斧 …… 258
図版56　石斧 …… 259
図版57　石斧 …… 260
図版58　石斧 …… 261
図版59　礫器・磨石・敲石・
ハンマーストーン …… 262
図版60　磨石・敲石・砥石 …… 263
図版61　砥石・台石 …… 264



第1図　鬼ヶ野遺跡の位置

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至る経緯

鹿児島県農政部（熊毛支庁土地改良課）は，西之表市安城地区内において緊急畑地帯総合整備事業（担い手育成型）を計画し，事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下県文化財課）に照会した。

これを受けて，県文化財課が平成11年３月に埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果，事業区内に鬼ヶ野Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡が所在することが判明した。

分布調査の結果をもとに熊毛支庁土地改良課（以下土地改良課）・県文化財課・西之表市教育委員会文化課（以下市文化課）は遺跡の取り扱いについて協議を行った結果，開発事業と埋蔵文化財保護の調整を図るため，埋蔵文化財確認調査を実施することとなった。

確認調査は西之表市教育委員会が調査主体となり，鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力を得て，平成12年９月25日から10月17日まで行った。調査の結果，工事対象地内に縄文時代草創期の遺物包含層が残存していることが確認された。調査結果をもとに，県文化財課・県農政部（熊毛支庁土地改良課）・市文化課で遺跡の取り扱いについて協議を行い，工事の設計上遺跡の現状保存は困難であるため工事着工前に，対象地の埋蔵文化財緊急発掘調査（全面調査）を実施することとなった。

緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり，鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの調査支援を受け，平成13年４月23日から平成13年11月２日まで行った。

報告書作成のための整理作業は遺構及び遺物の数が膨大なため平成14年度・15年度と２ヵ年かけて行った。

第2節　調査の組織

（緊急発掘調査）

発掘調査主体者	西之表市教育委員会		
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	文化課	課長　浦口安雄
	〃	〃	課長補佐　奥村　学
発掘調査担当	西之表市教育委員会	文化課	主事　沖田純一郎
	鹿児島県立埋蔵文化財センター		文化財主事　堂込秀人
発掘調査指導	鹿児島県教育庁文化財課　鹿児島県立埋蔵文化財センター		
事業主体者	鹿児島県農政部　熊毛支庁土地改良課		

発掘調査作業員　長野静雄・田上亥年・長野シヅ子・榎元オリエ・上妻レイ子・長濱トミ子・竹之内綾子・遠藤ハツ子・日高シノブ・徳永ミツエ・長野フミエ・日高アヤ子・鮫島ミワ子・牧瀬文子・長野フミ子・江口玲子・山口由美子・日高信子・西田エミ子・丹野小巻・安藤美津子・江口幸路・荒井美佳子・高橋恵子・中村桂子

（整理作業）

発掘調査主体者　西之表市教育委員会

発掘調査責任者　西之表市教育委員会　教育長　有島正之

発掘調査企画担当　西之表市教育委員会　文化課　課長　鮫島市憲（平成14年度）
社会教育課　課長　阿世知猛雄（平成15年度）
文化課　課長補佐　奥村学（平成14年度）
社会教育課　総括課長補佐　奥村学（平成15年度）

整理作業担当　西之表市教育委員会　社会教育課　主事　沖田純一郎
鹿児島県教育庁　文化財課　文化財主事　堂込秀人

整理作業指導　鹿児島県教育庁文化財課　鹿児島県立埋蔵文化財センター

事業主体者　鹿児島県農政部　熊毛支庁土地改良課

整理作業員　中村桂子・荒井美佳子・安藤美津子・桑原とも子・下園　恵・村松真由子

第3節　調査の経過

緊急発掘調査は平成13年4月23日から平成13年11月2日まで行った。工事計画図面をもとに，調査対象地に20mグリッドを設置し，重機によりアカホヤ火山灰層までを除去した後，人力により掘り下げを行い，調査を進めていった。以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

「緊急発掘調査」

4月23日(月) ～27日(金)	作業員オリエンテーション，ベルトコンベア設置。調査地グリッド設置。A－2・3区掘り下げ。隆帯文土器片・石鏃出土。浦口文化課長・奥村文化課長補佐・市農水土木課職員・熊毛支庁土地改良課職員・土改連職員・西之表市議会文教厚生委員来跡。
5月1日(火) ～2日(木)	重機により表土除去作業（B－2・3区，C－2・3区)。A－2・3区，B－2・3区掘り下げ。浦口文化課長来跡。
5月7日(月) ～11日(金)	鹿児島県教育庁文化財課児玉健一郎氏発掘調査指導のため来跡（7日～8日)。B－2・3区，C－2・3区掘り下げ。遺物取上げ。石鏃27点出土。奥村文化課長補佐・土地改良課職員来跡。
5月14日(月) ～18日(金)	B－2・A－3区遺物取上げ。B－2・3区掘り下げ。多量の土器片，石器類が出土。浦口文化課長・奥村文化課長補佐・種子島開発総合センター委託職員尾形之善氏・中種子町教育委員会田平氏・市文化財保護審議委員・国上中1年生（39名)，野間中1年生（85名）発掘体験学習のため来跡。
5月22日(火) ～25日(金)	B－2・3，A－2・3区掘り下げ。土器片・石器類出土。A－1・B－1区重機により表土除去作業。熊毛支庁土木課職員・土地改良課職員・市農水土木課職員・奥村文化課長補佐来跡。
5月28日(月) ～6月1日(金)	A－3・B－3区掘り下げ。両面加工の石槍状石器出土する。B－2・3区土層断面清掃。平板・レベル遺物取上げ。取上げ遺物719点。石鏃88点出土。鹿児島県教育庁文化財課倉元氏調査支援（29日まで)・熊毛支庁土木課職員・土地改良課職員・有島教育長来跡。
6月4日(月) ～8日(金)	A・B－1・2・3区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。遺物出土状況写真撮影。遺物取上げ点数1,200点になる。鹿児島県立埋蔵文化財センター次長，総務課長，大久保氏・農水土木課職員・浦口文化課長・種子島開発総合センター宮浦五雄氏・下野敏見氏・高重義好氏来跡
6月11日(月) ～15日(金)	A・B－1・2・3区掘り下げ。平板・レベル遺物取上げ。石器類，石鏃117点，石斧12点出土。種子島警察署員2名・市農水土木課職員来跡。
6月18日(月) ～21日(木)	A・B－2・3区掘り下げ。平板・レベル遺物取上げ。奥村文化課長補佐・農水土木課職員来跡。
6月25日(月) ～29日(金)	A・B－3・4区掘り下げ。平板・レベル遺物取上げ。B－3区より遺物（土器・石斧等）集中して出土。出土状況写真撮影。土地改良課職員・市農水土木課職員来跡。

7月2日(月) ～6日(金)	A・B・C－3・4区掘り下げ。B－3区遺物出土量多し。掘り下げ面乾燥が強く一部地割れが生じる。石鏃17点出土する。浦口文化課長・奥村文化課長補佐・尾形之善氏・古田駐在署員・市広報担当高石心平氏・上屋久町，屋久町広報担当者来跡。
7月9日(月) ～13日(金)	A・B・C－3・4区掘り下げ。4区にて遺構検出作業。調査面乾燥を防ぐためブルーシートを張る。土器片・石器類多量に出土する。主にB－4区より。南日本新聞社・NHK鹿児島放送局・KTS鹿児島テレビ，取材のため来跡。鹿児島県立埋蔵文化財センター大久保氏，上床氏，堂込氏・南種子町教育委員会坂口氏・鮫島安豊西之表消防署長・安城家庭教育学級生・西之表市長落合浩英氏・浦口文化課長・奥村文化課長補佐・農水土木課職員・土地改良課職員・他一般見学者多数来跡。
7月16日(月) ～19日(木)	A・B・C－3・4・5区掘り下げ。遺物出土，遺構検出作業。石鏃12点出土。鹿児島県教育庁文化財課新東埋蔵文化財係長発掘調査指導のため来跡。榕城小家庭教育学級生・西之表消防署員・鹿児島県立埋蔵文化財センター大久保氏，西郷氏・西之表市教育委員会有島教育長・浦口文化課長・奥村文化課長補佐・一般見学者多数来跡。
7月23日(月) ～27日(金)	A・B・C－4・5・6区，D－6区掘り下げ。ミニトレンチを設置し遺物の広がりを精査。調査地全体に乾燥を防ぐため，散水作業を行う。熊毛支庁土木課職員・市税務課職員・奥村文化課長補佐・学芸員実習生（3名）・一般見学者多数来跡。
7月30日(月) ～8月3日(金)	A・B・C－4・5区掘り下げ，遺構検出作業。配石・集石検出。石鏃・土器片出土。写真撮影。鮫島安豊西之表消防署長，消防署員（2名）散水用の貯水タンク設置のため来跡。奥村文化課長補佐・種子島開発総合センター委託職員尾形之善氏・学芸員実習生（3名）・おもしろ博物教室受講生来跡。一般見学者多数来跡。
8月6日(月) ～10日(金)	A・B－3・4区掘り下げ，清掃，写真撮影。遺物集中出土地，配石実測開始。集石等検出作業。鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込氏調査支援。取上げ遺物2,153点。文化庁技官1名・県教育庁文化財課新東氏・鹿児島県立埋蔵文化財センター鶴田氏，大久保氏，上床氏・中種子町教育委員会田平氏，野平氏・浦口文化課長・奥村文化課長補佐・種子島開発総合センター委託職員尾形氏・一般見学者多数来跡。
8月22日(水) ～23日(木)	A・B－3・5区掘り下げ。A・B－4区平板・レベル遺物取上げ（約400点），その後清掃作業。A－3区より石槍出土。熊毛支庁土地改良課職員・一般見学者多数来跡。
8月27日(月) ～31日(金)	A－2・3・4・5区掘り下げ。C－4区掘り下げ（トレンチ設置）。遺構検出作業。平板・レベル遺物取上げ。取上げ遺物3,159点。集石実測を行う。

9月3日(月) ～7日(金)	豪雨災害のため，3・4日は作業中止。市内住宅の給水にあたる。B－3区・C－3区遺構検出作業。土層断面実測作業。鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込氏調査支援。西之表市教育委員会有島教育長来跡。
9月10日(月) ～14日(金)	A・B・C－3・4区掘り下げ。B－3・4区ベルトより土器片，石鏃等出土する。平板・レベル遺物取上げ。遺物出土状況写真撮影。浦口文化課長・奥村補佐・市農水土木課職員来跡。
9月17日(月) ～21日(金)	A・B－2・3・4区掘り下げ。C－4区トレンチを設置し掘り下げ。B－2区内で剥片が多量に出土したため詳細に調査を行う。乾燥を防ぐため調査地内に散水を実施。鹿児島県立埋蔵文化財センター宮田氏，中原氏，馬籠氏，大久保氏，立神氏・鹿児島県立博物館成尾氏・同志社大学生石堂氏・浦口文化課長・奥村補佐来跡。
9月25日(火) ～28日(金)	A・B・C－3・4区ベルト内出土遺物取上げ。B－2区・4区詳細に掘り下げ，遺構検出作業。A・B－5区掘り下げ。取上げ遺物4,051点になる。沖縄史料編集室岸本氏他2名・農水土木課，土地改良課職員・奥村課長補佐来跡。近畿機械産業ベルトコンベアメンテナンス実施。
10月1日(月) ～5日(金)	B－2区遺構検出作業，写真撮影。B－4・5区平板・レベル遺物取上げ。遺構実測作業（集石・配石）。遺構内遺物取上げ作業。鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込氏調査支援。熊毛教育事務所長，指導主事・鹿児島県立埋蔵文化財センター大久保氏・奥村課長補佐来跡。
10月9日(火) ～12日(金)	遺構検出，掘り下げ，清掃，写真撮影，実測作業。(土坑等11基)。集石・配石検出作業，写真撮影。A・B－4・5区掘り下げ，平板・レベル遺物取上げ。取上げ遺物4,637点に及ぶ。鹿児島県立埋蔵文化財センター吉崎氏，大久保氏・宮崎県立埋蔵文化財センター職員3名・土地改良課職員来跡。
10月15日(月) ～19日(金)	土坑5基，平面・断面実測終了。A－2区，A・B－4・5区掘り下げ，遺構検出作業。平板・レベル遺物取上げ。土坑実測作業。鹿児島大学上村教授・鹿児島県立埋蔵文化財センター上床氏来跡。
10月22日(月) ～26日(金)	遺構清掃，写真撮影，実測作業。住居址掘り下げ，周辺清掃，柱穴半裁，実測作業。A・B・C－2区，B－3区，平板・レベル遺物取上げ。遺構配置図作成。鹿児島県立埋蔵文化財センター堂込氏調査支援。鹿児島大学本田氏・鹿児島県立埋蔵文化財センター牛ノ濱氏・大久保氏・上床氏・市農水土木課職員・一般見学者5名来跡。
10月29日(月) ～11月2日(金)	B・C－3区遺物取上げ，調査地内清掃，写真撮影，遺構（集石・配石）平面・断面実測作業。道具後片付け，調査終了。西之表市教育委員会有島教育長・西之表市収入役清水末則氏・浦口文化課長・奥村文化課長補佐・土地改良課職員来跡。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた，東南約40kmの海上にあり，南北52km，東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた，最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で，地形は丘陵性の山地，海岸段丘，河川付近の沖積低地からなり，西方に位置する屋久島とは対照的である。また，西海岸部には比較的砂丘が発達しているが，東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

鬼ヶ野遺跡は西之表市の東南海岸部安城地区上之町の標高約77mの海岸段丘上に位置し，遺跡の東側には太平洋を望むことができる。遺跡の一段下には川が流れており，周辺では一段高い位置に遺跡は形成されている。

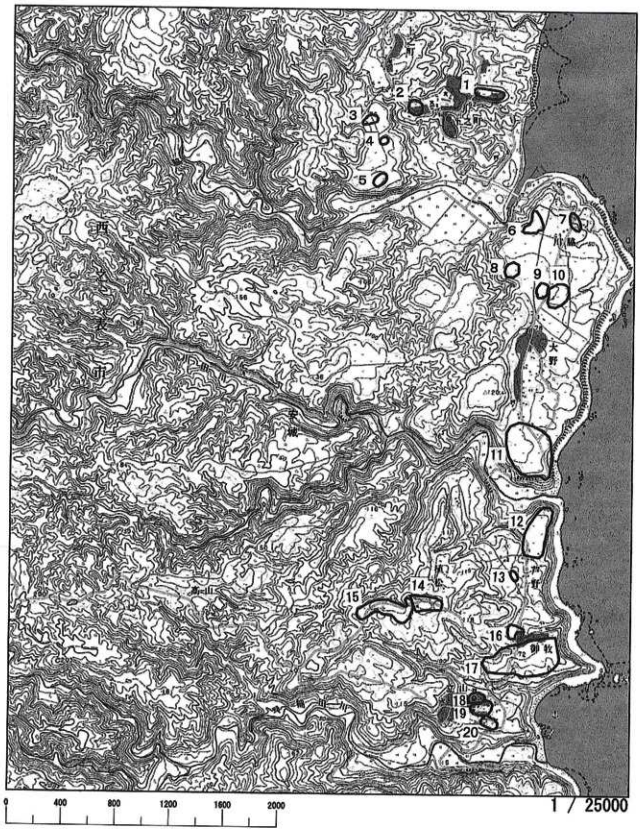
種子島の遺跡について述べると，約3万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡（南種子町）・立切遺跡（中種子町）や，細石核・細石刃が採集された湊遺跡・大中峯遺跡（西之表市）があり，奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査によって縄文時代草創期の遺跡が初めて確認され，その後本遺跡や三角山遺跡（中種子町）の調査で縄文時代草創期の住居址や多数の遺構，遺物が発見され注目を浴びている。その後の縄文時代早期・前期の遺跡も島内各地で確認されているが，中期の遺物の報告例は少ない。後期の遺跡は指宿式・市来式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており，納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡（西之表市），特異な配石遺構が多数検出された藤平小田遺跡（南種子町）などがある。

弥生時代は下剥峯遺跡・田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡（西之表市）や，多数の人骨と貝製品が出土した広田遺跡（南種子町），覆石墓・人骨が出土した鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがあり，中期頃の土器片が出土する遺跡も確認されているが，埋葬址が多いのが特徴的である。

古墳時代に属すると思われる遺跡は上能野貝塚・嶽ノ中野A・B遺跡（西之表市）などがある。種子島において，弥生時代以降の遺跡は縄文時代の遺跡に比べ極端に少ないため，未解明な点が多いのが現状である。

第2節　遺跡の環境

鬼ヶ野遺跡が所在する西之表市の東海岸側，特に安城・立山地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され，良好な資料が出土している。特に，奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期（約12,000年前）の遺跡であり，奥ノ仁田遺跡の出土品は県の文化財に指定された。周辺には数多くの小川があり，その一段高い台地の上に遺跡が形成される傾向が見られる。今後もこの周辺で縄文時代草創期の遺跡が発見される可能性があり，種子島においての縄文時代の成り立ちを考える上で重要な場所である。



第２図　鬼ヶ野遺跡と周辺遺跡図

第1表　鬼ヶ野遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時　代	備　考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	**鬼ヶ野**	**西之表市安城上之町**	**縄文時代草創期**	**本報告書 平成13年発掘調査**
6	日守C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成13年県道分布調査 平成15年確認調査
8	日守B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成13年試掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14年確認調査 平成14年発掘調査Ⅱ地点 平成15年発掘調査Ⅰ地点
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成14年確認調査
13	九郎三ェ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期・早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年度県道分布調査
17	長崎	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年度県道分布調査
18	中園A	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年度県道分布調査
19	中園B	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年度県道分布調査
20	下ノ平	西之表市立山立山	縄文時代	平成13年度県道分布調査

第Ⅲ章　発掘調査の概要

第1節　調査の概要

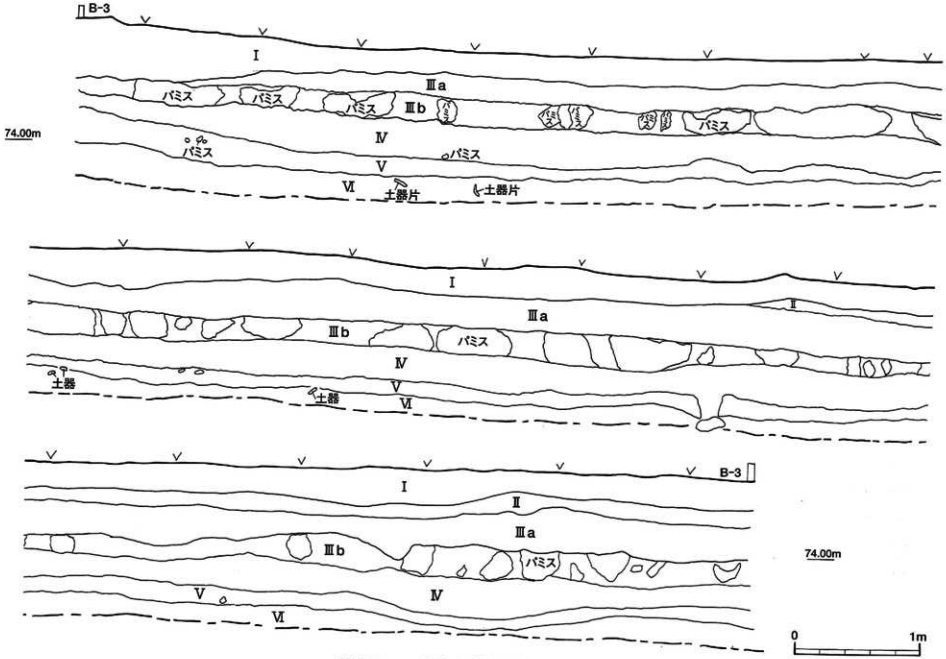
緊急発掘調査は確認調査の結果をもとに，工事対象地内で遺物包含層が残存している範囲のみ行った。調査は表土からアカホヤ火山灰層までを重機で除去し，その後人力で掘り下げを行った。確認調査の結果から，第Ⅶ層より下位は無遺物層であることが確認されていたため，今回の調査の最下層を第Ⅶ層面とした。調査は工事図面を基準に20mグリッドを設置し，南から北へA区～D区，東から西へ1区～6区とし掘り下げを行っていった。B－2区は剥片の出土量が多く，詳細に調査を行うため，2mグリッドを設置し掘り下げを行った。本調査で番号を付けて取上げた遺物は4,941点であった。発掘調査面積は約4,400㎡である。

第2節　層　位

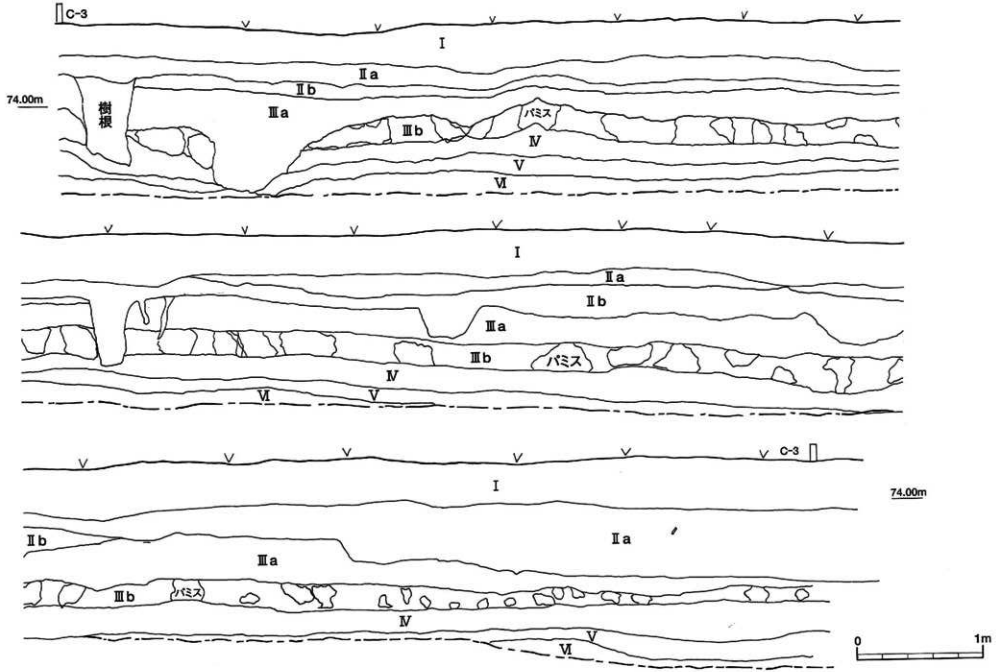
土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが，基本的には下記のとおりである。土層の堆積状況は全体的に南側から北側へ向かって緩やかに傾斜しており，第Ⅱ層の黒褐色砂質土は北側が厚く堆積する。

Ⅰ	層	灰褐色土	表土・耕作土
Ⅱ	層	a　淡黒褐色砂質土	Ⅱ層は色調により2層に分層可。
		b　黒褐色砂質土	旧表土と思われ，パサパサしている。
Ⅲ	層	a　暗茶褐色土	アカホヤ（2次）
		b　黄橙色火山灰層	アカホヤ火山灰層（1次）ブロック状のパミスを確認できる。（約6,400年前の鬼界カルデラ噴出物）
Ⅳ	層	暗褐色粘質土	一部Ⅴ層と漸移している。
			Ⅳ・Ⅴ層の間に小指大から2cm程度の暗黄白色パミスがごく稀に一部散在し，サツマ火山灰に比定される。
Ⅴ	層	明褐色粘質土	一部Ⅳ層と漸移している
Ⅵ	層	暗褐色粘質土	遺物包含層，約20cmの層厚で隆帯文土器等が出土
Ⅶ	層	淡褐色粘質土	

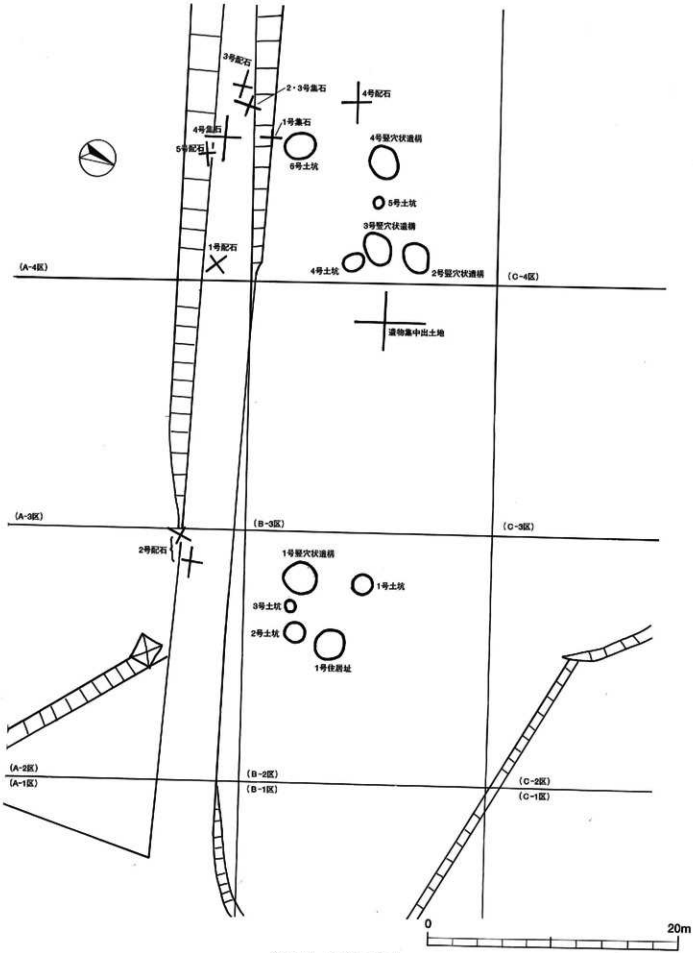
第3図　調査グリッド設定図



第4図　B－3区　西側土層断面図



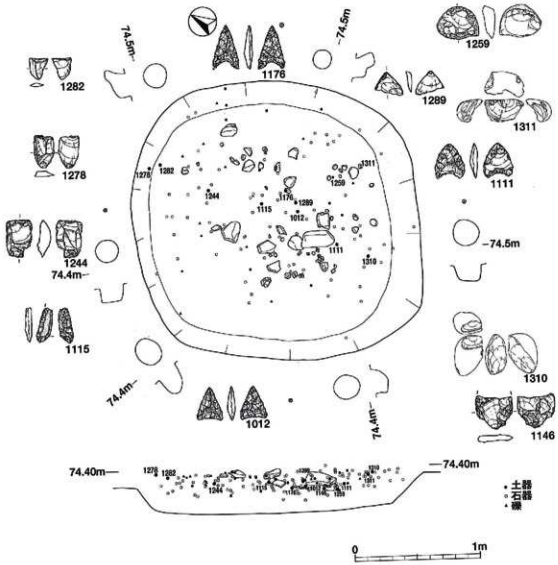
第5図　C-3区　西側土層断面図


3号配石
2・3号集石
4号配石
1号集石
4号集石
5号配石
6号土坑
4号竪穴状遺構
5号土坑
3号竪穴状遺構
1号配石
4号土坑
2号竪穴状遺構
(A-4区)
(C-4区)
遺物集中出土地
(A-3区)
(B-3区)
(C-3区)
2号配石
1号竪穴状遺構
1号土坑
3号土坑
2号土坑
1号住居址
(A-2区)
(A-1区)
(B-2区)
(B-1区)
(C-2区)
(C-1区)
0
20m

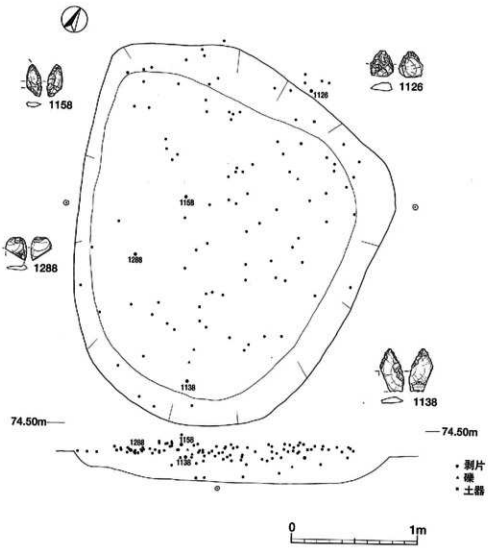
第 6 図　遺構配置図

第3節　遺　構

遺構は住居址が1基，竪穴状遺構4基，配石5基，集石4基，土坑6基が検出された。検出面は全て第Ⅵ層で縄文時代草創期のものである。以下各遺構の検出状況について述べる。また，B－3区で丸ノミ形石斧，石鏃，隆帯文土器等の遺物が集中して出土したため出土状況の実測を行った。



第7図　1号住居址



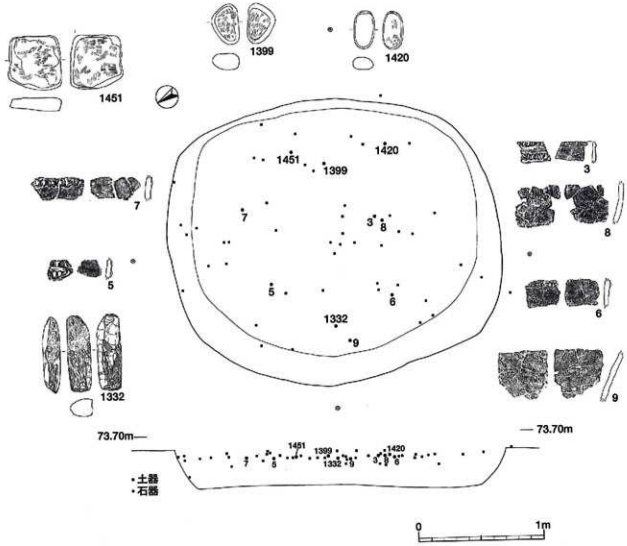
第8図　1号竪穴状遺構

1号住居址（第7図）

B－2区中央部で検出された。平面プランは長軸2.29m・短軸2.22mのほぼ円形になる。内部からは炭化物，剥片類・楔形石器109点，礫18点，土器27点，石鏃4点，軽石2点，磨石1点，石核1点が出土したが，床着遺物は出土せず，焼土や熱を受けた礫等は確認されなかった。床面はほぼ平坦であり，検出面から床面までの深さは27cmである。掘り込み壁の立ち上がりはやや傾斜している。平面プランの周辺には直径15cm～20cm程の6基のピット状遺構が確認され，全てを半裁した結果，柱穴と判断した。柱穴の深さは検出面から約10cm～19cmであった。柱穴のうち4基はプランに対して外側に向いた状態で設置されている。竪穴内部からはピット状の遺構等は検出されなかった。

1号竪穴状遺構（第8図）

B－2区で検出された。平面プランは長軸3.03m・短軸2.54mの大きさで，楕円形を呈している。

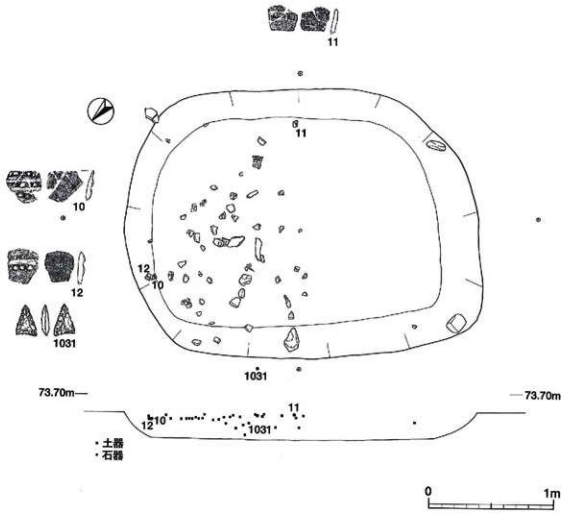


第9図　2号竪穴状遺構

遺構内からは剥片類93点，石鏃未製品3点，礫3点，土器5点が出土し，床着遺物は2点出土している。竪穴内の出土遺物の大部分を剥片類が占める。検出面からの深さは22cmであり，掘り込み壁の立ち上がりはやや傾斜している。プランの周辺及び竪穴内部からはピット状の遺構等は検出されなかった。

2号竪穴状遺構（第9図）

B－4区で検出された。平面プランは長軸2.65m・短軸2.30mでほぼ円形になる。竪穴内部からは土器32点，剥片類19点，礫4点，磨石2点，石斧1点，石皿1点が出土したが，床着遺物は出土していない。竪穴の深さは検出面から29cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりはかなり傾斜している。プランの周辺及び竪穴内部からはピット状の遺構等は検出されなかった。



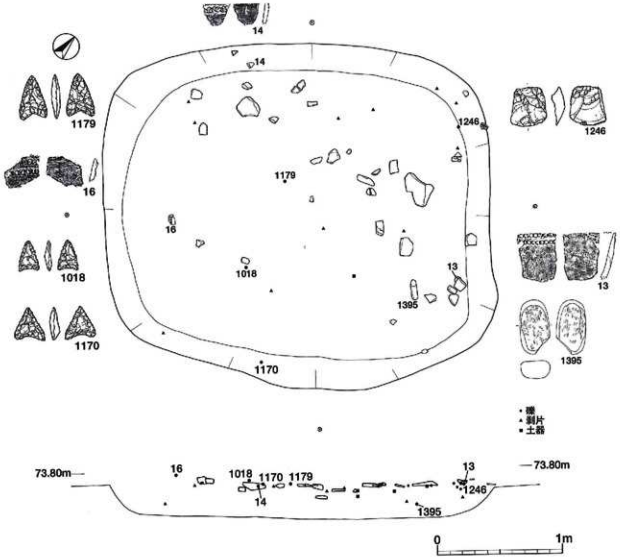
第10図　3号竪穴状遺構

3号竪穴状遺構（第10図）

B－4区より検出され2号竪穴状遺構に隣接している。平面プランは長軸2.84m・短軸2.15mの大きさである。内部からは土器18点，礫31点，石鏃1点，剥片類12点が出土したが，遺物は東よりに集中して出土し，床着に近い遺物が1点出土している。床面はほぼ平坦であり，竪穴の深さは検出面から23cmであった。掘り込み壁の立ち上がりはやや傾斜している。プランの周辺及び竪穴内部からはピット状の遺構等は検出されなかった。

4号竪穴状遺構（第11図）

B－4区，中央部で検出された。平面プランは長軸3.09m・短軸2.76mである。内部からは礫30点，剥片類12点，土器9点，石鏃3点，磨石1点が出土したが，遺物は散在した状態での出土であり，床着遺物は出土していない。床面はほぼ平坦であり，竪穴の深さは検出面から27cmであった。掘り込み壁の立ち上がりはやや傾斜している。プランの周辺及び竪穴内部からはピット状の遺構等は検出されなかった。



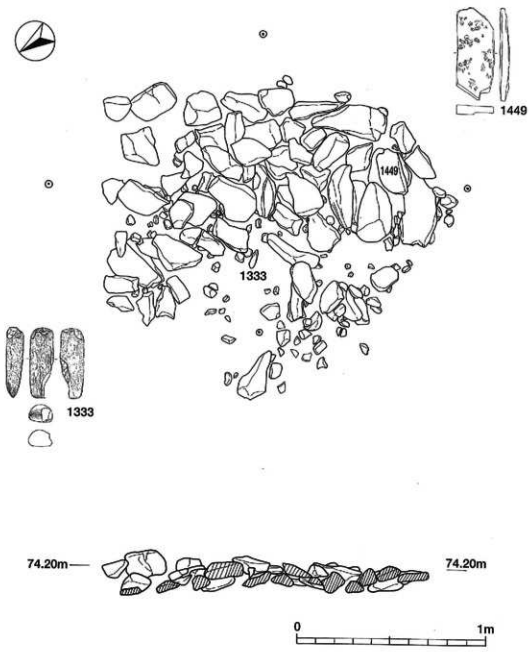
第11図　4号竪穴状遺構

1号配石（第12図）

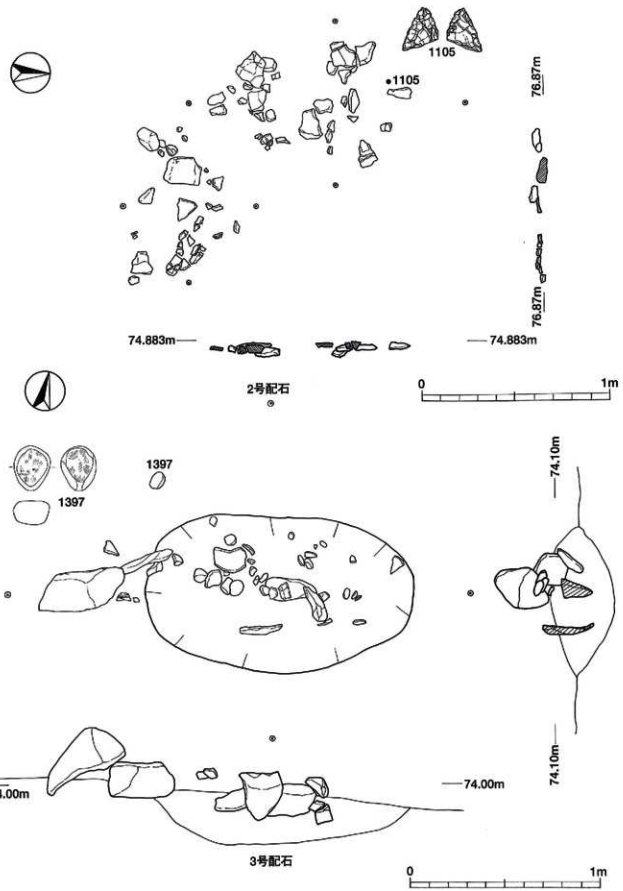
A－4区で検出された。170cm×190cmの範囲内に礫147点がぎっしりと詰まった形で構成される。礫は長さ20cm～40cmに及ぶ大きめの砂岩礫が大多数を占め，台石類も含まれている。内部から土器51点，石斧1点，石鏃1点が出土した。下部に掘り込みは確認されなかった。

2号配石（第13図）

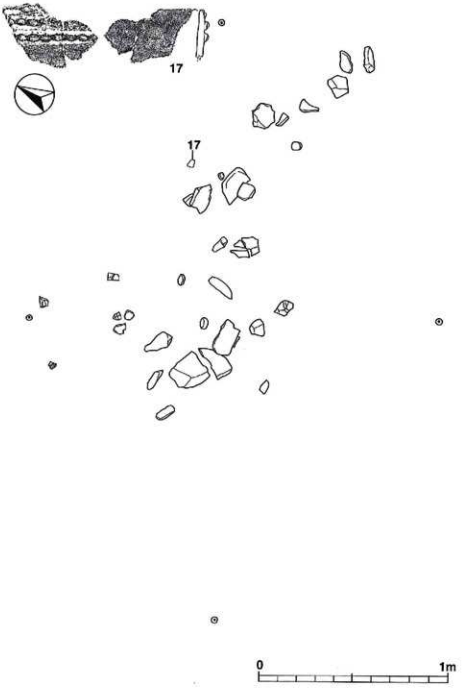
A－2区で70cm×110cmの範囲内に長さ10cm～20cmの礫が散在した状態で検出された。礫は砂岩が主体で64点に及び，石皿が1点含まれている。周辺から土器5点，石鏃1点が出土した。下部に掘り込みは確認されなかった。



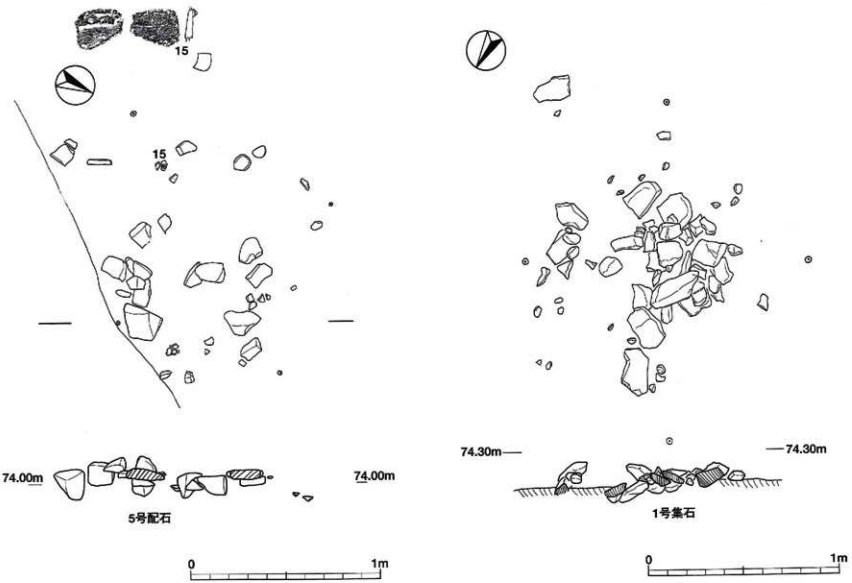
第12図　1号配石


1105
•1105
76.87m
76.87m
74.883m
74.883m
2号配石
0
1m
1397
1397
74.10m
74.10m
74.00m
74.00m
3号配石
0
1m

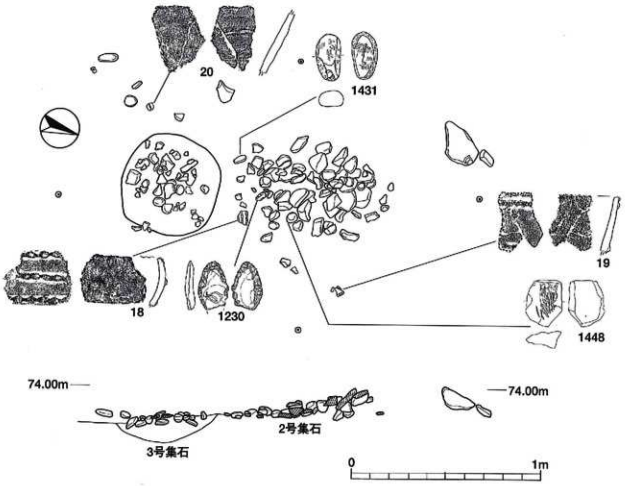
第13図　2号・3号配石



第14図　4号配石



第15図　5号配石・1号集石



第16図　2号・3号集石

3号配石（第13図）

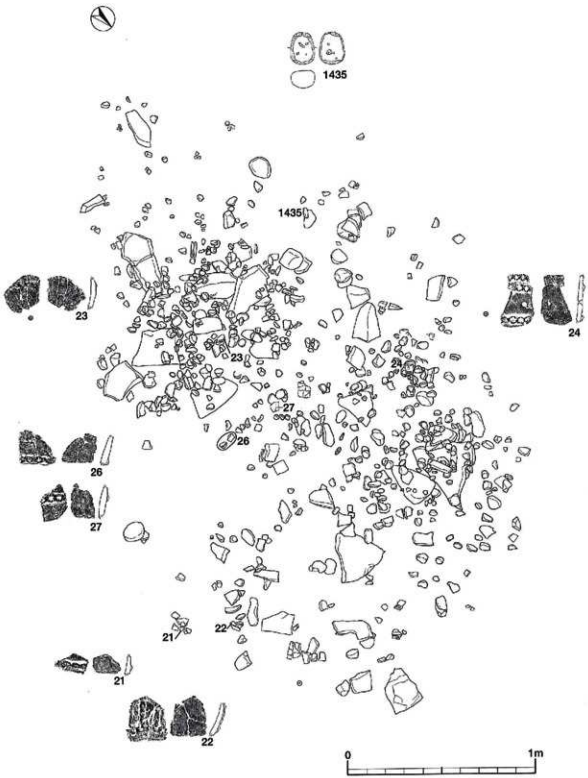
A－4区で2・3号集石に隣接する形で検出された。60cm×200cmの範囲内に10cm～45cmの砂岩35個から構成される。配石内からは磨石1点，土器5点が出土した。配石内に140cm×80cmの平面プランが確認でき，検出面からの掘り込みの深さは25cmであり底面は曲線を描く。

4号配石（第14図）

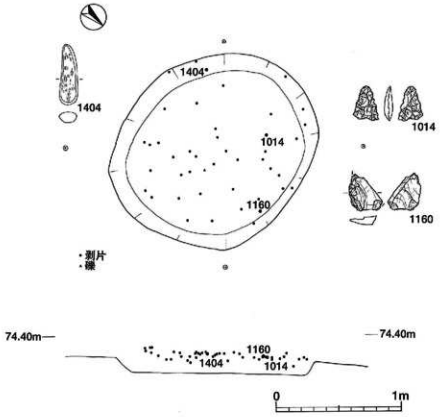
B－4区，西側で検出された。170cm×190cmの範囲に砂岩の礫29点から構成される。構成される礫は10cm～20cm程度の大きさで，密集しておらず散在した状態であった。周辺及び内部から土器6点が出土した。下部に掘り込みは確認されなかった。

5号配石（第15図）

A－4区，南側土層断面に一部入り込んだ状態で，120cm×150cmの範囲内に10cm～25cmの礫25点がやや散在した状態で検出された。礫はすべて砂岩である。内部及び周辺部から土器16点が出土し，一部熱を受け赤化している礫が5点あった。下部に掘り込みは確認されなかった。



第17図　4号集石



第18図　1号土坑

1号集石（第15図）

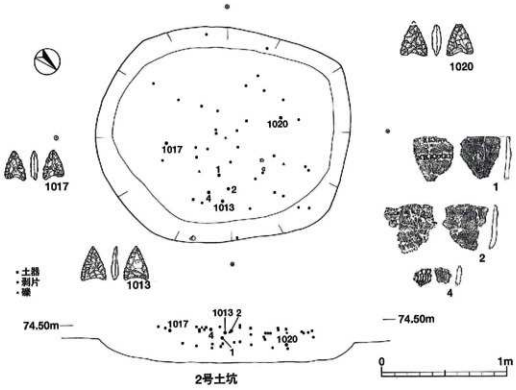
B－4区，6号土坑に隣接する位置で，170cm×120cmの範囲内に礫55点がほぼ中央に密集するような形で検出された。構成される礫は砂岩が主体である。内部から土器6点が出土している。礫の大部分は炎熱を受け赤化している。内部からは炭化物が検出された。下部に掘り込みは確認されなかった。

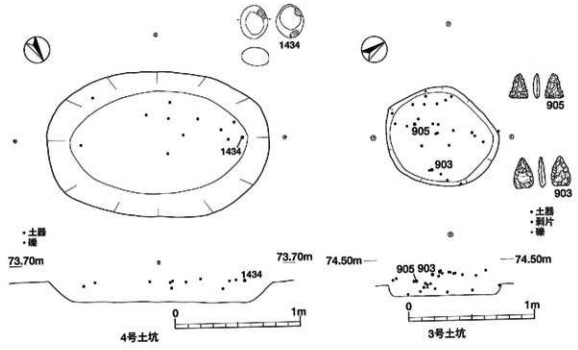
2号集石（第16図）

A－4区で80cm×50cmの範囲内に礫72点が密集する形で検出された。集石内には尖頭器1点，土器8点，磨石・敲石3点が含まれ，炭化物が検出された。構成される礫は主に砂岩で10cm程度の小型のものが多い。中央部の礫は熱を受け赤化している。下部に掘り込みは確認されなかった。

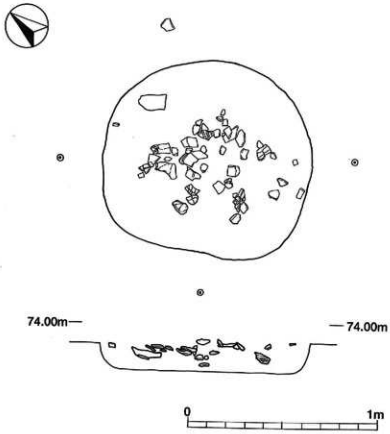
3号集石（第16図）

A－4区，2号集石から約20cm南側で検出された。10cm程度の小型の砂岩礫39点から構成され，一部熱を受け赤化した礫も見受けられた。また，集石の外側には50cm×50cmの平面プランが確認され，検出面から掘り込みの深さは約10cmで，下位の礫は掘り込み内で検出された。


1020
1017
1020
1017
1
2
1013
1
2
4
1013
・土器
・剥片
・礫
74.50m
1013 2
1017
4
1
1020
74.50m
0
1m
2号土坑


1434
905
905
1434
903
903
・土器
・礫
・土器
・剥片
・礫
73.70m
73.70m
74.50m
74.50m
905 903
1434
0
1m
0
1m
4号土坑
3号土坑

第19図　2・3・4号土坑



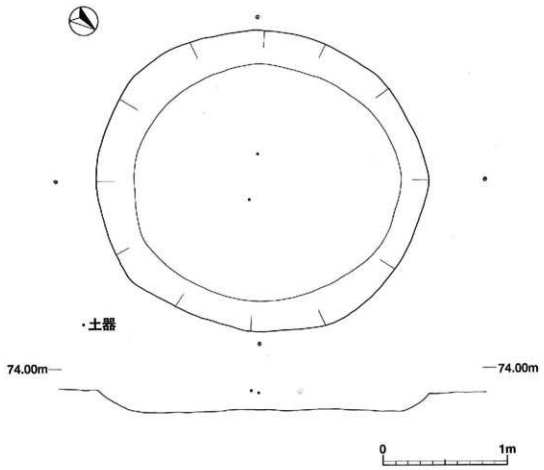
第20図　5号土坑

4号集石（第17図）

A－4区，320cm×250cmの範囲内に礫527点から構成されている。南側の礫集中部分と北よりの礫集中部分とに分けて捉えることも考えられるが，礫が散在していたため，あえて1基の集石とした。この集石内からは土器121点，磨石・敲石類2点，炭化物が出土した。構成される礫は拳大から30cmほどの大きさであり，20cm～30cmの大型の礫は同じ場所に集中する傾向がみられる。構成される礫は砂岩が主体である。一部下位に掘り込みがあると思われたが，掘り下げを行った結果掘り込み面は確認されなかった。

1号土坑（第18図）

B－2区，1号竪穴状遺構のほぼ北側で検出された。平面プランは長軸1.62m・短軸1.56mで，ほぼ円形である。内部からは剥片42点，礫2点，石鏃1点が出土した。深さは検出面から11cmであり，底面はほぼ平坦である。北側の掘り込み壁の立ち上がりはかなり傾斜している。



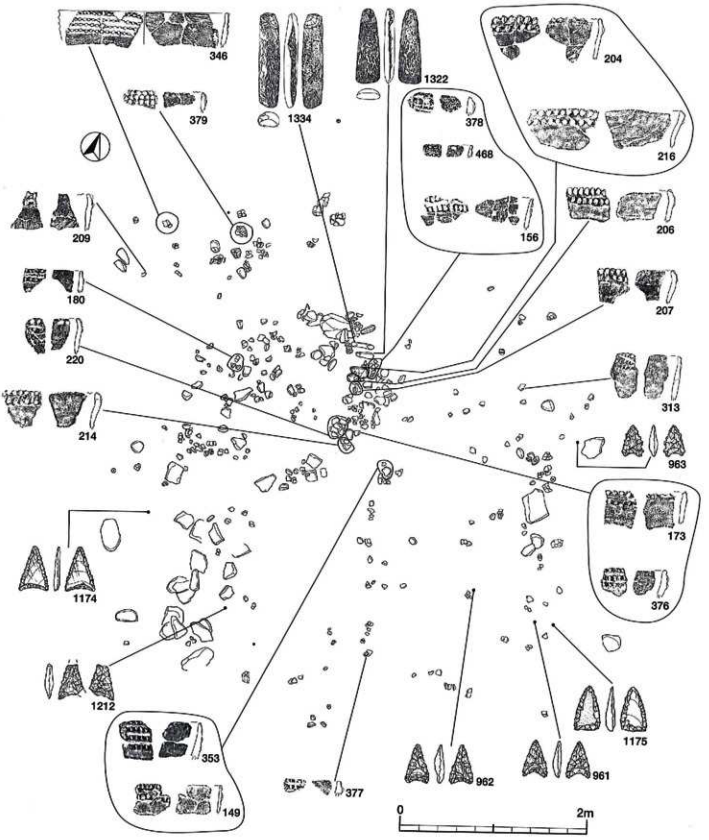
第21図　6号土坑

2号土坑（第19図）

B－2区，1号住居址に隣接する位置で検出された。平面プランは長軸2.04m・短軸1.71mでほぼ円形である。内部からは土器16点，剥片24点，礫3点，石鏃3点が出土した。検出面からの深さは18cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりは緩やかである。

3号土坑（第19図）

B－2区，2号土坑に隣接する位置で検出された。平面プランは長軸0.9m・短軸0.79mの大きさでほぼ円形である。内部からは剥片16点，土器10点，石鏃2点，礫2点が出土した。検出面からの深さは9cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりは傾斜している。



第22図　遺物集中出土地

4号土坑（第19図）

B－4区，3号竪穴状遺構に隣接する位置で検出された。平面プランは長軸1.78m・短軸1.16mで，楕円形状である。内部からは土器9点，磨石・敲石類1点，礫2点が出土した。検出面からの深さは16cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりはやや傾斜している。

5号土坑（第20図）

B－4区，3号・4号竪穴状遺構に挟まれた位置で検出された。平面プランは長軸1.11m・短軸1.00mでほぼ円形である。内部からは土器20点，礫30点が出土した。深さは検出面から15cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりはかなり傾斜している。

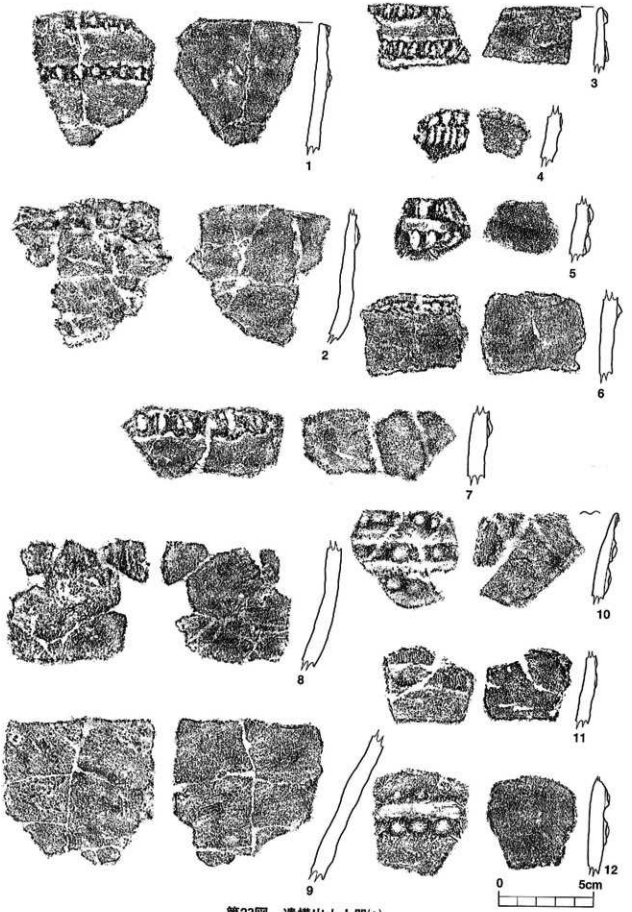
6号土坑（第21図）

B－4区，1号集石に隣接した位置で検出された。平面プランの大きさは長軸2.67m・短軸2.41mで円形になる。内部からは土器2点が出土した。深さは検出面から15cmであり，底面は平坦である。掘り込み壁の立ち上がりは緩やかである。

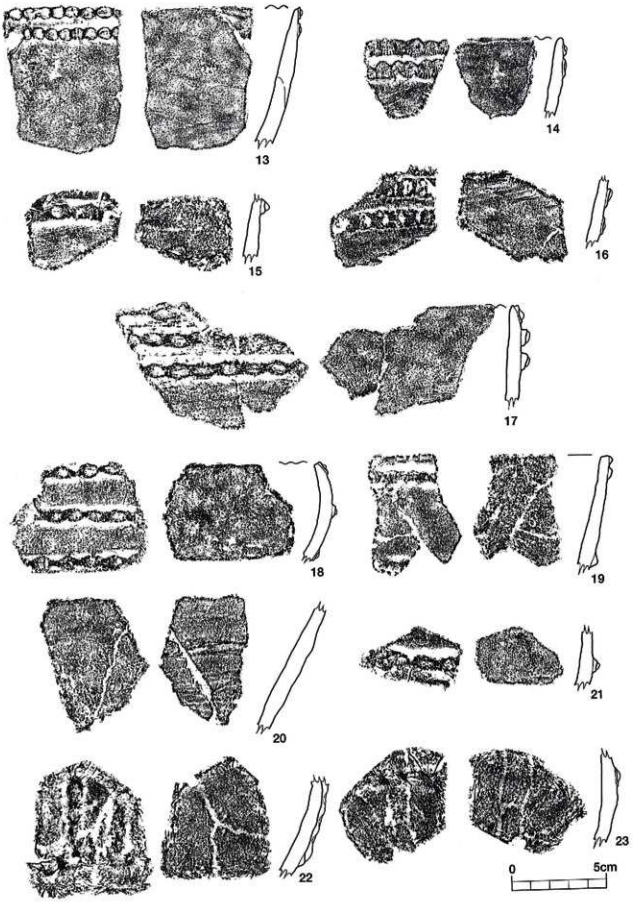
遺物集中出土地（第22図）

B－3区，西側で第Ⅵ層面より320cm×280cmの範囲に遺物が集中して出土し，遺構の可能性も考えられたため詳細に調査を行った結果，遺構は確認できなかったが，土器143点，礫134点，石鏃6点，石斧3点，砥石4点が出土した。

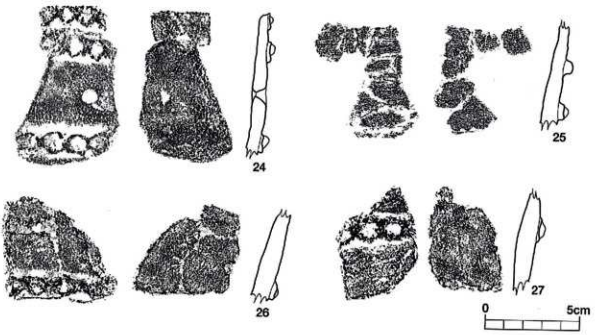
特に1322と1334は磨製石斧で，刃部が丸ノミ状であり，2本並んだ状態での出土であった。



第23図　遺構出土土器(1)



第24図　遺構出土土器(2)



第25図　遺構出土土器(3)

第4節　遺　物

遺物は土器片と石器類が出土した。出土した層はすべてⅥ層である。時期区分では縄文時代草創期に位置づけられるものである。取り上げた遺物は，パンケースに詰め込んで50箱あまりであった。

(1)土　器

接合作業を終了し，選別時の土器の点数は，無文のもの11,323点，文様を有するもの1,996点，図化した土器が1033点，総数14,352点である。このうち図化した土器の1033点のうち854点を掲載している。土器全体の出土状況は第26図にあるように，A区とB区の2～4区に集中し，未調査区（事業地区除外の畑地）の方にひろがる。

分類はⅠ類～Ⅹ類までおこなった。無文の胴部については，傾きから類別できるものもあるが，一括して呈示する。底部は丸平底が最も多い。土製円盤と考えられる，土器の割れ口を削って円形にした破片が散見された。一括したが傾きについてはそのままとした。

分　類

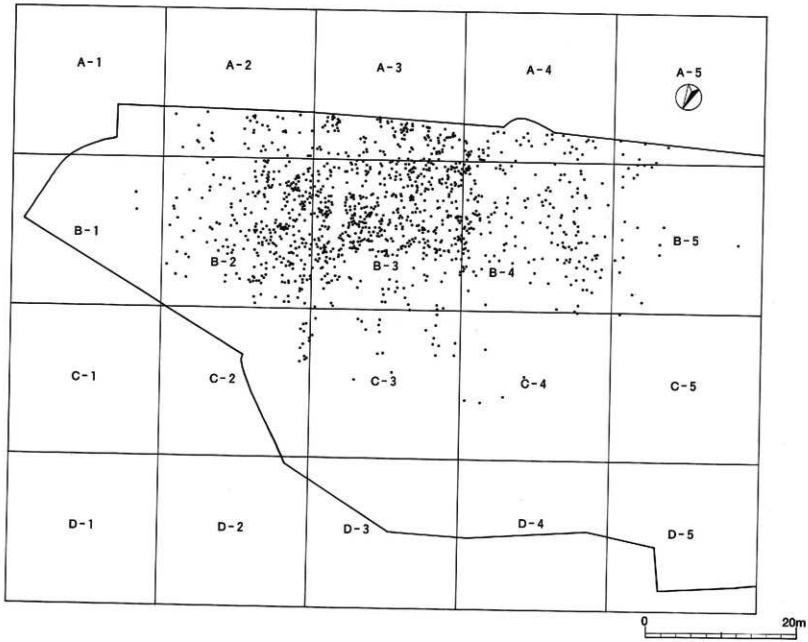
深鉢形土器を中心にⅠ類～Ⅹ類に分類した。土器の分類は，隆帯の位置と条数，器形を中心として分類した。施文具は指頭・貝殻の殻頂部・棒状の工具を押圧して刻目を施しており，ヘラ状工具で隆帯を切ったものは量的に少ない。調整具が用いられるときは，植物質の柔らかい工具を使用しているものが多い。ほとんどが丁寧になでられている。条数が少ないものから多いものへ，文様帯が口縁部に繰り上がり，集線化する型式変化を予想する。

Ⅰ類は，口縁部外側に1～2条の隆帯と，空白部分をおいて胴部に隆帯を施すものである。器形は胴部上半は立ち上がり，下半がすぼまっていきやや尖り気味の丸底となる。Ⅱ類は口縁部や胴部の上下の隆帯間を縦や斜めの隆帯でつなぐものである。Ⅲ類は口縁部外側に2条の隆帯を貼り付ける。端部の隆帯の付け方や器形で3つに小分類した。器形は器高の違いでボール形と砲弾形があると考えられる。底部は丸底から丸平底である。

なお，Ⅲ類土器からⅤ類土器は，口縁部外側の隆帯が多条化することで分類した。口縁部の破片ばかりでは，胴部以下の器形の判断はできないところである。鹿児島市掃除山遺跡や加世田市志風頭遺跡の出土例では，胴部に隆帯が巡り，そこから屈曲して底部にいたる土器があることから，Ⅰ類との分離ができるのか疑問がでてくる。ところが本遺跡出土の隆帯をもつ胴部には，隆帯の近くで急激に屈曲する破片は見あたらない。そこでⅢ類土器～Ⅴ類土器などについては，胴部屈曲の器形は考えていない。器形はボール形から器高が高くなり，砲弾型へ，さらに丸平底の円筒形から平底の円筒形の型式変化を予想する。

Ⅳ類は口縁部外側に3条の隆帯が貼り付けられるものである。器形はやや外反する口縁部と内湾する口縁部があるが，外開きの砲弾形となる。Ⅴ類は口縁部外側に4条以上の隆帯を貼り付けるものである。胴部上半はほぼ直立するかやや外傾するボール形の器形から円筒形に近くなると考えられる。Ⅵ類は隆帯が2～4条口縁部に集線化し，一帯となって刻目等が施されるものである。

Ⅶ類からは隆帯が消滅する方向での型式変化を考えている。Ⅶ類は隆帯を両側からつまむことで羽状の文様が刻まれる。Ⅷ類は口縁部外側に刺突文を施すものである。Ⅸ類は口縁部外側に短い凹



第26図　土器出土状況

線により，文様を施すもので，口縁端部には貝殻による押圧の刻みがなされている。

X類は南九州の貝殻文円筒土器の系譜につながる岩本式土器へ型式変化していく途中のものとしてとらえた。円筒形の器形をなす。

こうした分類と，器種として，小型深鉢形土器と浅鉢形土器を抽出した。さらに胴部を図化した。

胎　土

胎土は以下の砂粒を中心として，実体顕微鏡で観察した。土器観察表では砂粒の量を多→少は◎→△で表した。

石　英　丸みをもち，そろばん玉状の形のものが見られる。コロコロした印象で，透明度が高い。

長　石　白色半透明で，石英に比べると光沢がなく，四角っぽい形で長柱状・板状・卓状をなす。縦・横または格子状のすじ（へき開）がみられ，へき開によって割れている。

角閃石　細長く平らな柱状で，横断面はつぶれた六角形である。黒く光沢をもつ。

雲　母　六角形をした板状の結晶で，平行なへき開にそって，板状に剥がれやすい。金色を呈し，強い光沢がある。屋久島などの花崗岩体の風化土壌に多く含まれる。種子島では一般に見られない。

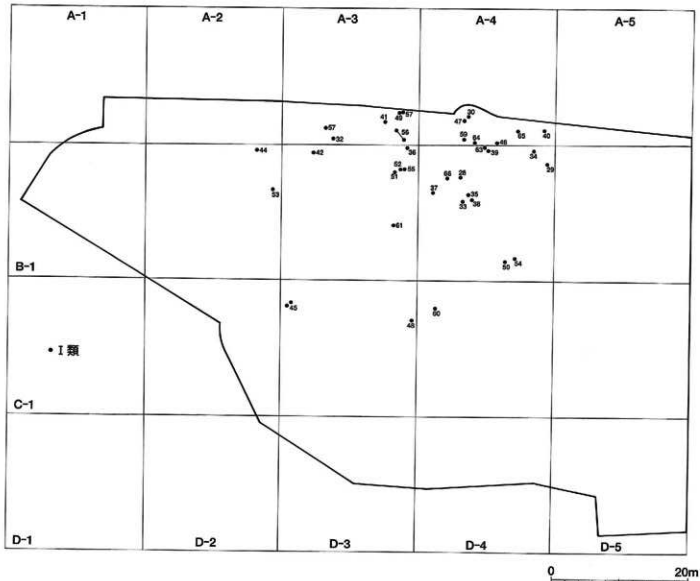
その他の砂礫　泥岩質のものや，軽石の小さいものや，火山岩片がある。赤色砂岩の2～3㎜の円礫がはいることもある。これらは砂礫として一括している。透明な火山ガラス（パプルウォール）が観察される場合が多い。

種子島の基盤層等を考えた場合に，雲母と角閃石が入ることは考えにくく，これらは島外からの持ち込みと判断される。また，西之表市納曽遺跡出土の縄文時代後期の納曽式土器や一湊式土器，鬼ヶ野遺跡の近くの東前平遺跡の縄文時代早期の押型文土器や塞ノ神式土器の胎土は，長石を多く含むもので，島内の土で製作されたものは，時代をとおして一般化できそうである。そこで，砂礫をほとんど含まず粉っぽい胎土のものをA，地元のものをBとし，雲母を含みおそらく屋久島あるいは大隅半島南東部の国見山系のものと考えられるものをCとする。これらは土器観察表の備考に記した。

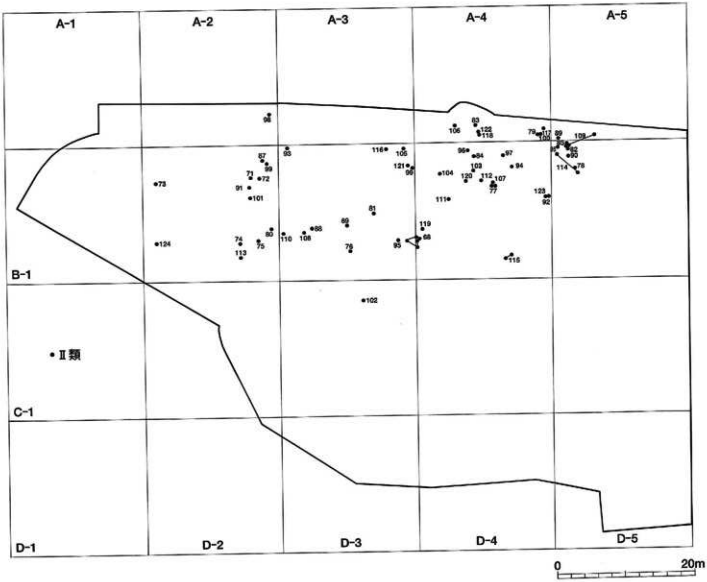
Aについては，土の産地がどこのものかは不明であるが，草創期の土器で砂礫をほとんど含まないものが，県下でも見られるので，B以下の分別とは観点が異なるが分離しておきたい。Cは，雲母の入り方に2通りあり，雲母の結晶剥片がそのままで火山ガラスを多く含むものと，結晶の形状は残さず微細となり角閃石を含むものである。前者は屋久島，後者は大隅半島の可能性を指摘しておく。

出土状況

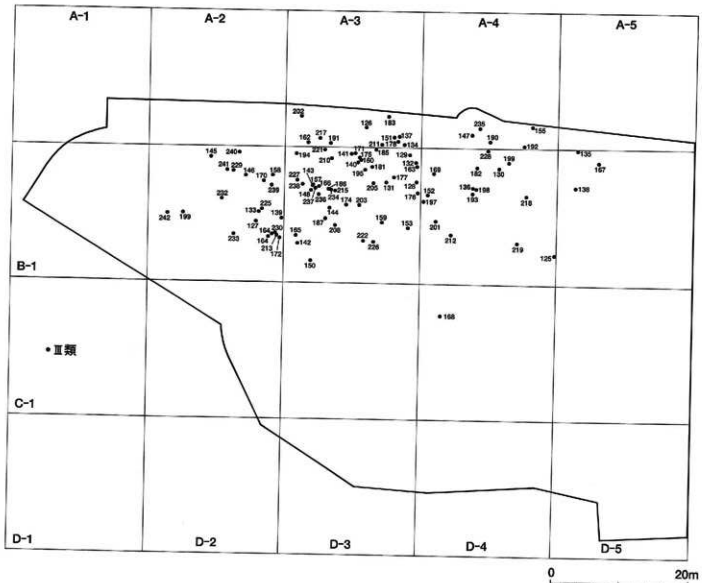
各類別による出土状況は第27図から第33図にある。Ⅰ類とⅡ類はB－4区に出土するが，東と西にやや分布域を違えて分布している。Ⅲ類はB－3区に，Ⅳ類はB－2・3区に集中域を異にしている。土器分類により，微妙な分布域の差がみられ，使用された場所の違いは，時代性の反映ととらえられる。



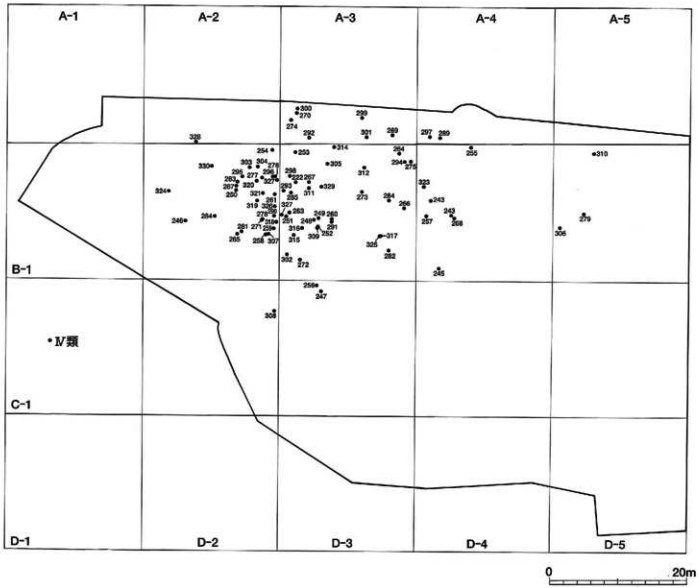
第27図　Ⅰ類土器出土状況



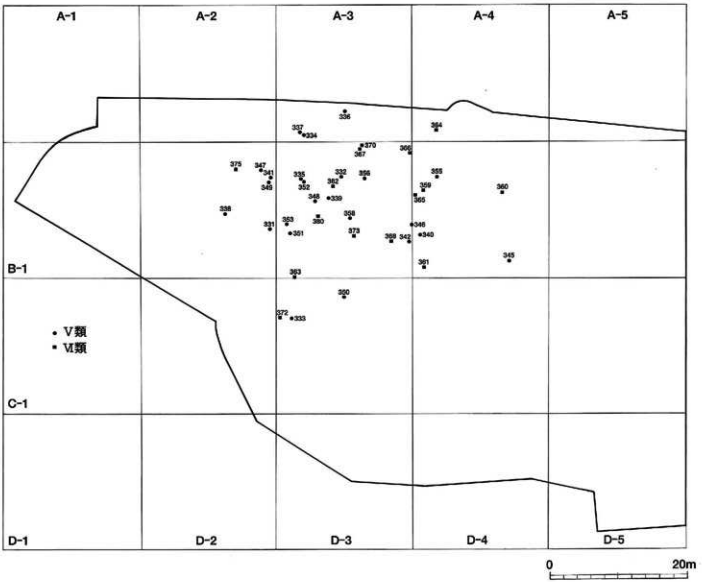
第28図　Ⅱ類土器出土状況



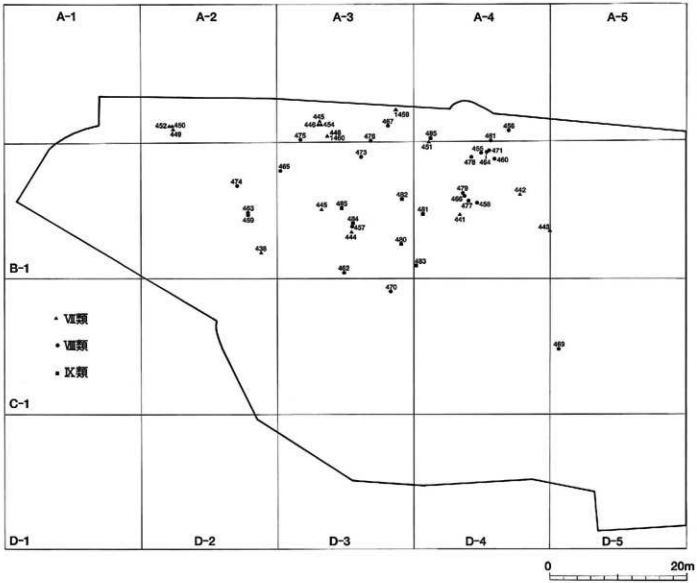
第29図　Ⅲ類土器出土状況



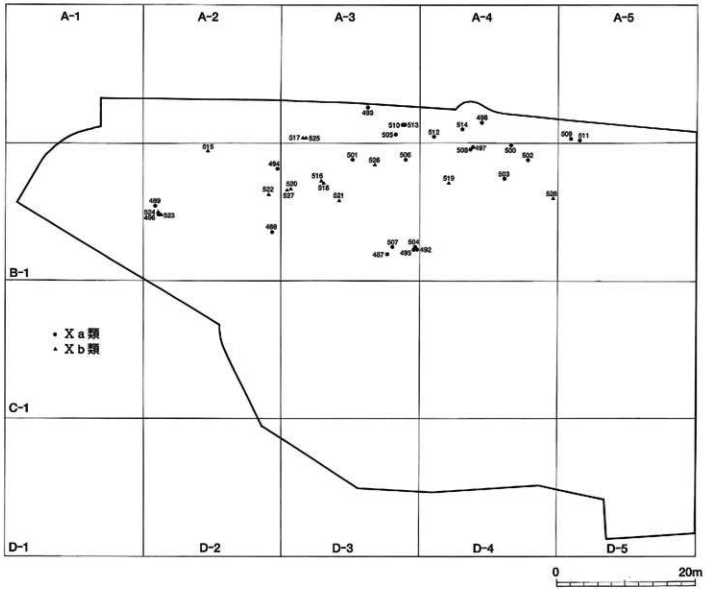
第30図　Ⅳ類土器出土状況



第31図　Ⅴ・Ⅵ類土器出土状況



第32図　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ類土器出土状況



第33図　X類土器出土状況

個別の土器の詳細については土器観察表による。おおまかな説明をしたい。

Ⅰ類（第34図～第37図　28～56・59～67）

口縁部外側に１～２条の隆帯と，空白部分をおいて胴部に隆帯を施すものである。器形は胴部上半は立ち上がり，下半がすぼまっていきやや尖り気味の丸底となる。45は胴部で急角度に内傾していく。このように胴部で屈曲する器形もある。28～35・58・60は無刻目で，36～41は指頭圧痕，48～50・52・54・55は貝殻の殻頂圧痕のものである。42・65は短隆帯か隆帯の切れ目かは不明である。63も短隆帯か隆帯が下垂してきたものか不明である。33と35については，口縁端部に隆帯がなく，胴部の隆帯から強く屈曲するもので，別の一群の可能性もある。

Ⅱ類（第38図～第42図　68～124）

口縁部や胴部の上下の隆帯間を縦や斜めの隆帯でつなぐものである。１条ないし２条の横走する隆帯をつなぐものと（69・75・76・77・79・80・82・85・89・90・94・95），口縁部が多条（68・88・111）のものがあり，器形も直線的に立ち上がり胴部下半が直線的に強い傾きで底部に至るものとボール状のものとがある。貝殻の殻頂で押圧したものが目立ってくる（79・80・82・86・89～92・94・96・98・99・109・116・123）。基本的にはⅠ類をベースにして隆帯がつながれたものである。斜め方向に垂下する隆帯や（68・73・76・80・93・95），曲線的に貼り付けられた隆帯（72・78・83・84・88・101）があり，バラエティーに富む。

Ⅲ類（第43図～第51図　125～242）

口縁部外側に２条の隆帯を貼り付けるものである。端部の隆帯の付け方や器形で３つに小分類した。器形は器高の違いでボール形と砲弾形があると考えられる。底部は丸底から丸平底である。Ⅲｂ類は口縁部が内湾し，底部に向かってすぼまっていくコマ形となる器形が想定される。系統が異なる可能性がある。Ⅲａ類には貝の殻頂による圧痕があるが，Ⅲｂ類とⅢｃ類には見られない。

Ⅲａ類（第43図～第48図　125～203）

上の隆帯の端部が口縁端部に貼り付けられるものである。129・135・139・175・192・202など上下の隆帯間が幅広のものがある。Ⅰ類の可能性も残すが，古手の可能性がある。

Ⅲｂ類（第49図～第50図　204～229）

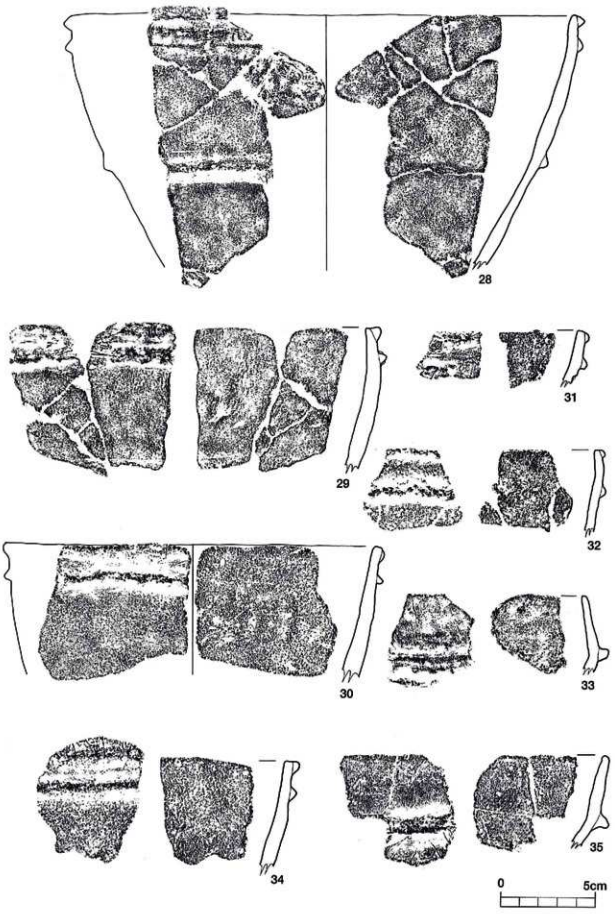
口縁端部が丸く内湾し，近接した２条の隆帯に指頭で刻みが入れられる。胴部上半はやや外反する器形となる。上部の隆帯は土器の口縁端部と一体化し，隆帯を貼り付けているにもかかわらず，そう見えない個体もある。文様帯の繰り上がりの最終形態として新しい時期のものとも考えられ，他のⅢ類とは分離される可能性がある。

Ⅲｃ類（第51図　230～242）

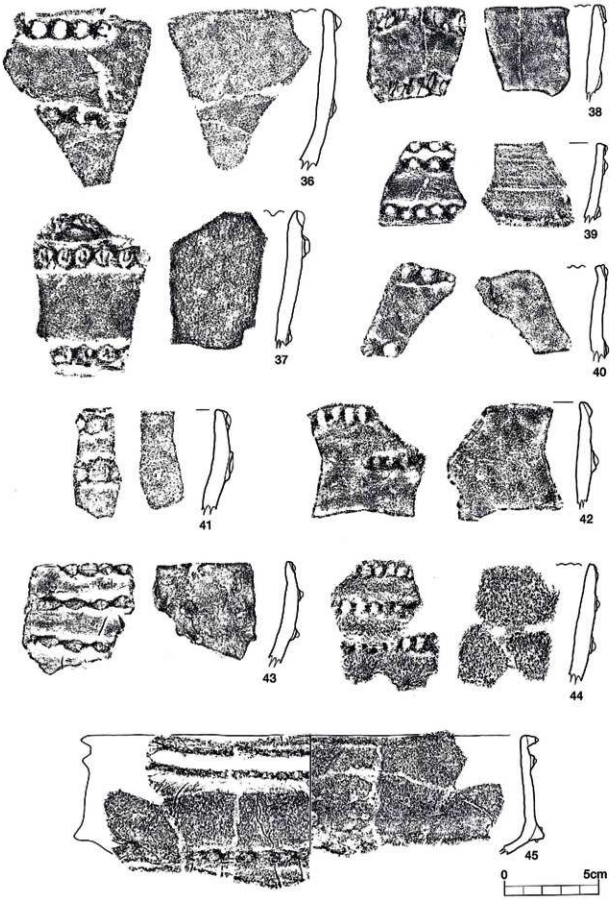
口縁端部が舌状を呈して，端部下に隆帯が貼り付けられるものである。指頭圧痕のものが大部分である。

Ⅳ類（第52図～第59図　243～330）

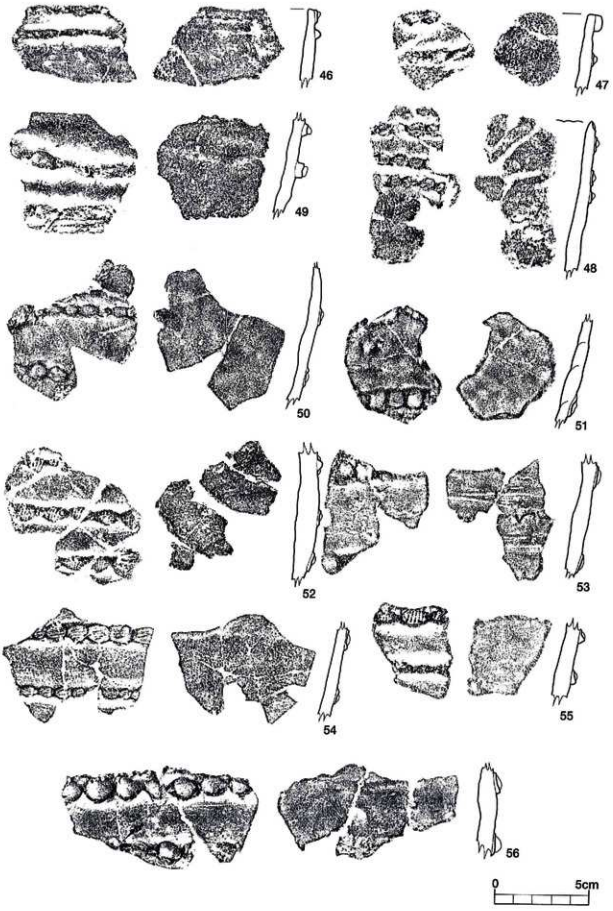
口縁部外側に３条の隆帯が貼り付けられるものである。隆帯が密接するものと，離れるものが



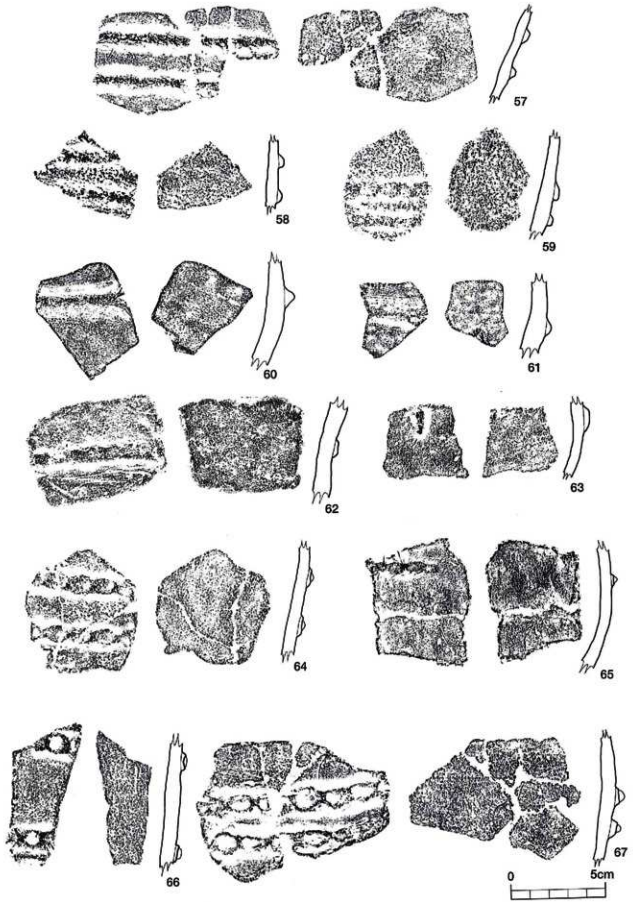
第34図　Ⅰ類土器(1)



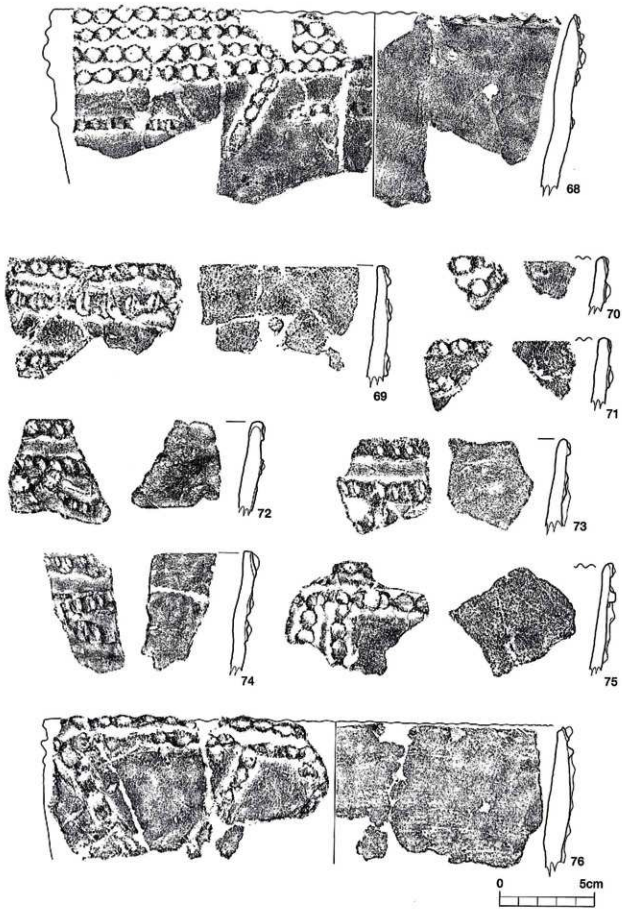
第35図　Ⅰ類土器(2)



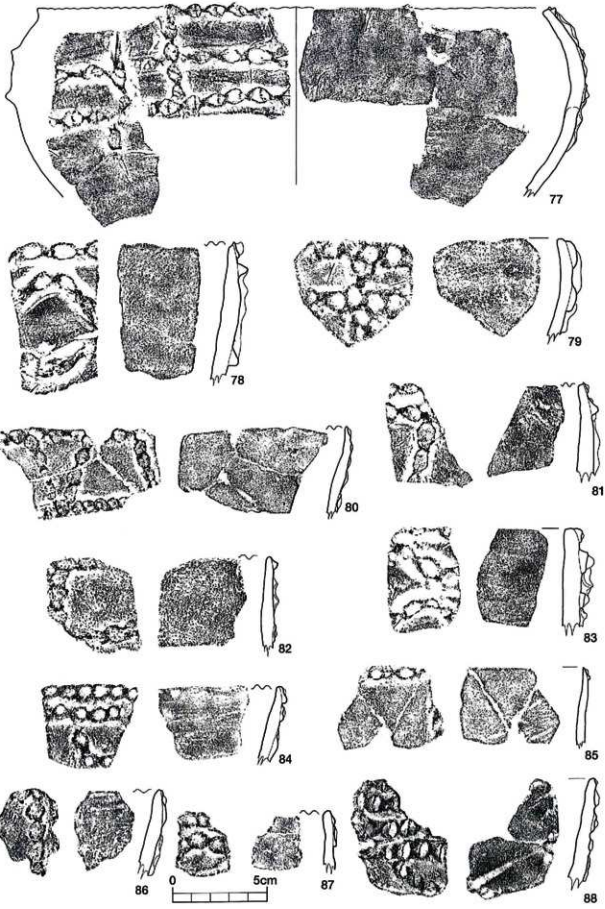
第36図　Ⅰ類土器(3)



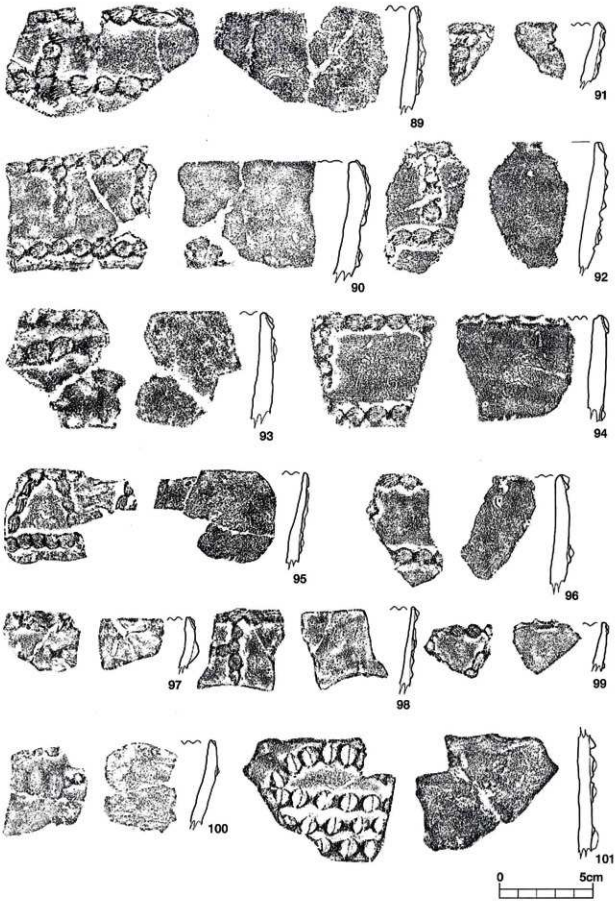
第37図　Ⅰ類土器(4)・Ⅶ類土器



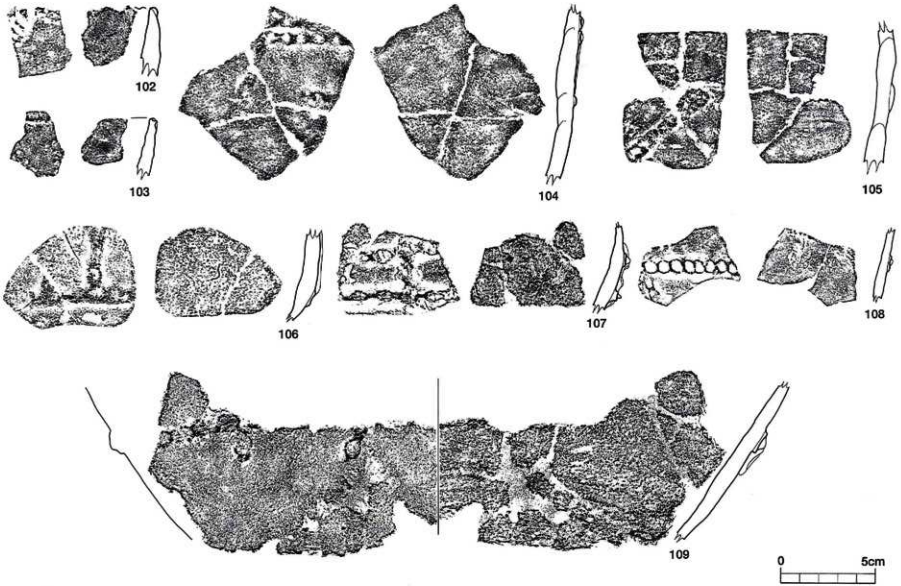
第38図　Ⅱ類土器(1)



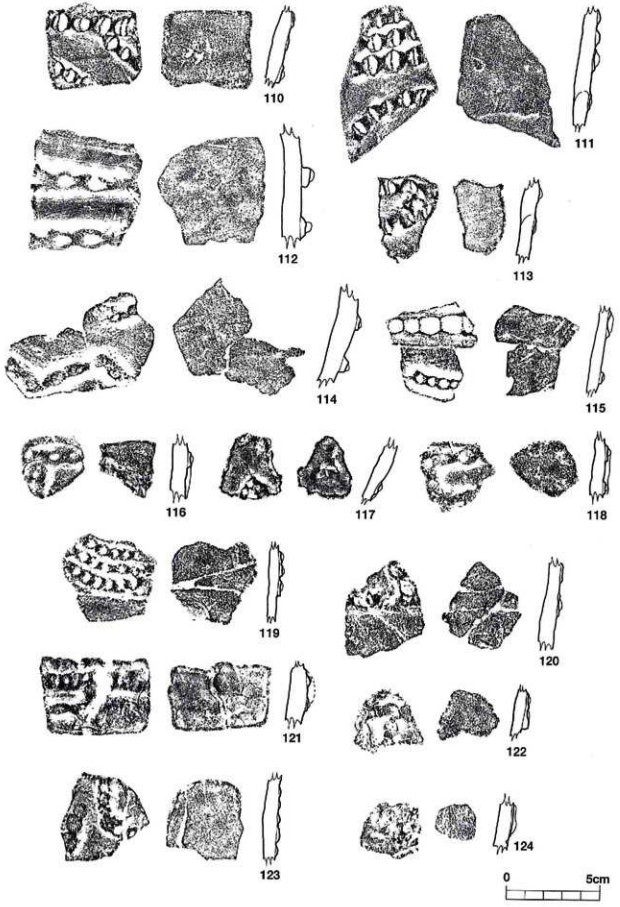
第39図　Ⅱ類土器(2)



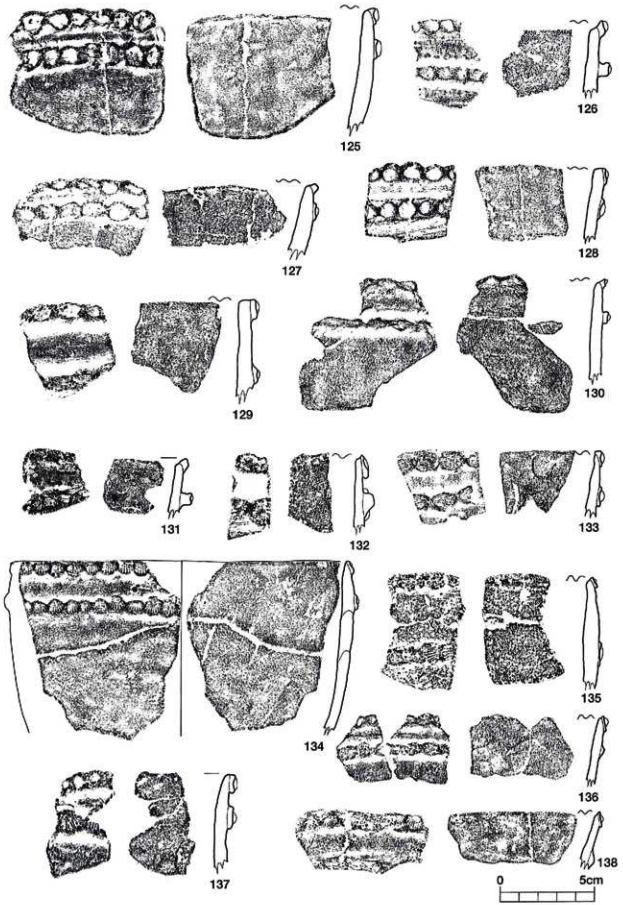
第40図　Ⅱ類土器(3)



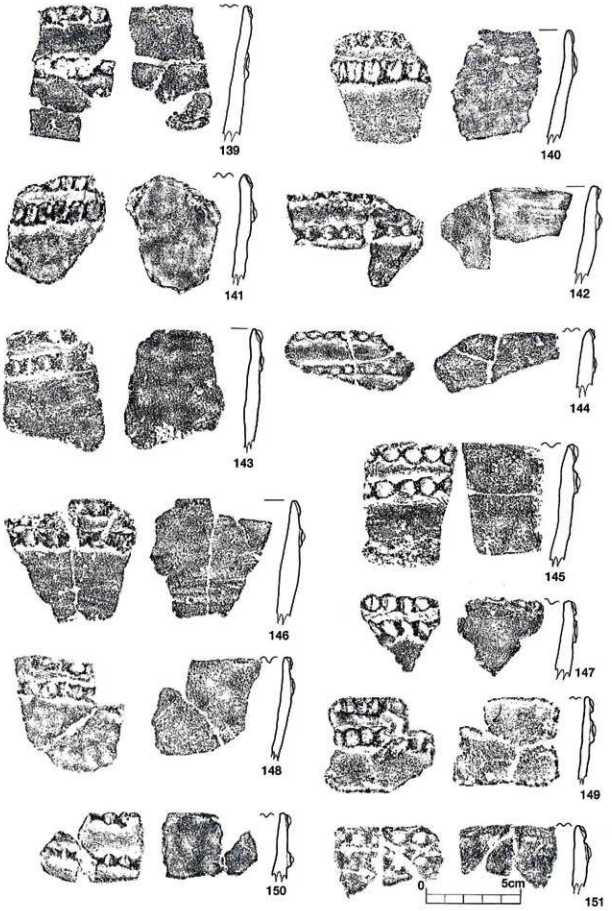
第41図　Ⅱ類土器(4)



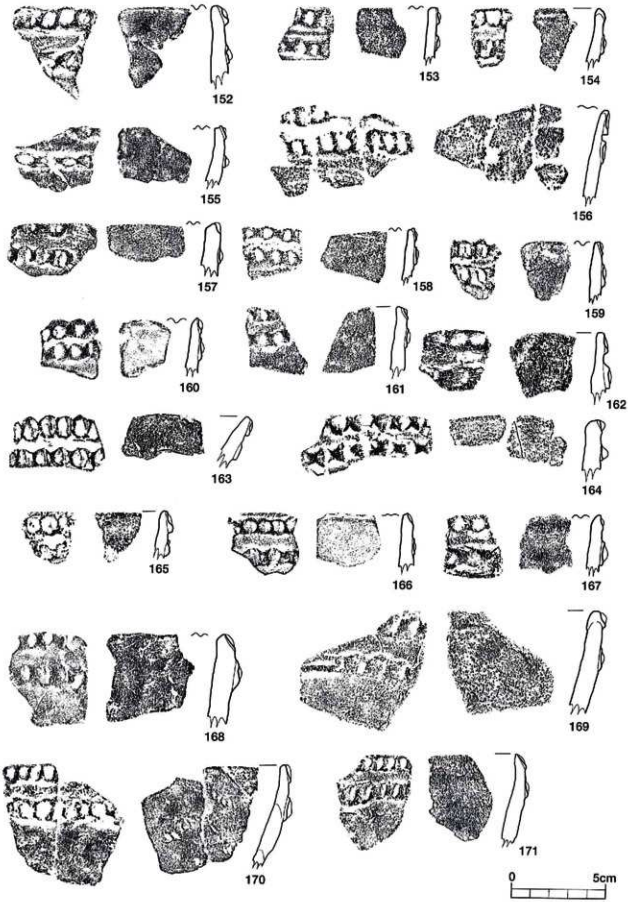
第42図　Ⅱ類土器(5)



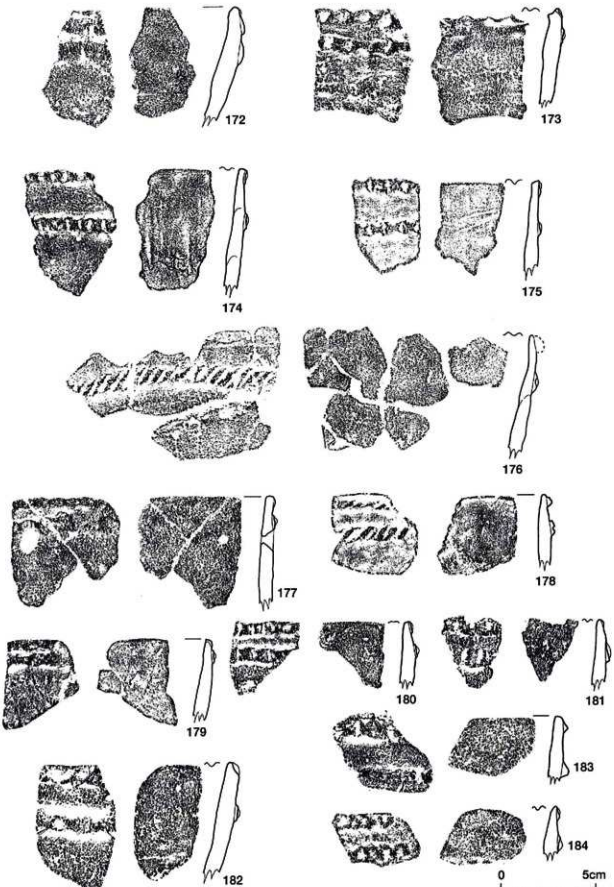
第43図　Ⅲ類土器(1)



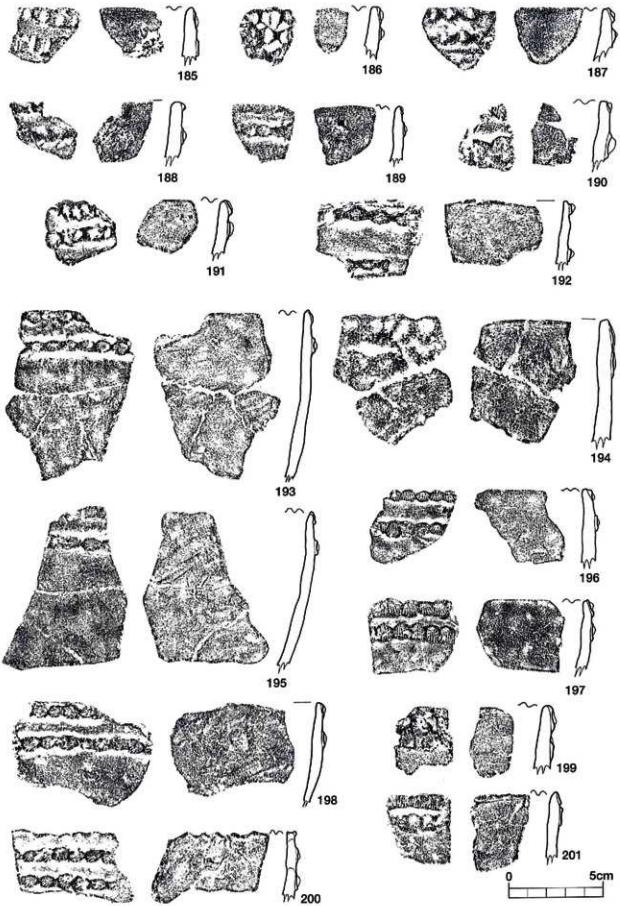
第44図　Ⅲ類土器(2)


152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
0
5cm

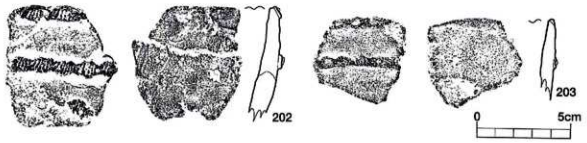
第45図　Ⅲ類土器(3)



第46図　Ⅲ類土器(4)


185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
0
5cm

第47図　Ⅲ類土器(5)



第48図　Ⅲ類土器(6)

ある。隆帯の指頭による施文が多く，266～270と316～330が貝殻の殻頂による押圧である。器形はやや外反する口縁部と内湾する口縁部があるが，外開きの砲弾形となる。

Ⅴ類（第60図～第62図　331～358）

口縁部外側に4条以上の隆帯を貼り付けるものである。胴部上半はほぼ直立するかやや外傾するボール形の器形から円筒形に近くなると考えられる。356が貝殻施文であるが施文具に貝殻があまりみられない。

Ⅵ類（第63図～第64図　359～380）

隆帯が2～4条口縁部に集線化し，一帯となって刻目等が施されるものである。359・360・364・367・369・371・372・375～378はヘラ状工具により縦方向の刻みを一緒に施されている。380は隆帯上にヘラ状工具により，短凹線を連続して押引いている。

Ⅶ類（第37図・第69図～第70図　57・58・438～454）

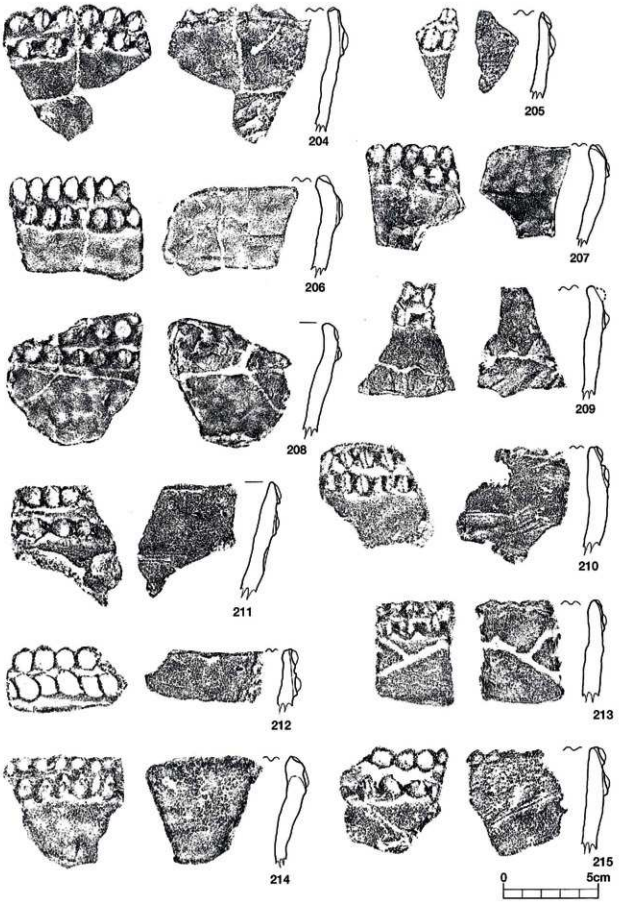
隆帯を両側からつまむことで羽状の文様が刻まれる。ヘラ状のもので幅が狭く密に羽状になるものと（438～446），羽状に沈線や刺突を施すもの（58・447），指頭で幅広に　押さえられるもの（449～454）がある。

Ⅷ類（第71図～第72図　455～479）

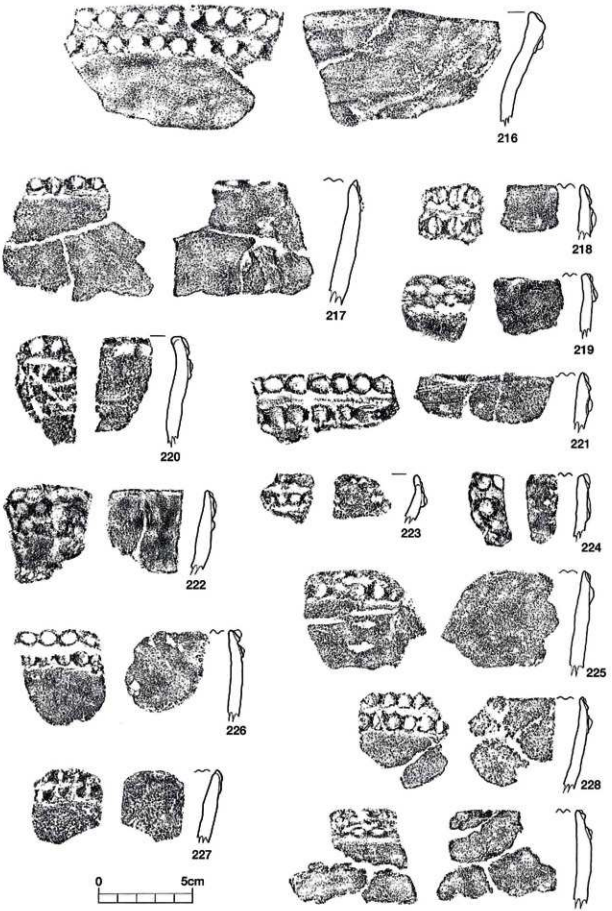
口縁部外側に刺突文を施すものである。複数段施文される。457・467・468・473・475・476は隆帯上に施文されるものである。円形（455・460・461・464）・半円形（455・462・463・468・470・472）・爪形状（459・474）・円管状（467・473・476）の刺突がなされる。X類と関係が深いものと考えられる。477～479は，口縁端部に刻みを持ち　口縁下に1条の隆帯をつけるもので，口唇部と隆帯の間に幅2cmにわたって爪形の刺突を施す。

Ⅸ類（第73図　480～486）

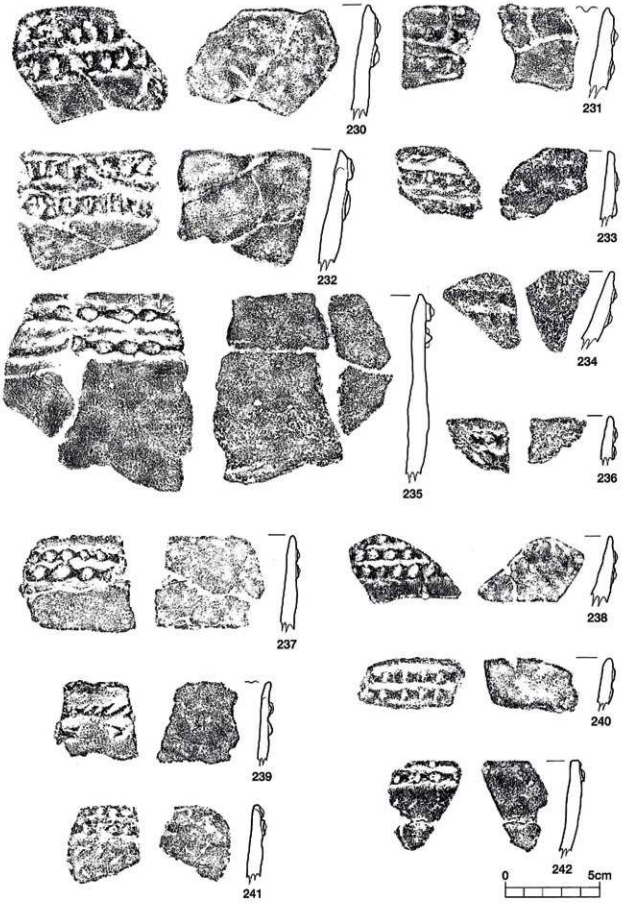
口縁部外側に短い凹線により，文様を施すもので，口縁端部には貝殻による押圧の刻みがなされている。縦方向の短凹線の下に，羽状に短凹線を施している。ほぼ1個体とみなされる。



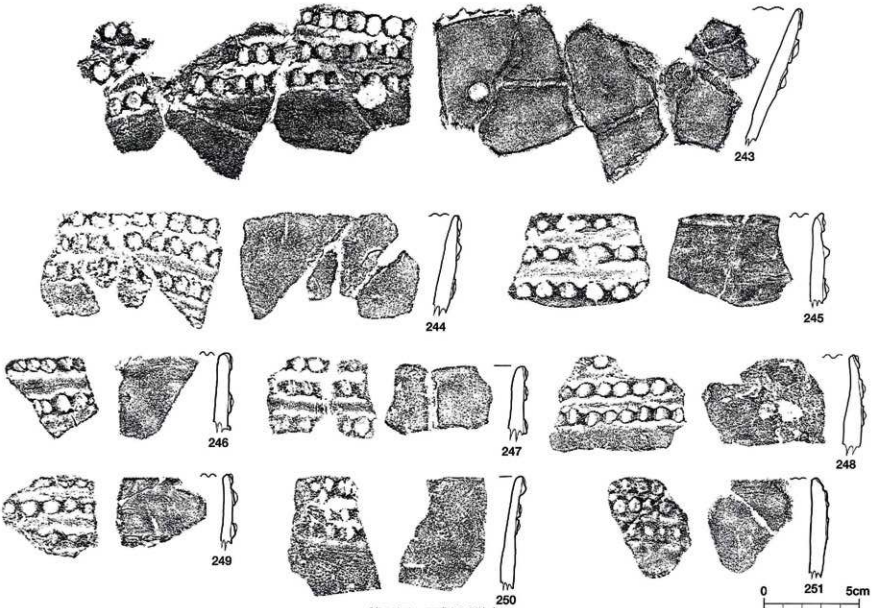
第49図　Ⅲ類土器(7)



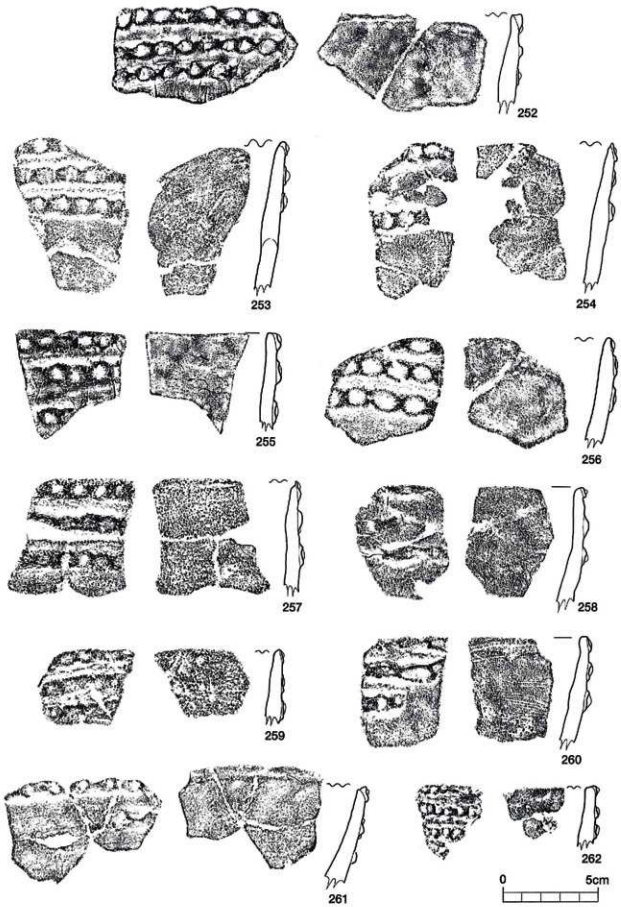
第50図　Ⅲ類土器(8)



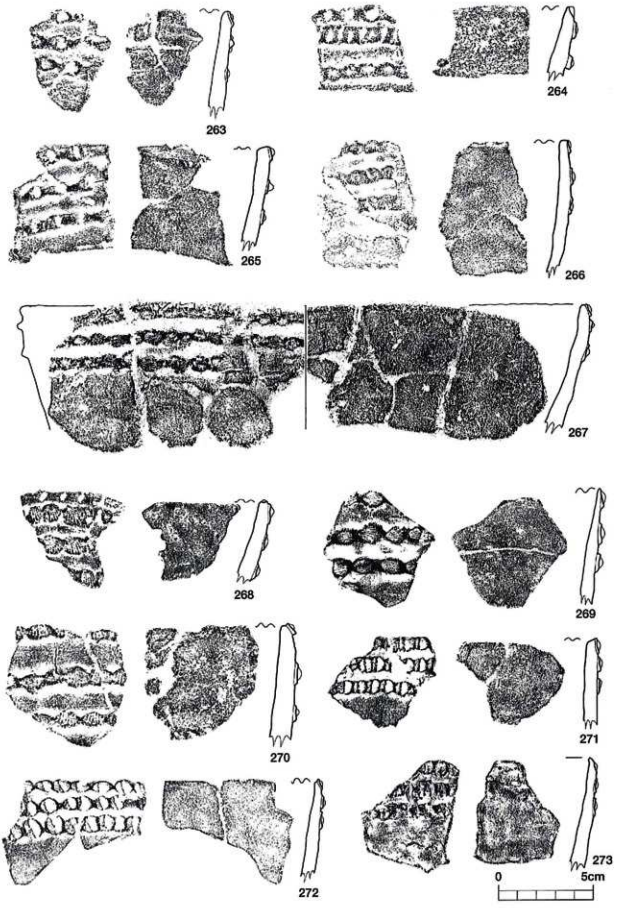
第51図　Ⅲ類土器(9)



第52図　Ⅳ類土器(1)

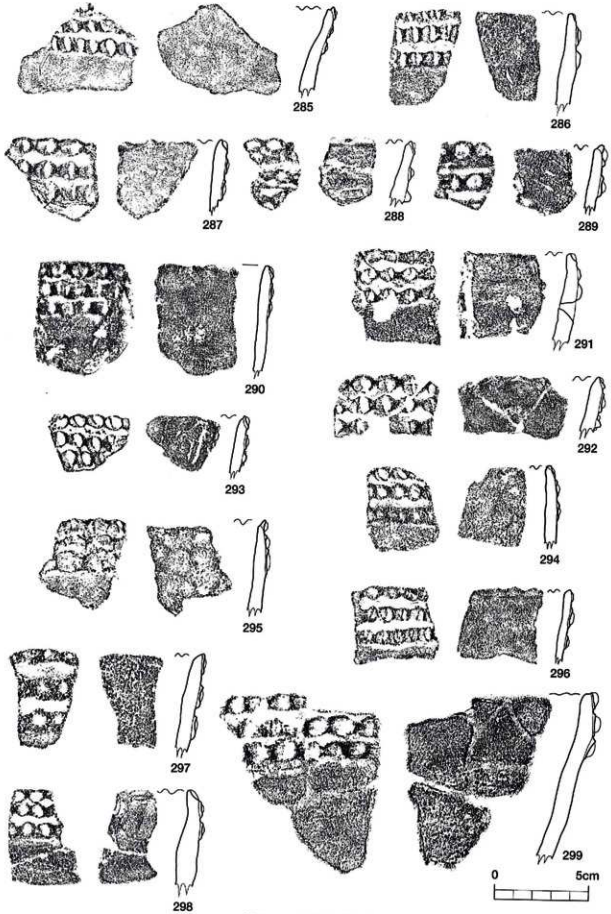


第53図　Ⅳ類土器(2)

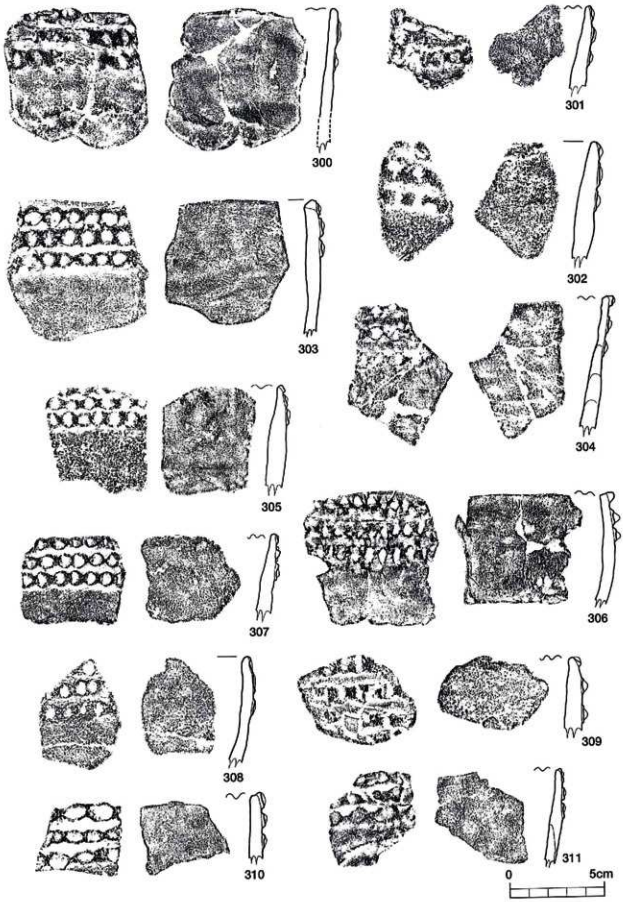


第54図　Ⅳ類土器(3)

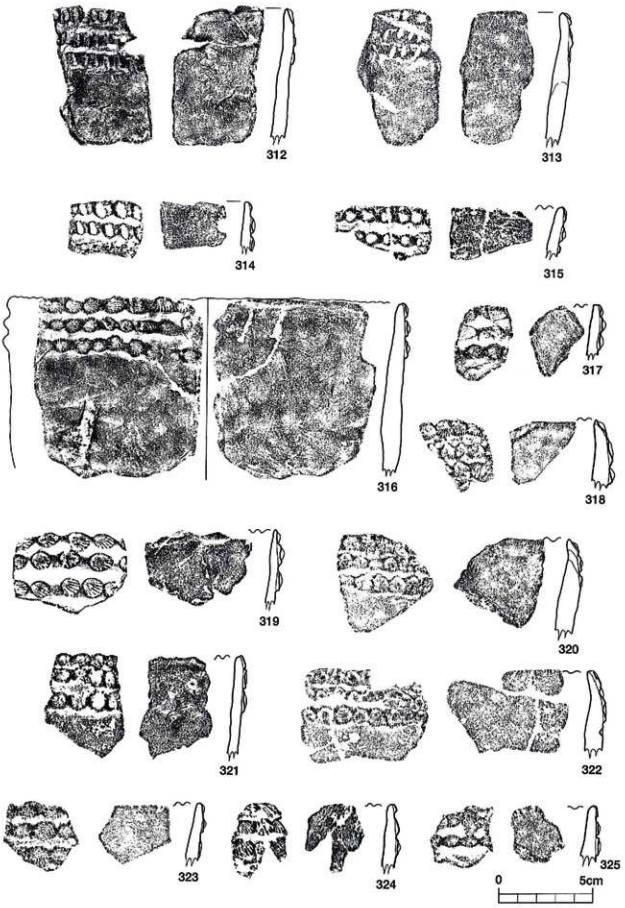
第55図　Ⅳ類土器(4)



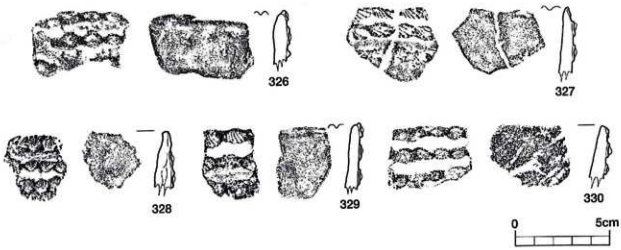
第56図　Ⅳ類土器(5)



第57図　Ⅳ類土器(6)



第58図　Ⅳ類土器(7)



第59図　Ⅳ類土器(8)

X類（第74図～第76図　487～528）

文様は口縁端部により，円筒形の器形をなす。隆帯の有無でａ類とｂ類に細分した。器面は調整具によるナデ調整が表裏とも見られる。隆帯の貝殻施文がみられるようになる。

Ｘａ類（第74図～第75図　487～514）

口縁端部下に隆帯を施すもので，493・502・503・505・507～514は貝殻の殻頂を隆帯上に押圧する。

Ｘｂ類（第76図　515～528）

口縁端部に刻目を施す円筒形の土器である。515は貝殻殻頂を押圧する。

小型深鉢形土器（第65図～第66図　381～424）

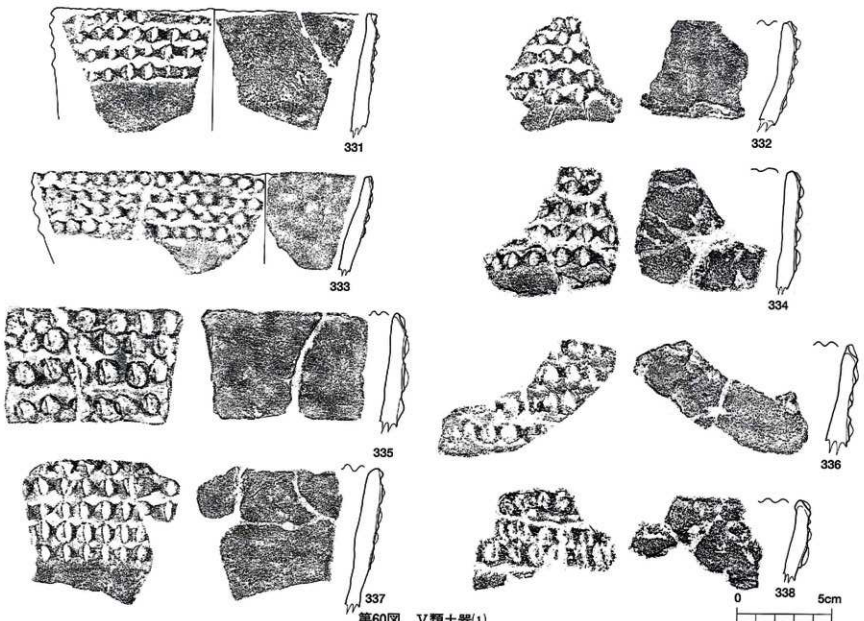
特に器壁が薄手で，小さな土器の一群を分離してみた。Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ類に伴うものであろう。浅鉢形土器と同様にセット関係が把握できる。420～424は無文の小型土器である。

浅鉢形土器（第67図～第68図　425～437）

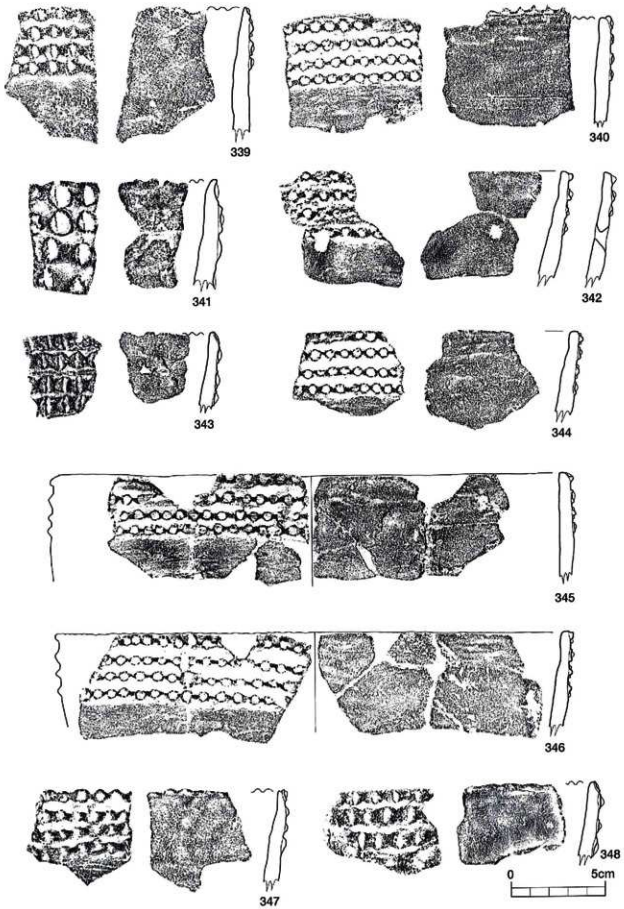
浅鉢形から皿状の器形の一群である。前述した分類に入れようとすれば，隆帯の数から425・426がⅣ類，430・431がⅢ類に含むことが可能である。その他についても深鉢形土器と伴っていたものであろう。

433は内側に隆帯を持つものとしたが，類例が乏しい。Ⅶ類とした446も皿状の器形の内側に隆帯があることとなる。同様の個体が掲載していないものが４点ほどあるが，類例の増加を待ちたい。

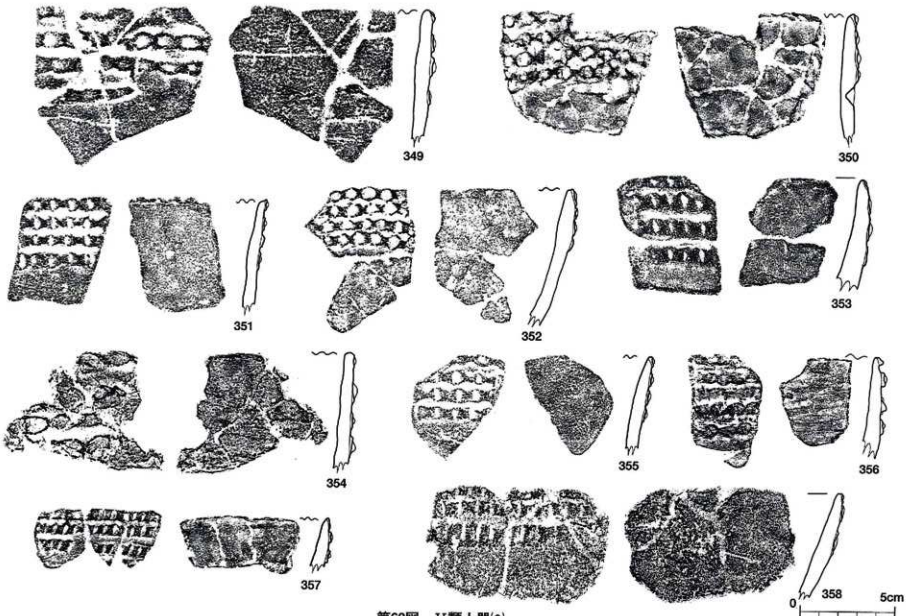
第77図～第88図の529～688はⅠ～Ⅴ類土器の胴部で，第89図～第101図の689～815は無文の胴部である。外面はナデられているが，内面調整は調整具によるナデがみられ，一部条痕化する。条痕を残すものも大部分はナデ消してある。第101図～第104図の816～840は底部である。第105図の841～854は土製円盤としたが，類例の増加を待ちたい。



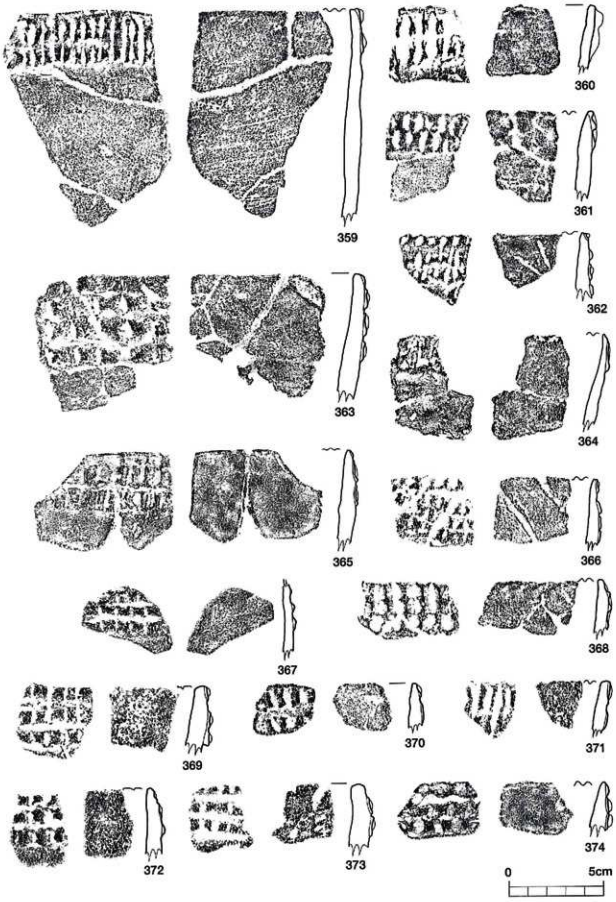
第60図　V類土器(1)



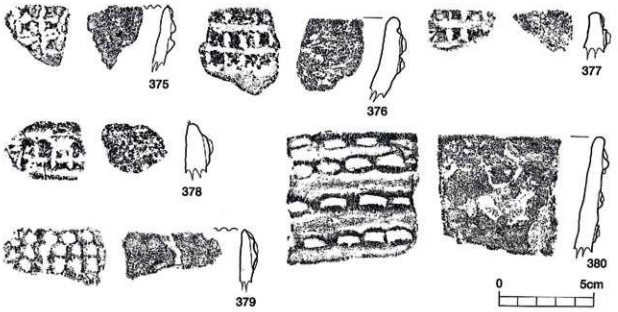
第61図　V類土器(2)



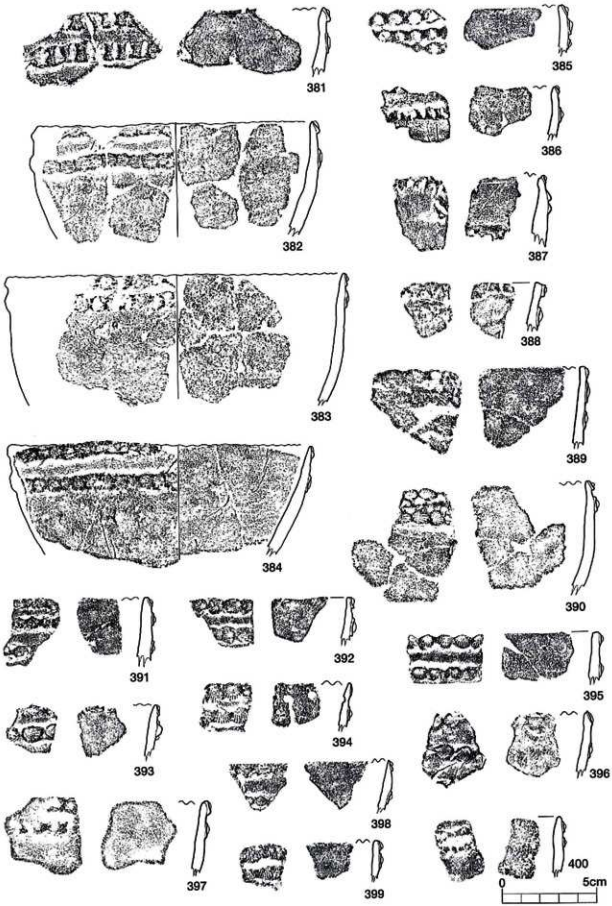
第62図　V類土器(3)


359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
0
5cm

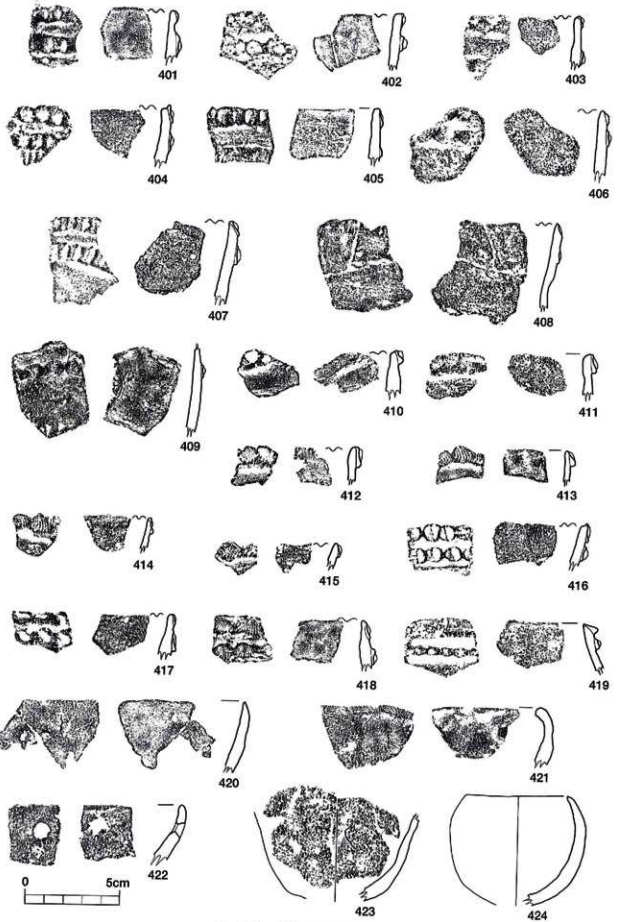
第63図　Ⅵ類土器(1)



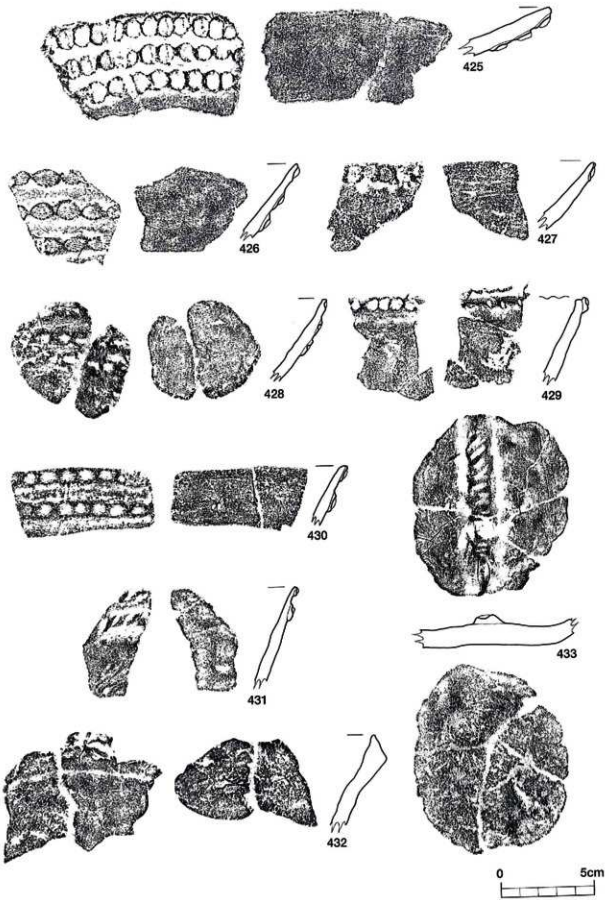
第64図　Ⅵ類土器(2)



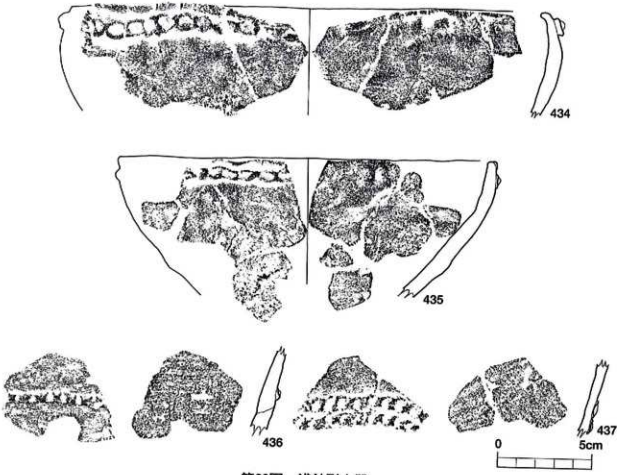
第65図　小型深鉢形土器(1)



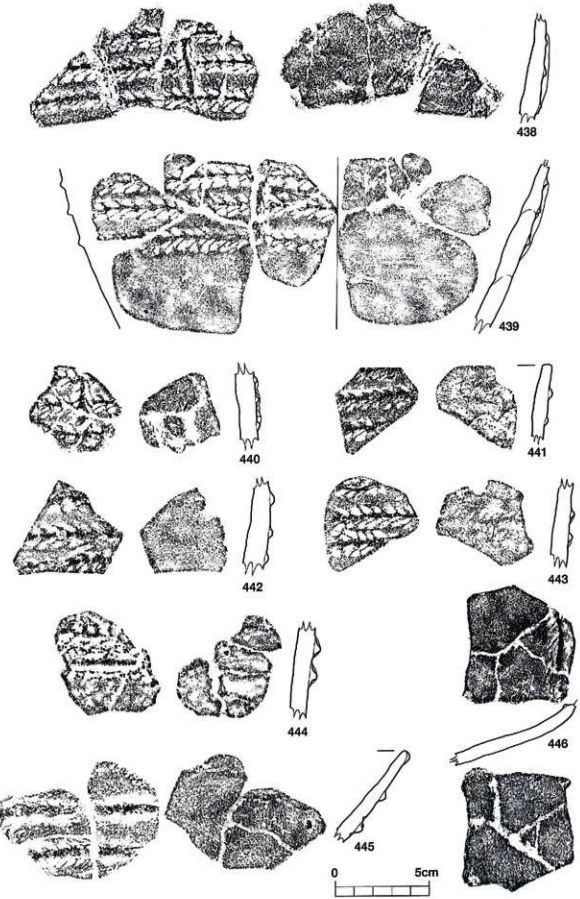
第66図　小型深鉢形土器(2)



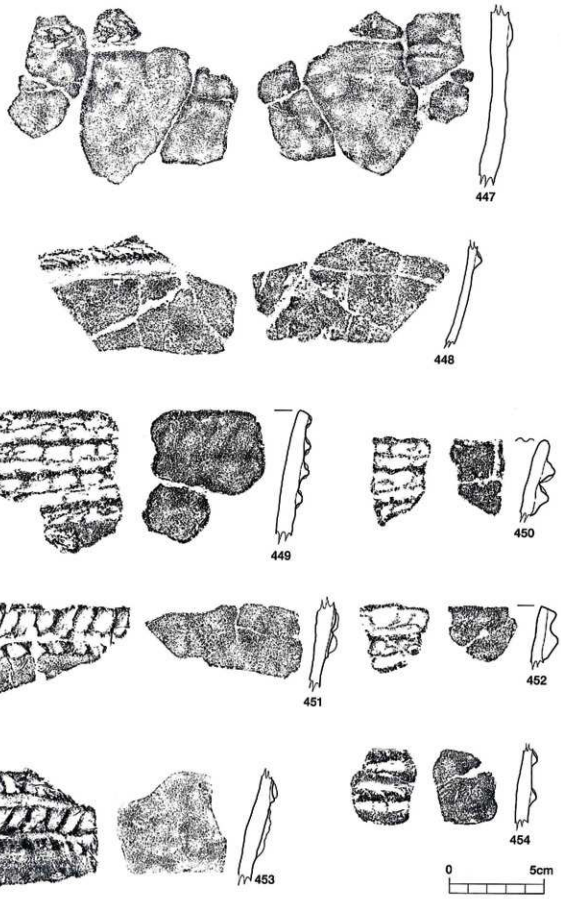
第67図　浅鉢形・皿形土器



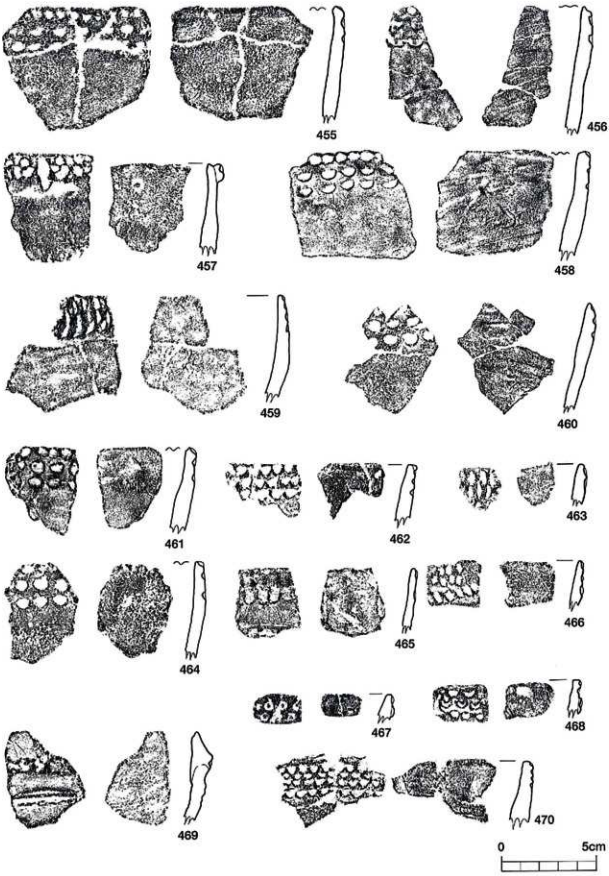
第68図　浅鉢形土器



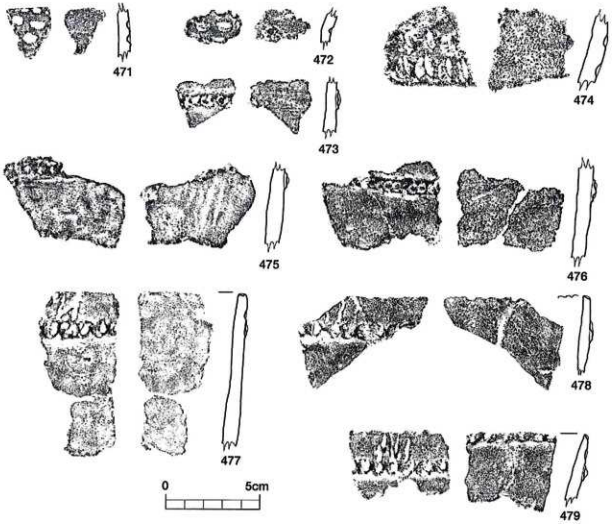
第69図　Ⅶ類土器(1)



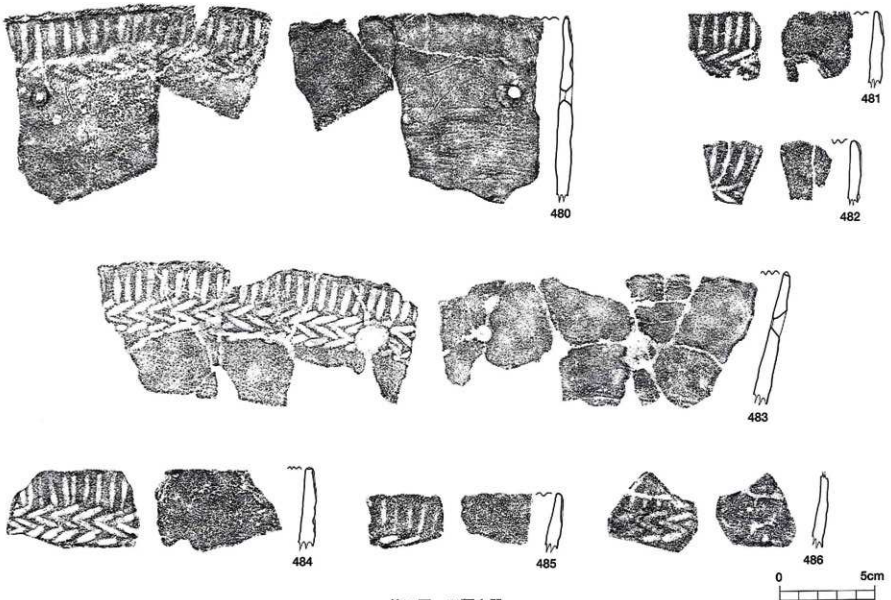
第70図　Ⅶ類土器(2)


455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
0
5cm

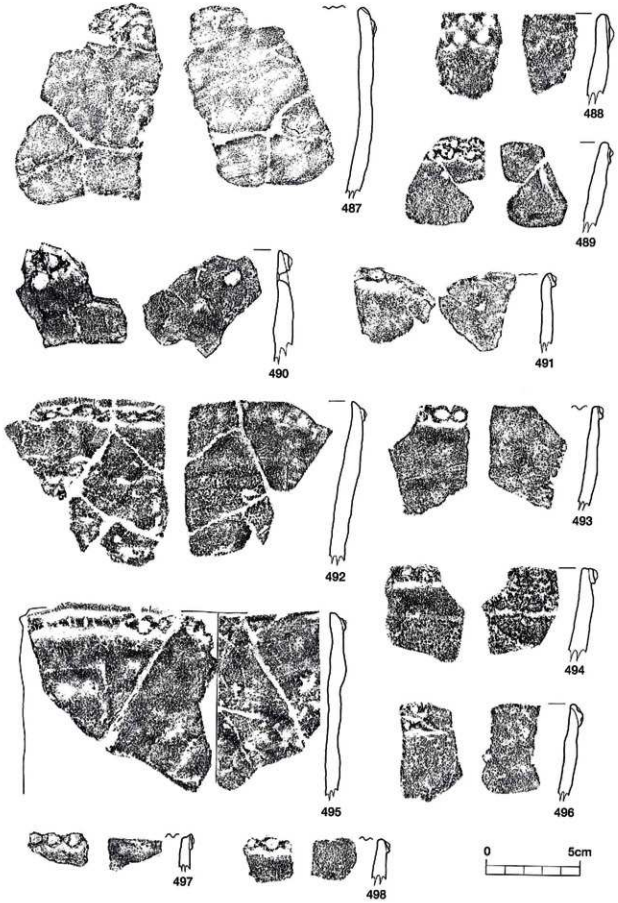
第71図　Ⅷ類土器(1)



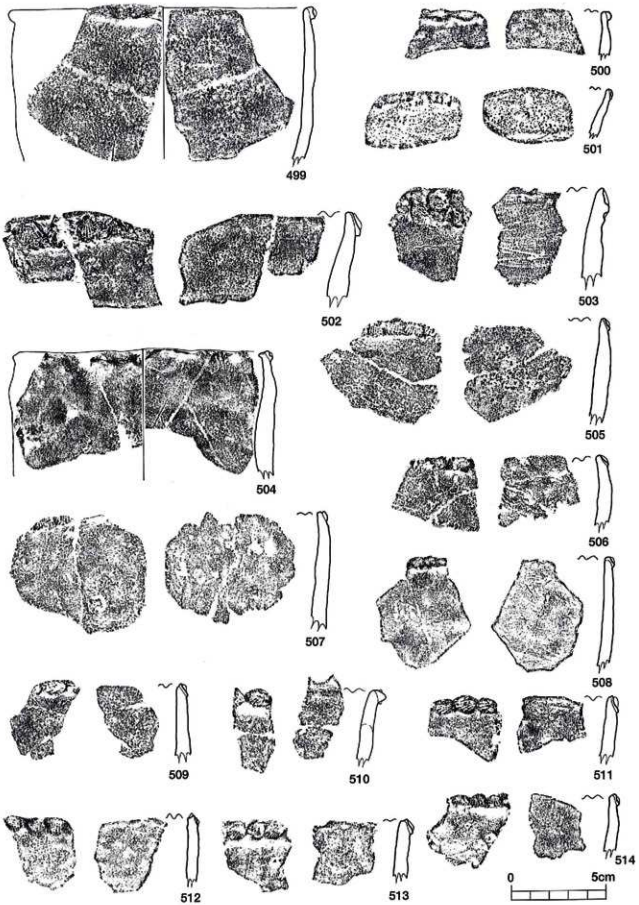
第72図　Ⅷ類土器(2)



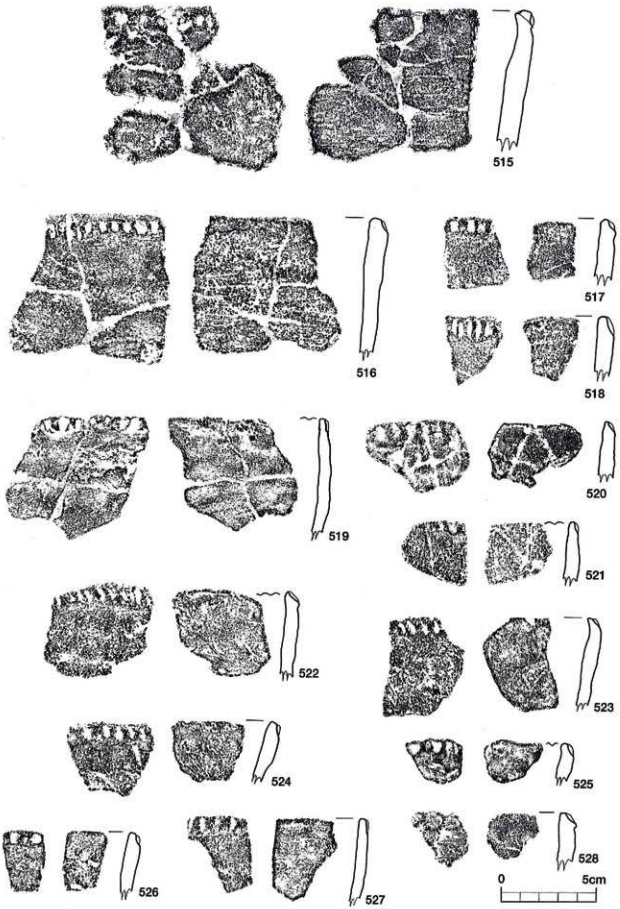
第73図　IX類土器



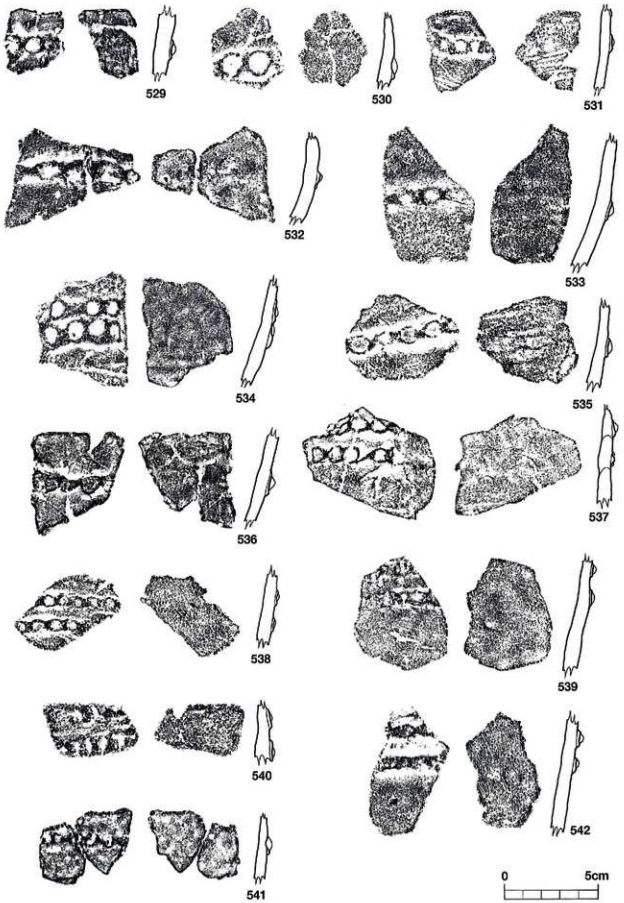
第74図　X類土器(1)


499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
0
5cm

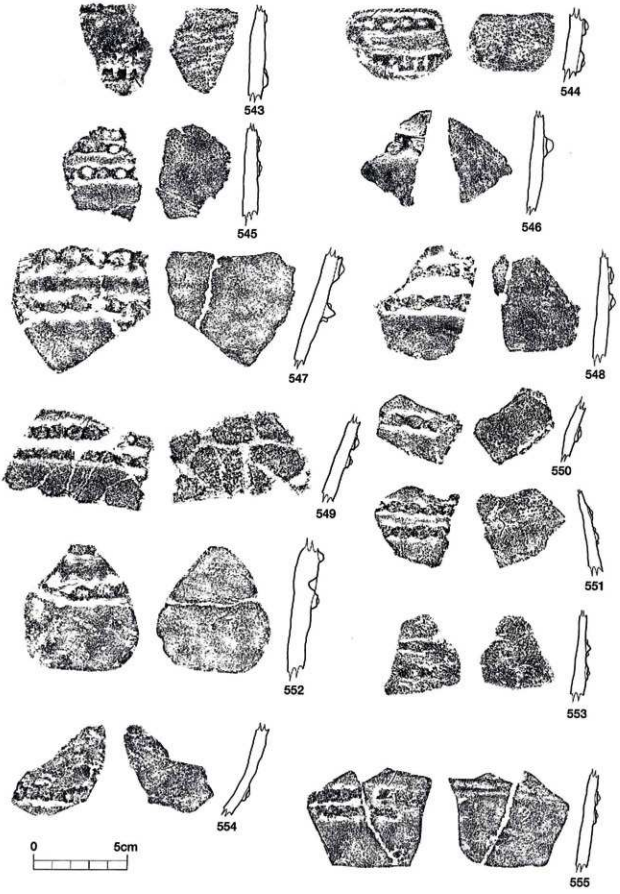
第75図　X類土器(2)



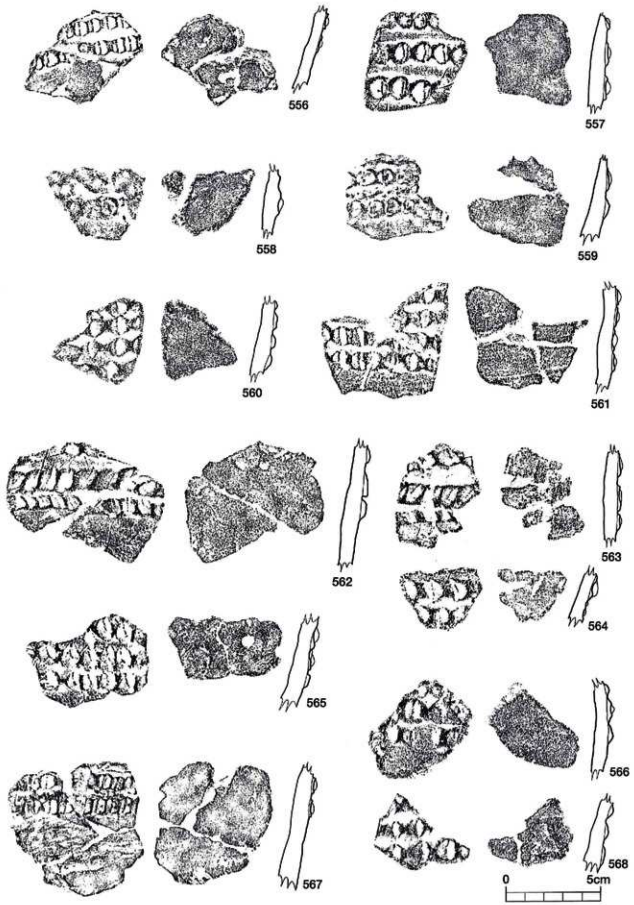
第76図　X類土器(3)



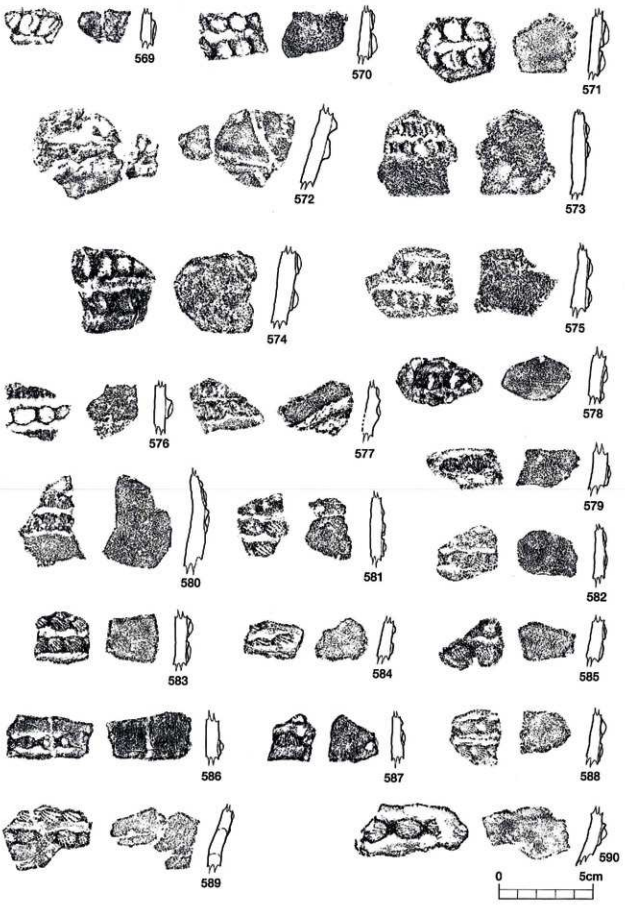
第77図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(1)



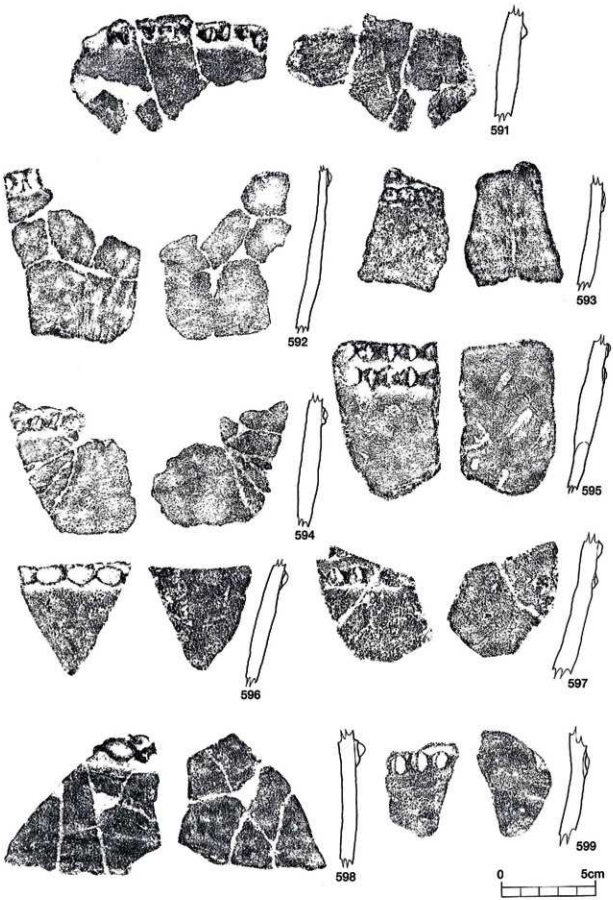
第78図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(2)



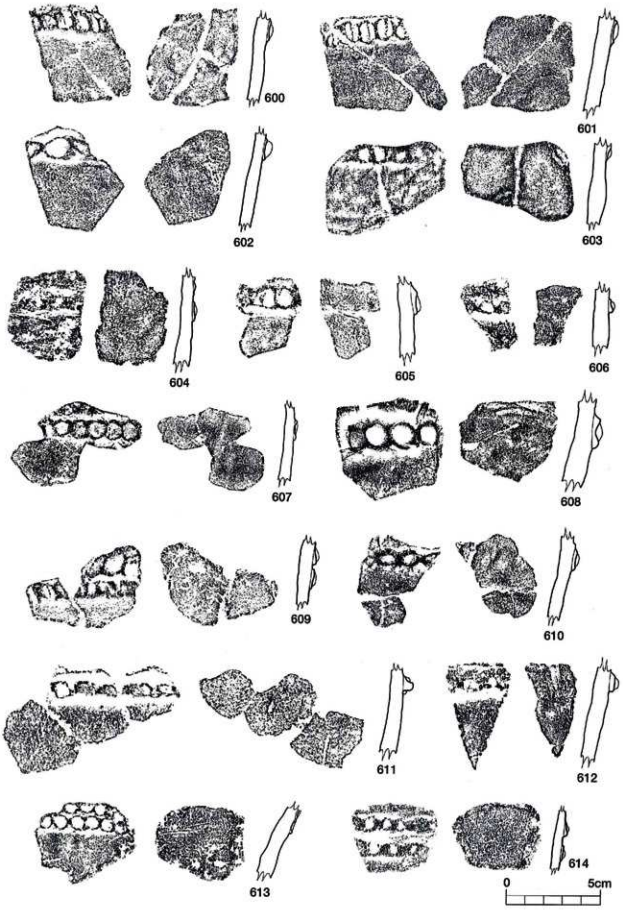
第79図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(3)


569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
0
5cm

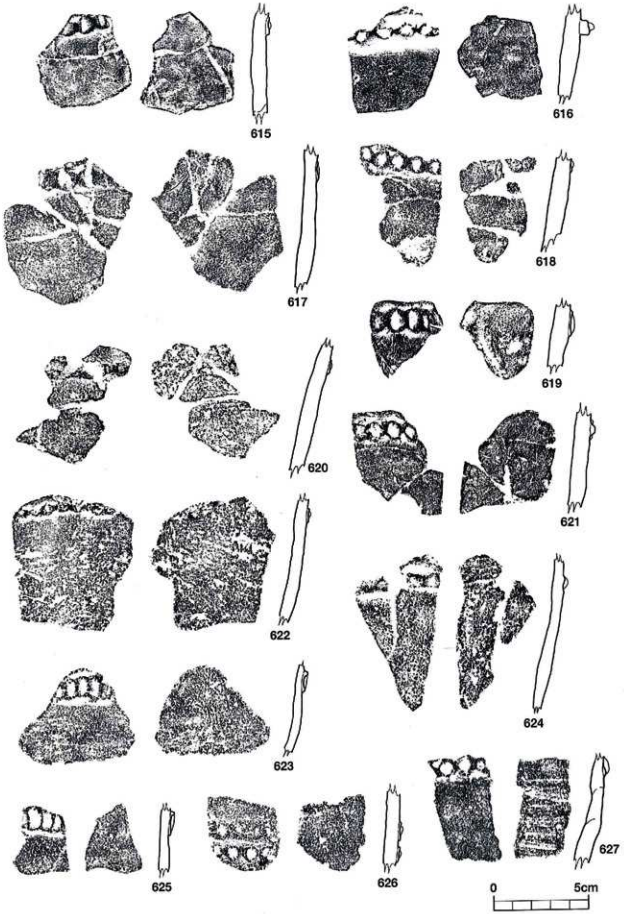
第80図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(4)



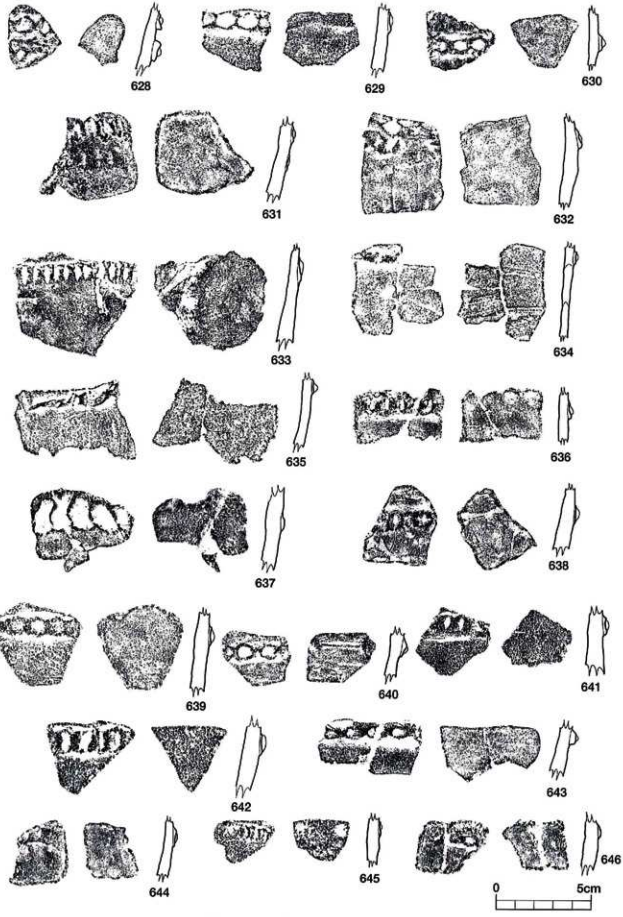
第81図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(5)



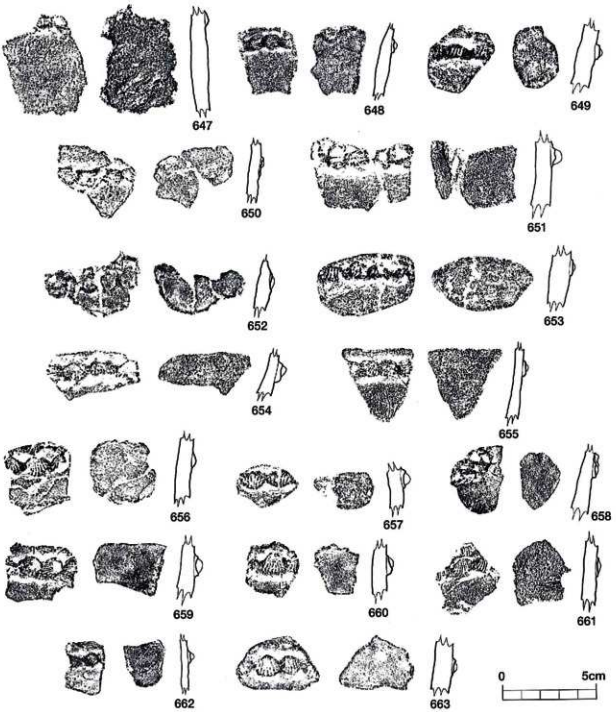
第82図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(6)



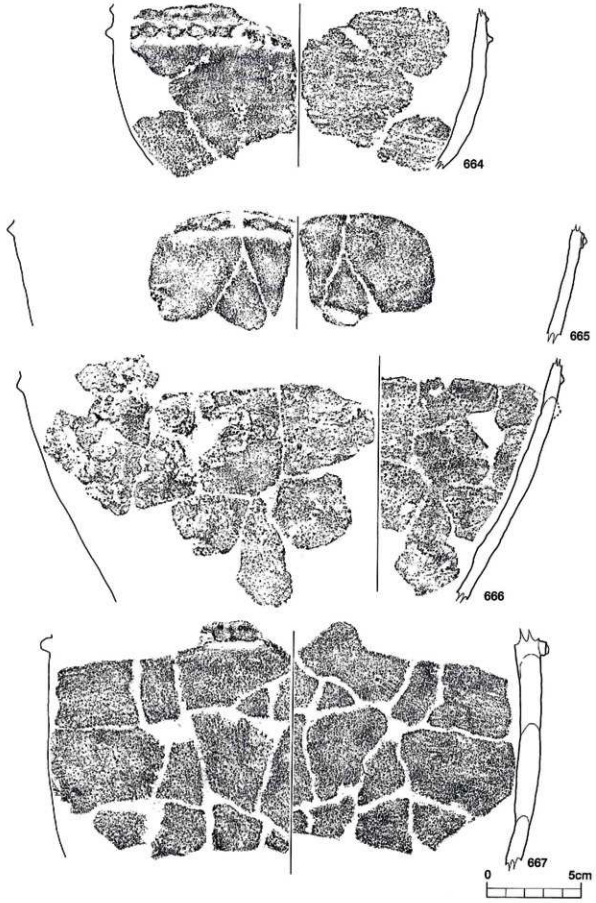
第83図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(7)


628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
0
5cm

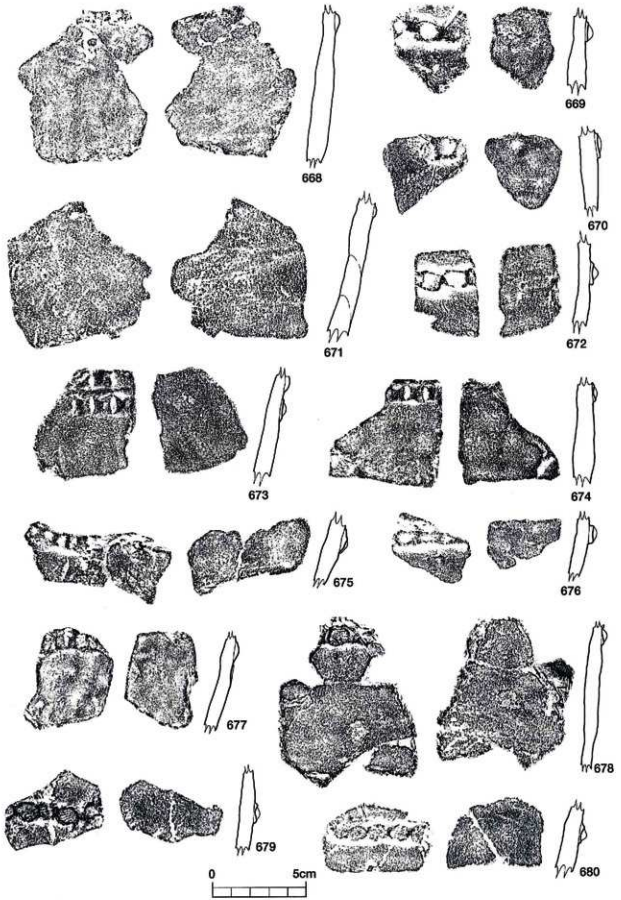
第84図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(8)


647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
0
5cm

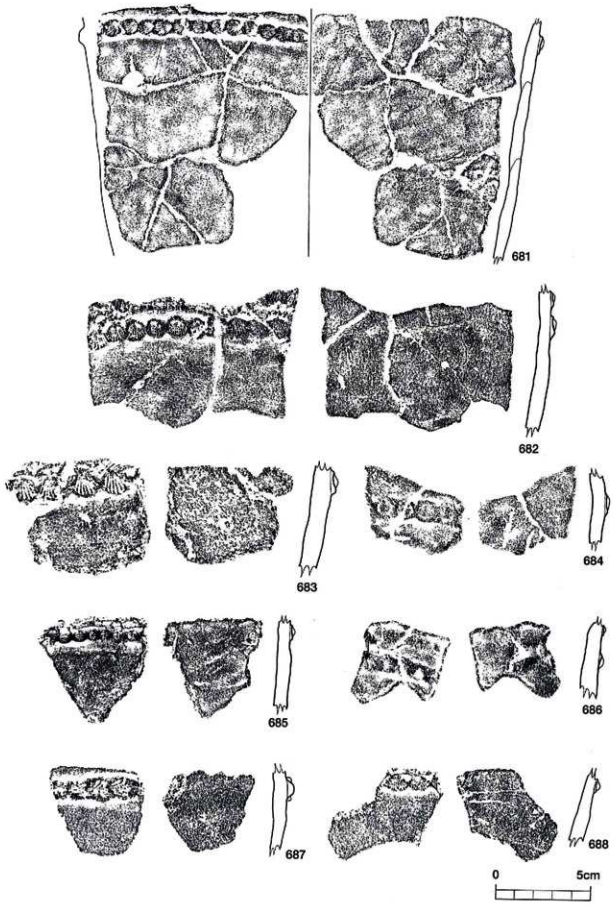
第85図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(9)



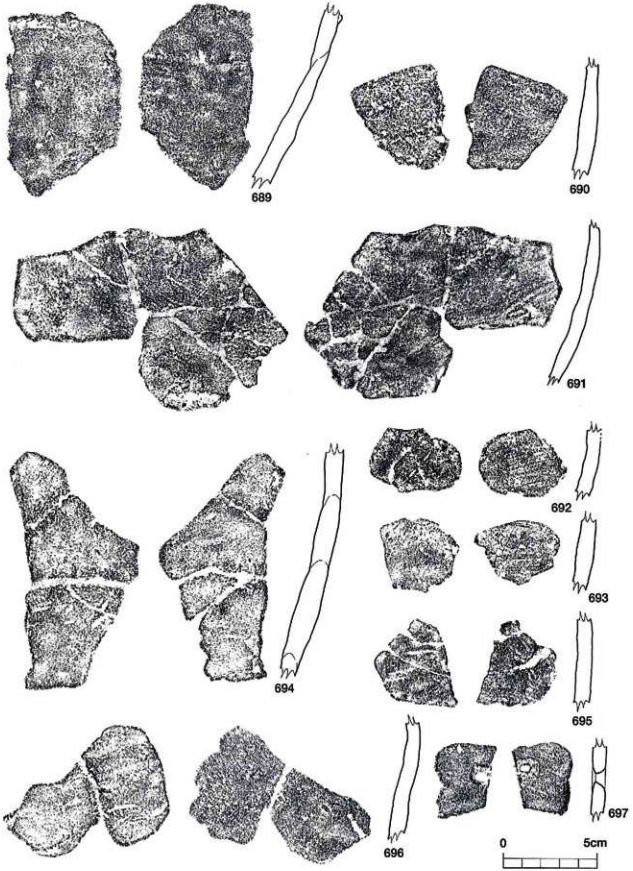
第86図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(10)



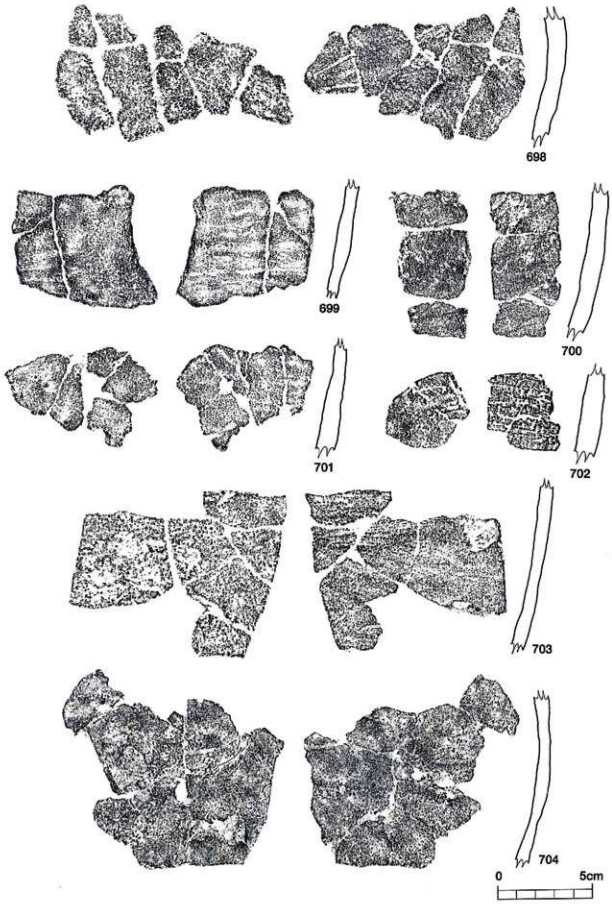
第87図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(11)



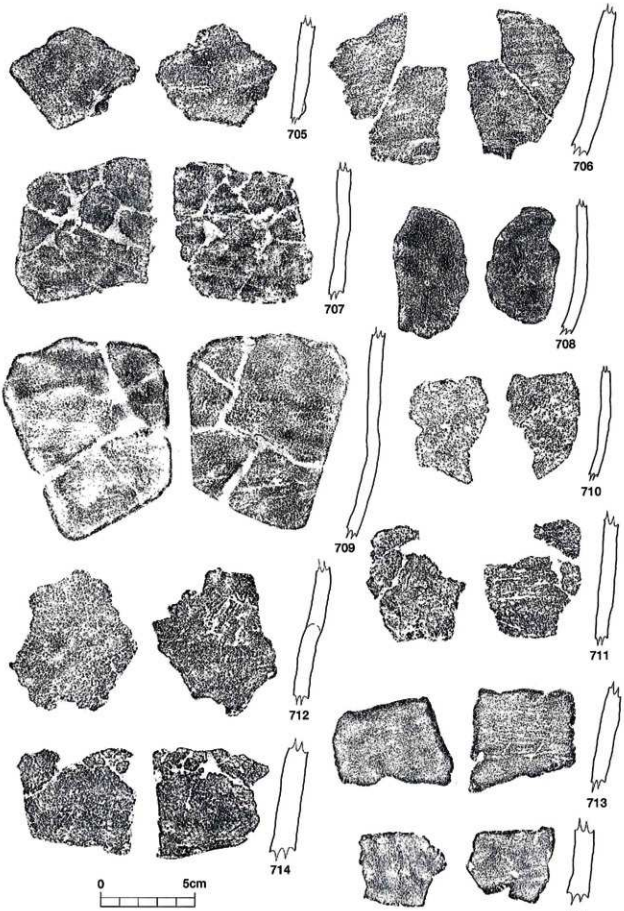
第88図　胴部（Ⅰ～Ⅴ類）(12)



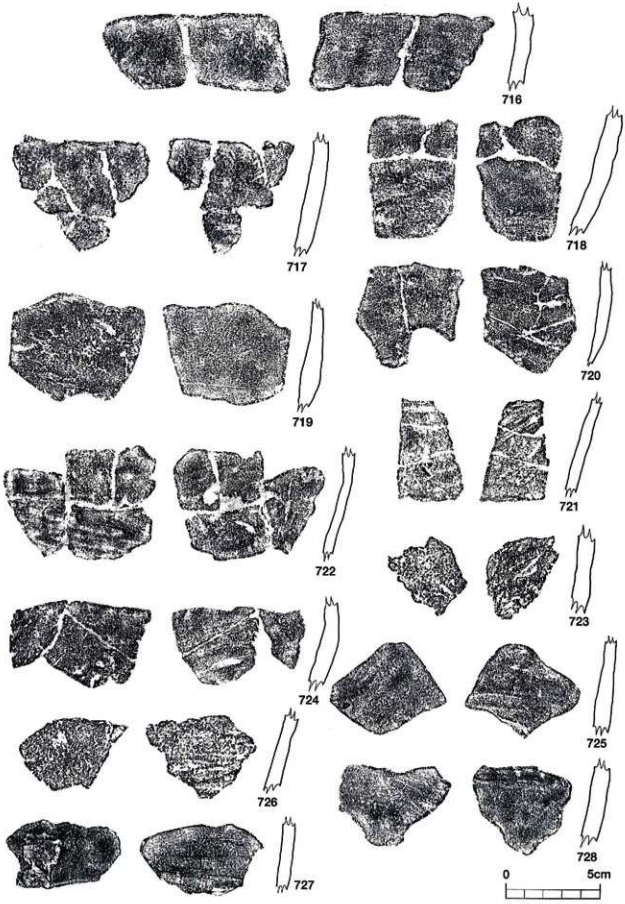
第89図　胴部(13)



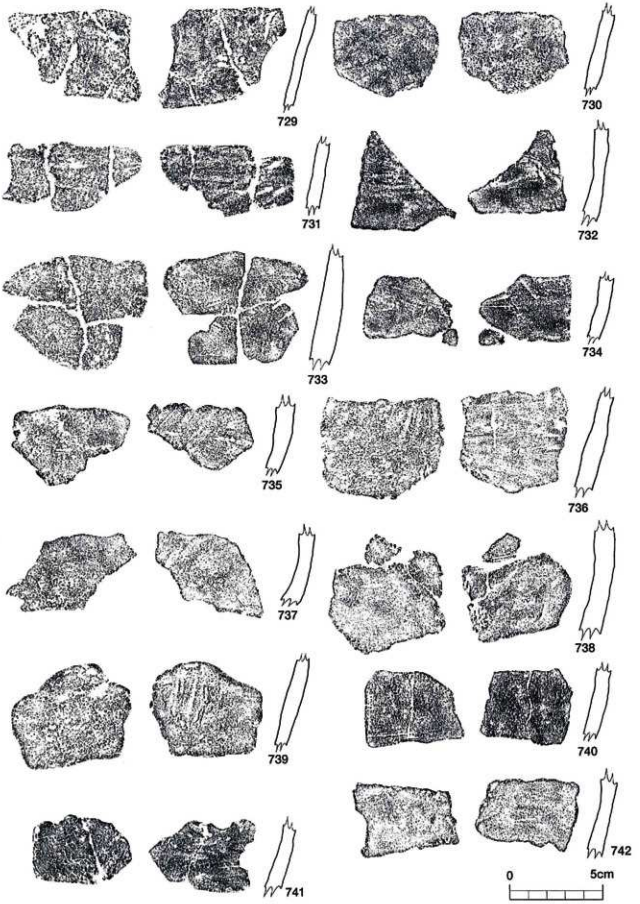
第90図　胴部(14)



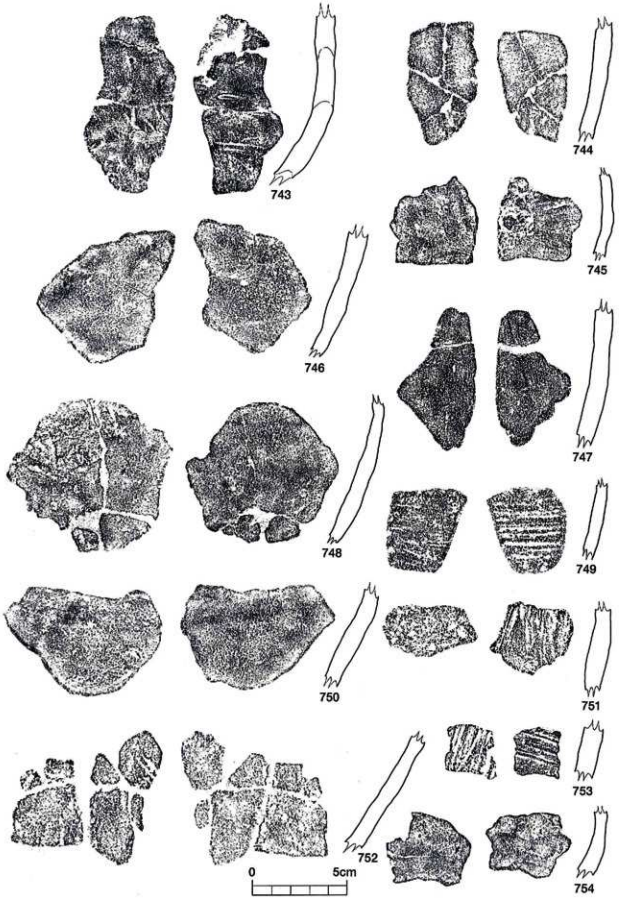
第91図　胴部(15)



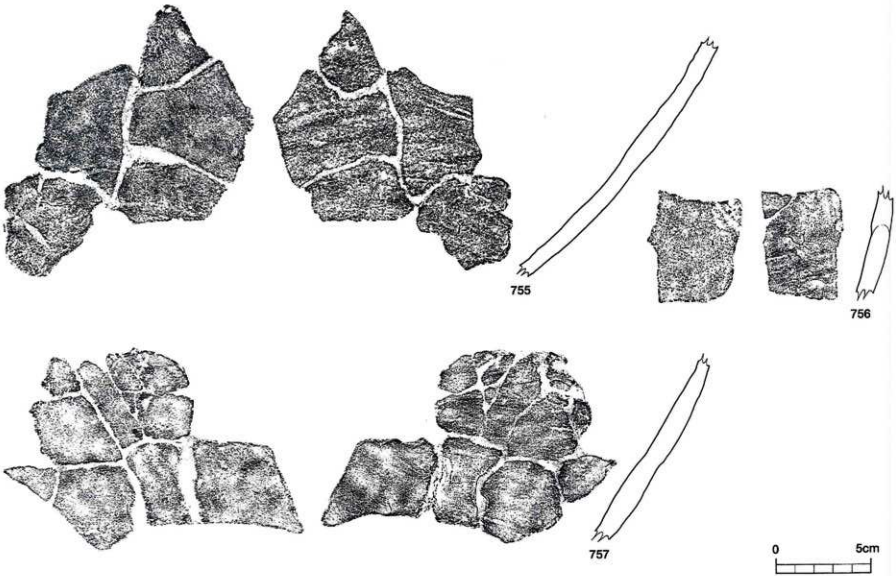
第92図　胴部(16)



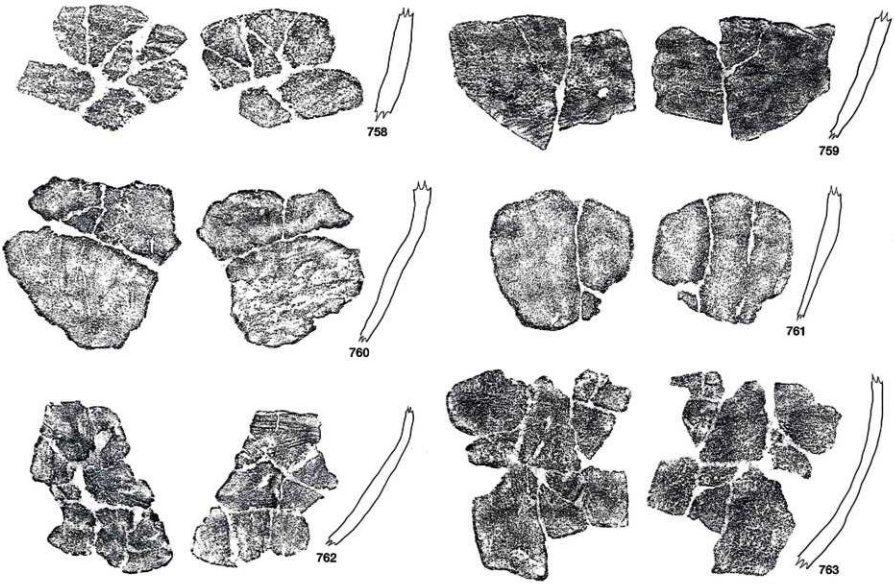
第93図　胴部(17)



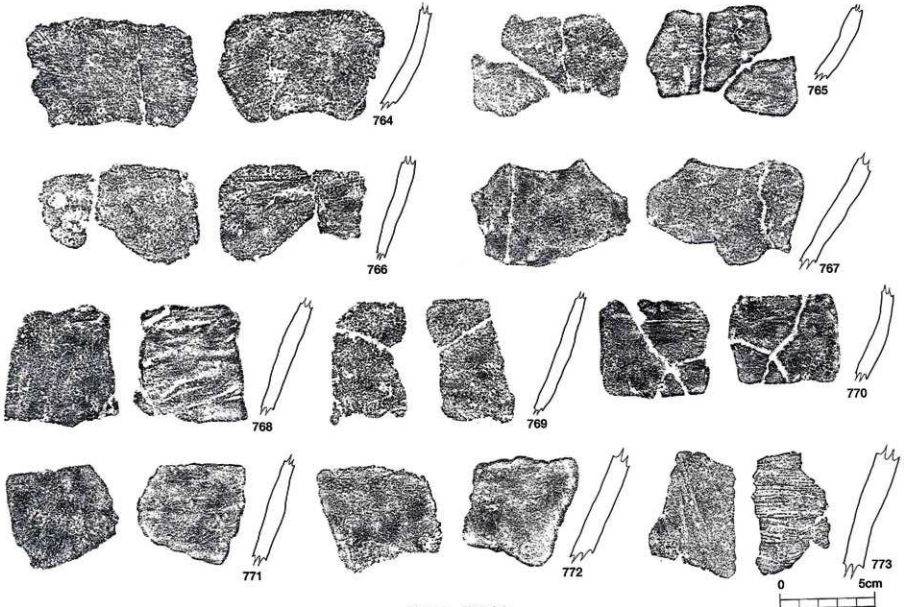
第94図　胴部(18)



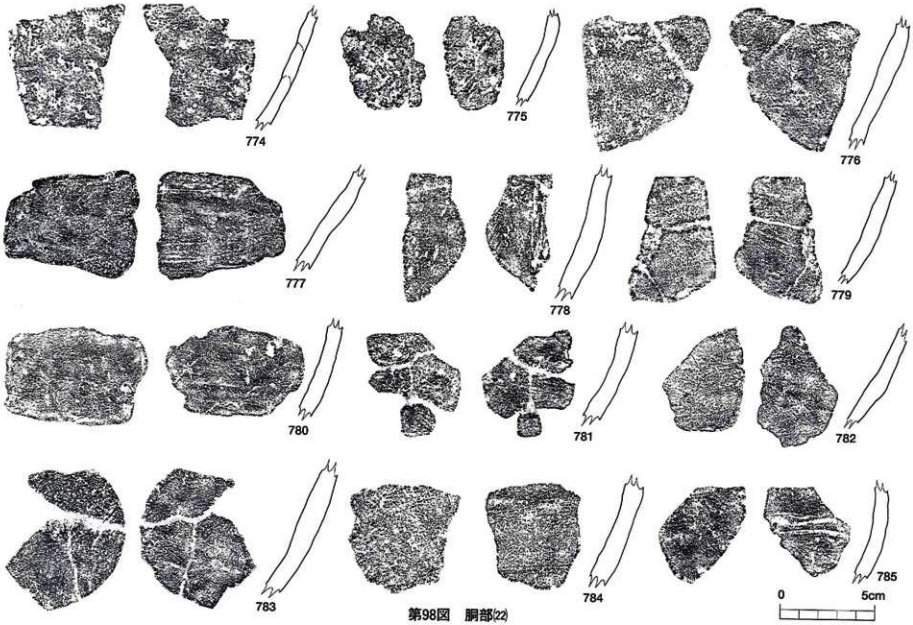
第95図　胴部(19)



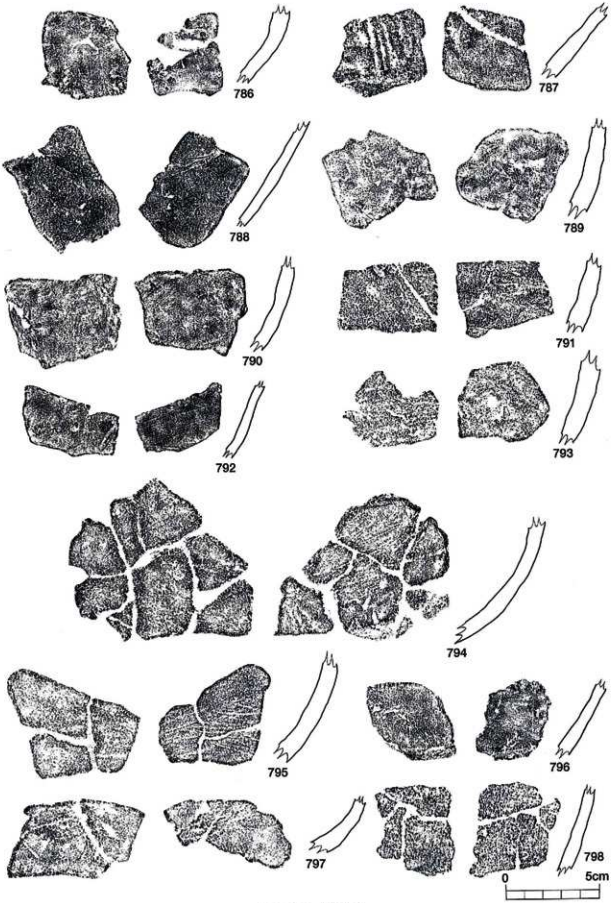
第96図　胴部(20)



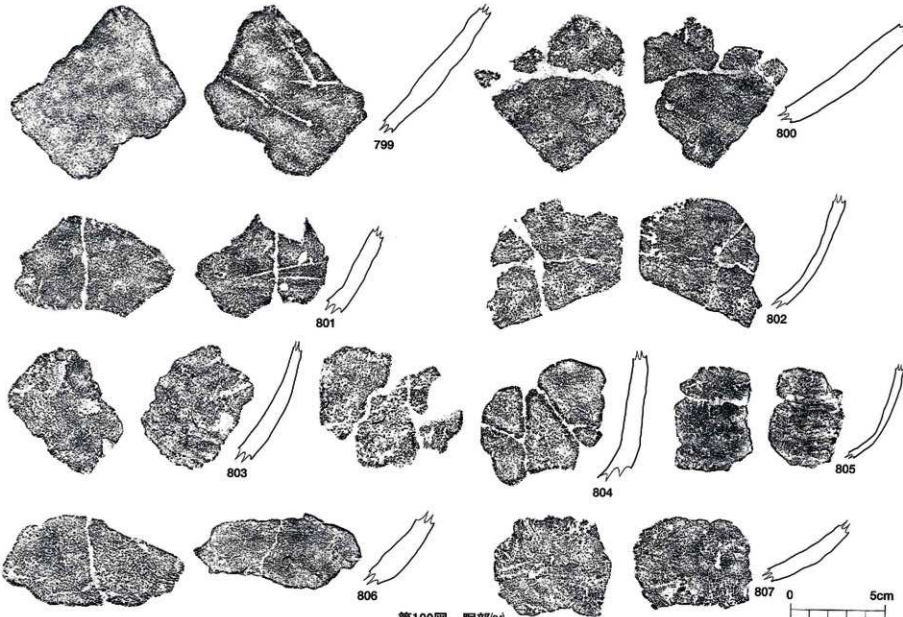
第97図　胴部(21)



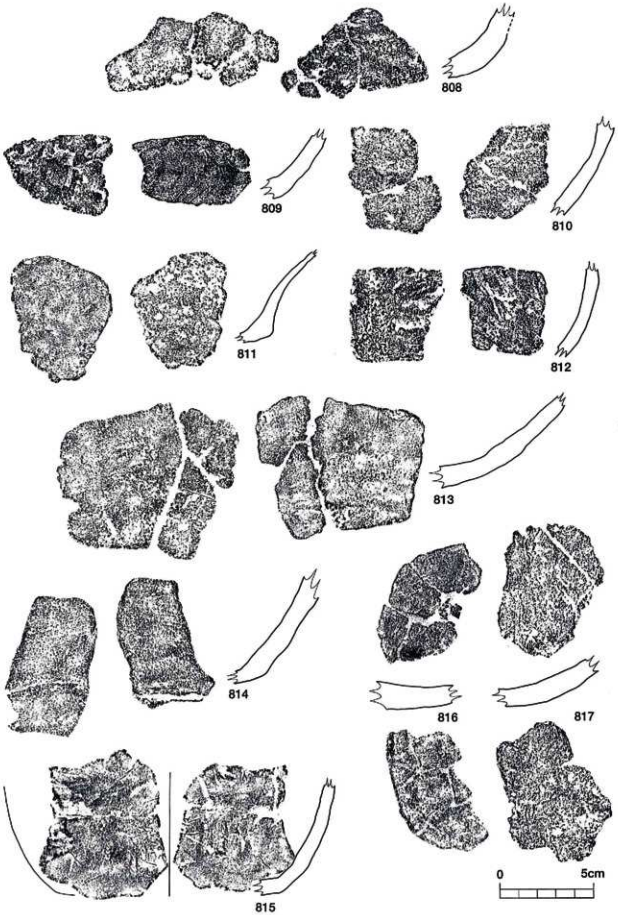
第98図　胴部(22)



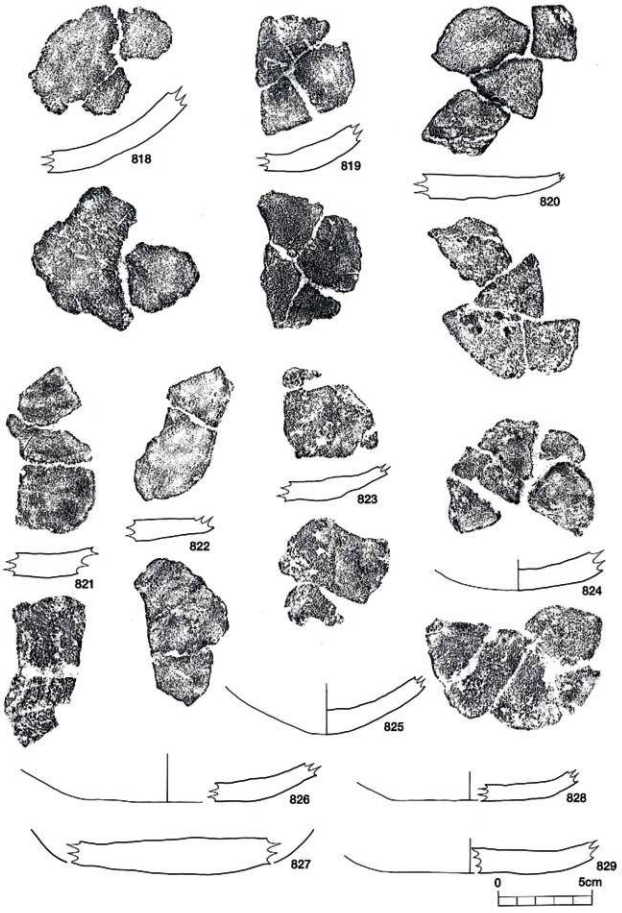
第99図　胴部(23)



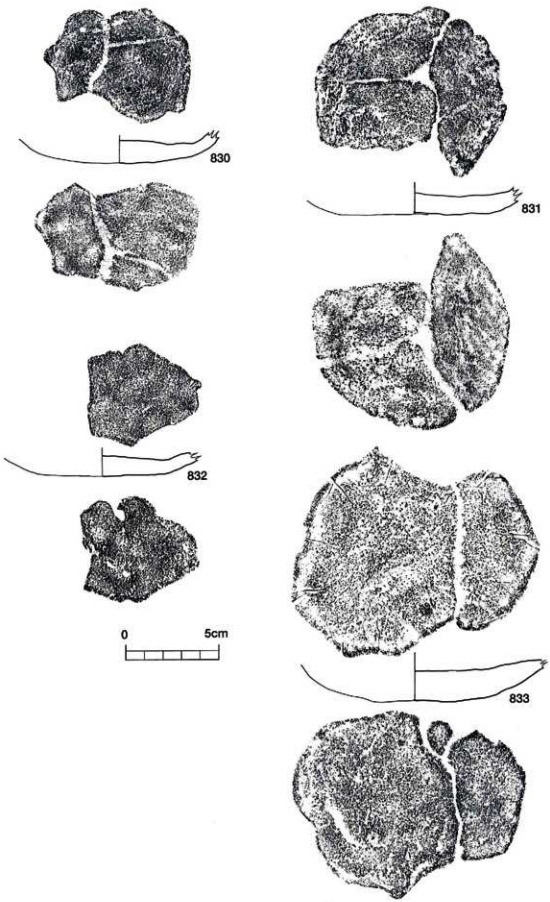
第100図　胴部(24)



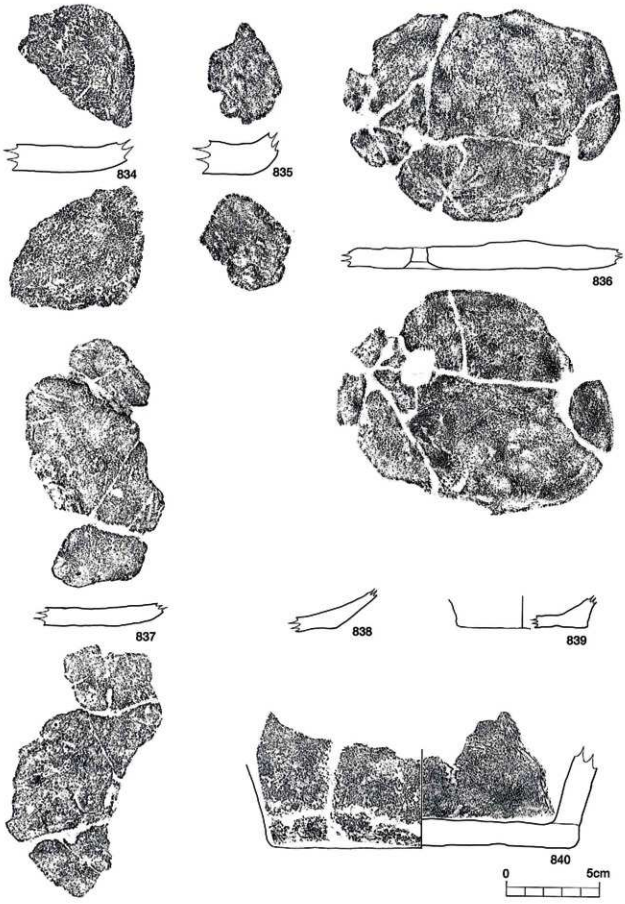
第101図　胴部(25)・底部



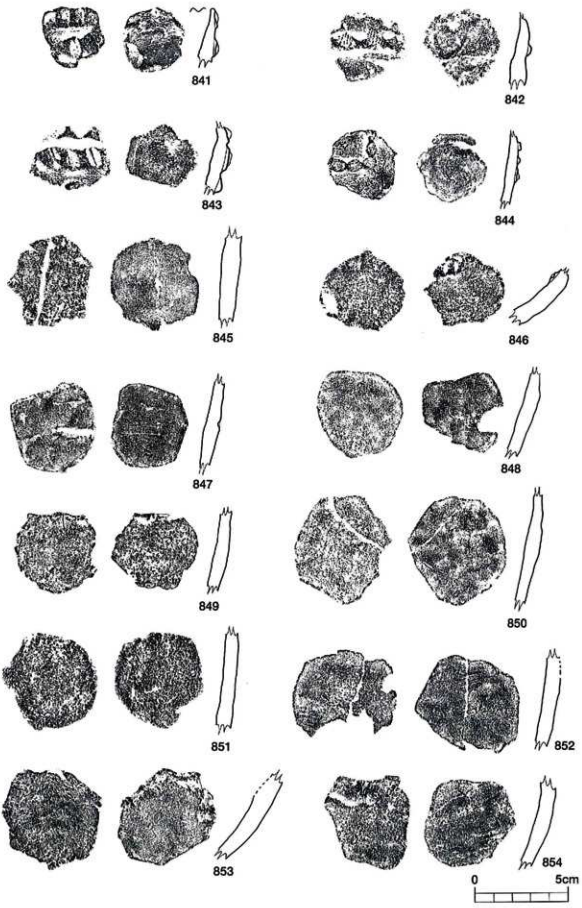
第102図　底部



第103図　底部



第104図　底部



第105図　土製円板

(2)石　器

石器は石鏃・楔形石器・彫器・掻器・尖頭器などの剥片石器と，剥片・チップ・石核や石鏃の未製品，石斧・磨石・敲石・台石・砥石・石皿が出土した。当初の発掘が石器製作跡を認識しておらず，調査後半からチップに意識が行くようになったため，剥片・チップ類の回収率はよくない。剥片は1,052点，チップは1,754点が取り上げられている。

磨石・敲石類も出土量は多く，約１割の図化・掲載である。台石・石皿類も同様である。すべてを掲載はできなかった。

鬼ケ野遺跡出土の剥片石器はホルンフェルス化した頁岩を中心として，チャート・安山岩・黒曜石が使われている。石斧はホルンフェルス化した頁岩と片岩と安山岩がある。磨石・敲石・台石類は砂岩が圧倒的である。

種子島は第三紀層の熊毛層群を基盤とし，その上に西之表テフラ・種Ⅰ～Ⅳテフラなどの火山灰層やその他の火山灰やレス層が土壌化した地層をなす。熊毛層群は主に砂岩や砂泥互層からなり，遺跡に露出している砂岩はこの海成の砂岩円礫である。剥片石器の石材として利用されている黒色から群青色の頁岩は，種子島南部において，宮田栄二・中原一成によって路頭層中や海岸部で採集されており，珪質頁岩として鑑定されている（宮田2002）。遺跡は海岸段丘に位置し，北側に大きな谷が入っている。その下流部にあたる近くの鉄浜でも，この石が少ないけれど採集できる。他の遺跡からも散見できる石材であったが，従来は屋久島や大隅半島・宮崎県の東南部からの搬入とも考えられていた。熊毛層群のなかにこの石材円礫を包含する層が存在する可能性が強くなっている。この珪質頁岩が遺跡に石材として持ち込まれ，遺跡内で剥片石器が製作されている。ただし自給の範囲内であったものと考えている。安山岩や黒曜石については島外の石材である。石鏃であれば完成品として持ち込まれた可能性が強いと考える。個別の石材は石器観察表に記載している。

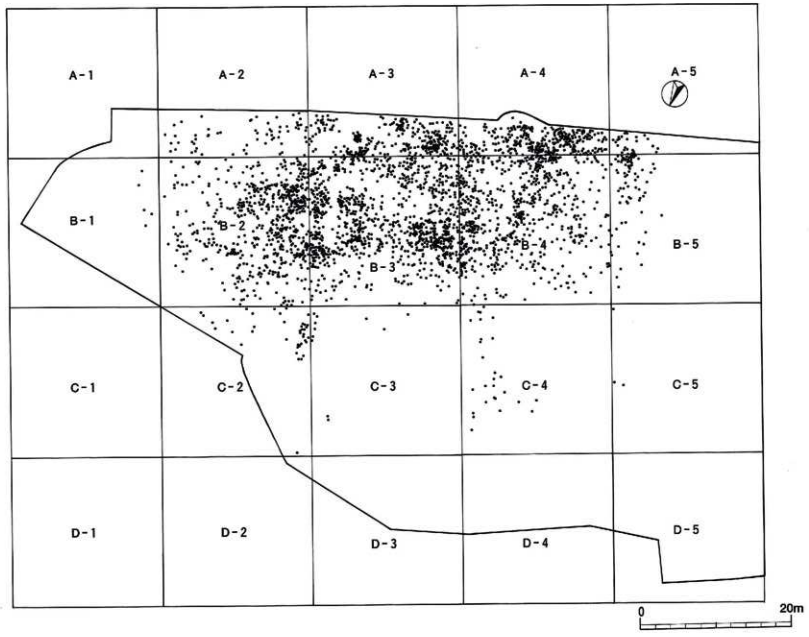
石鏃（第111図～第120図，第123図～第125図　855～1104,1161～1221）

石鏃は，石材がホルンフェルス化した頁岩の場合は，主要剥離面を残すものが一般的で，チャートや安山岩・黒曜石の場合はあまり残らない傾向にある。形と抉りから，大まかに以下のように分類した。

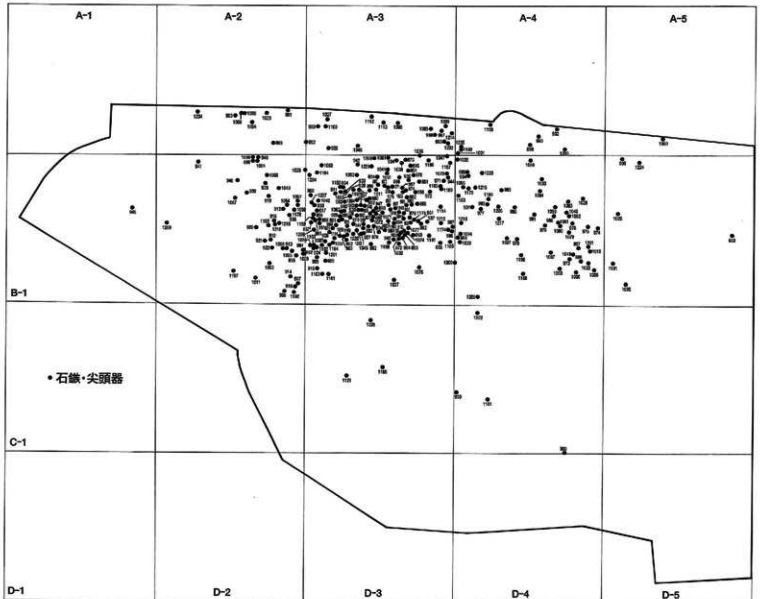
・小型で主要剥離面を残すもの（855～878）
・やや大型で二等辺三角形をなし抉りのないもの（879～905）
・二等辺三角形で抉りのあるもの（906～1053）で脚の一方が長いのが特徴的である。
・正三角形に近い抉りの浅いもの（1054～1095）
・大型のもの（1161～1221）

1194・1196は抉りが深く，1205・1215は細身で，周縁が鋸歯状に剥離される。1220・1221はさらに細身で，鋸歯の目立てが深い。これらは漁労具の可能性も考えられる。

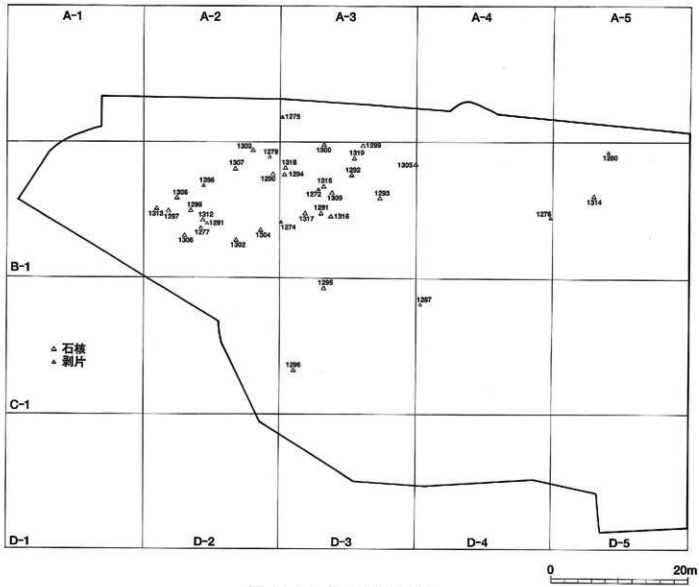
・その他（1096～1104）



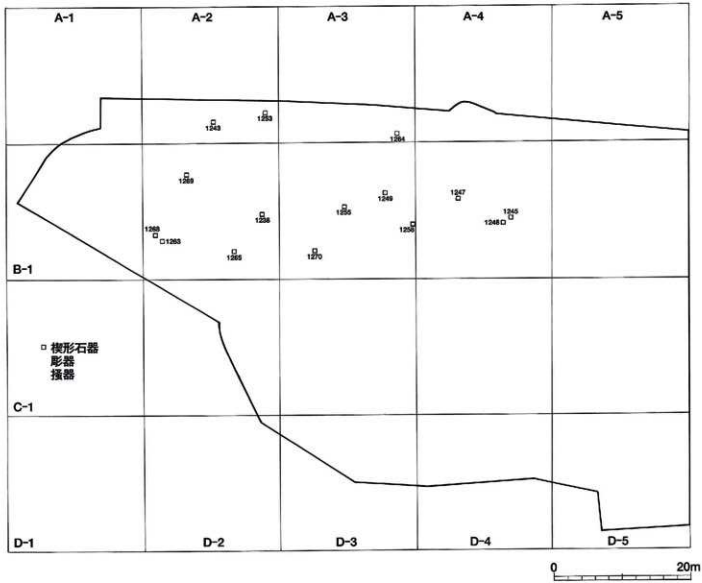
第106図　石器出土状況



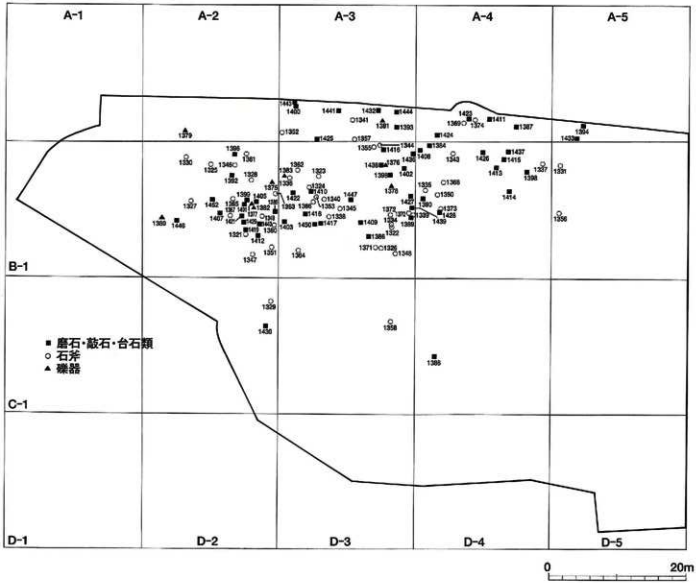
第107図　石鏃・尖頭器出土状況



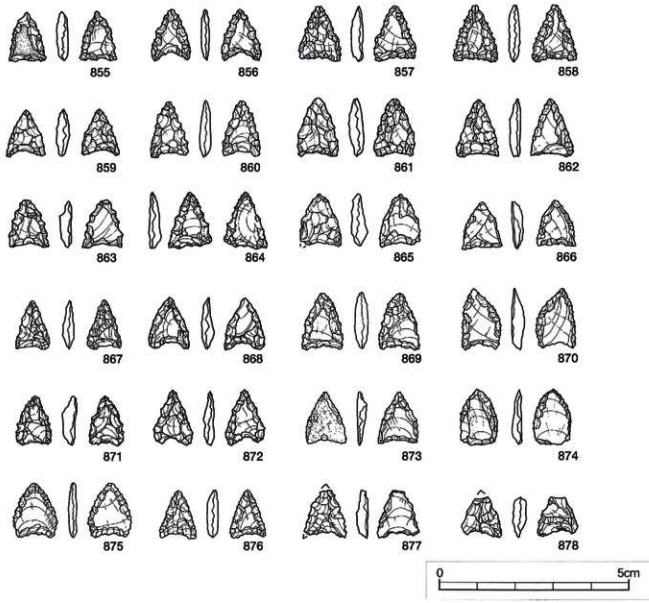
第108図　石核・剥片出土状況



第109図　楔形石器・彫器・掻器出土状況



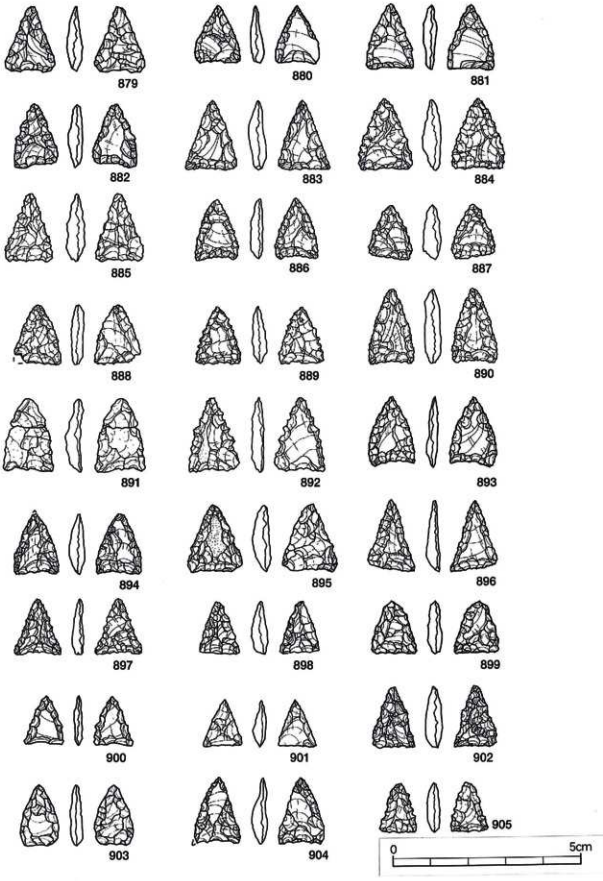
第110図　石斧・磨石・敲石・礫器出土状況



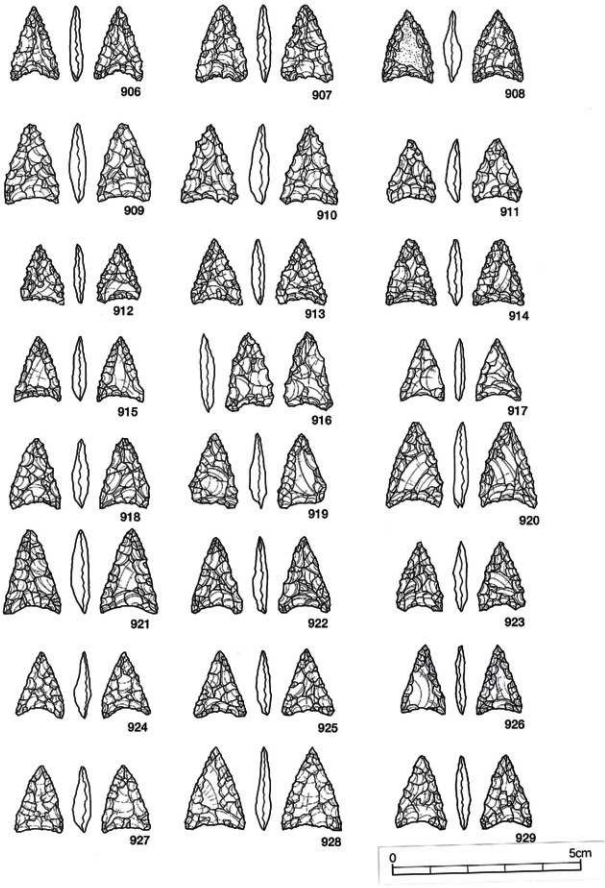
第111図　石鏃(1)

石鏃未製品（第120図～第122図　1105～1160）

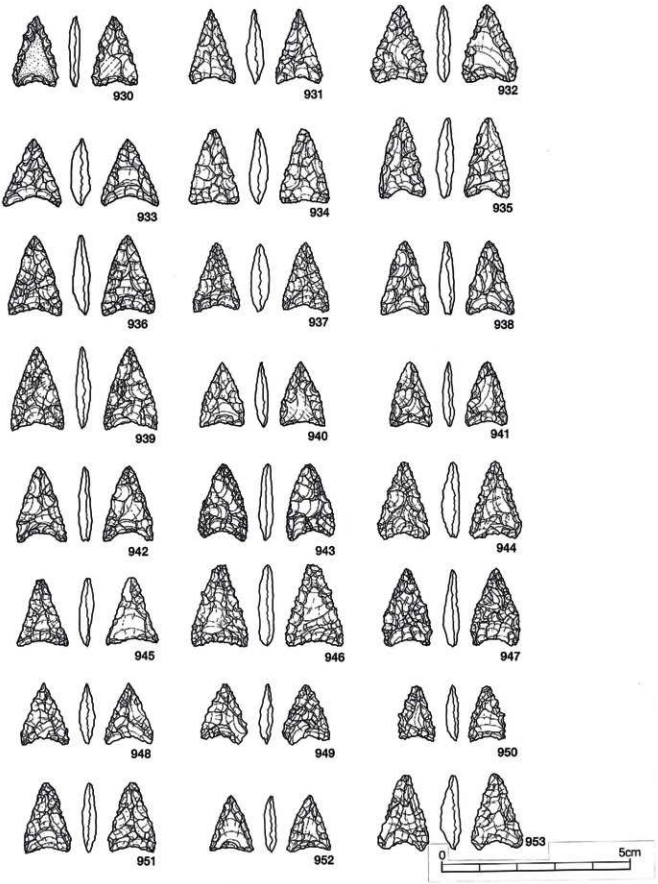
素材の形状を残しながら，周縁部分に押圧剥離がみられるものを抽出した。石鏃の完成品からは，主要剥離面は，基部方向に打点を有することが，どちらかといえば多い程度である。剥片の剥出は，円礫からおこなわれるため，剥片の形状にあわせて，薄い部分を先端部として整形しているものと考えられる。縦長や横長など剥片の剥離方向に規制されない。1105～1141は小型，1142～1160は大型の石鏃の未製品と考えられる。


879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
899
900
901
902
903
904
905
0
5cm

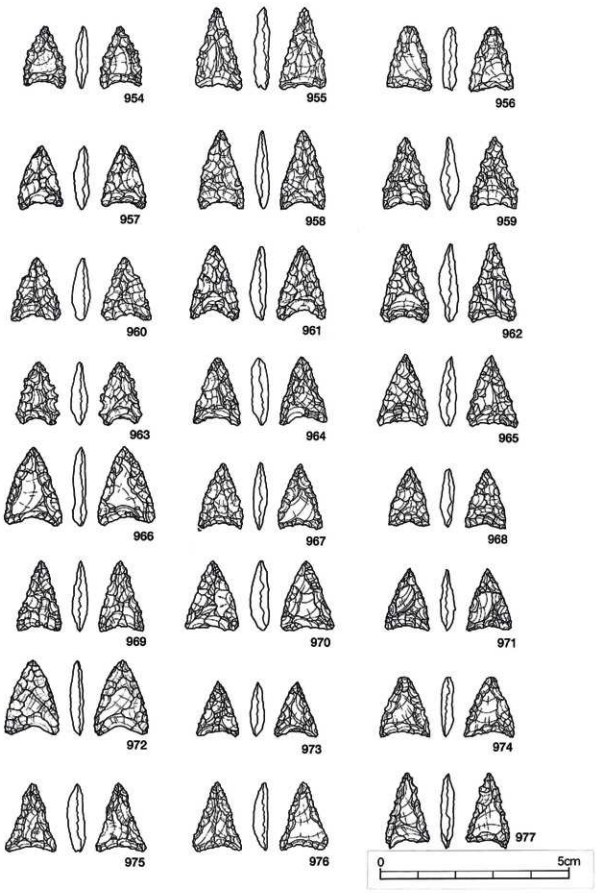
第112図　石鏃(2)


906
907
908
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
0
5cm

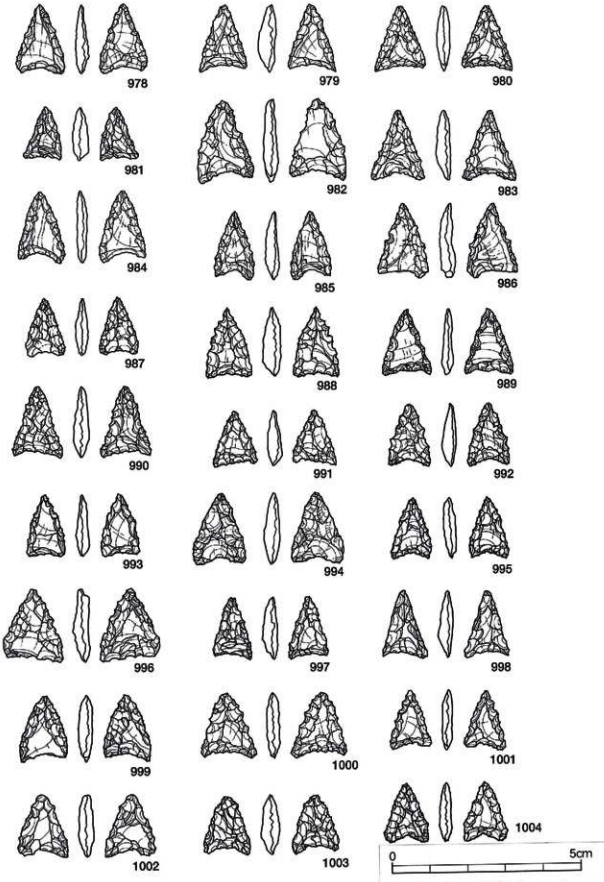
第113図　石鏃(3)


930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
950
951
952
953
0
5cm

第114図　石鏃(4)


954
955
956
957
958
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
970
971
972
973
974
975
976
977
0
5cm

第115図　石鏃(5)


978
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
989
990
991
992
993
994
995
996
997
998
999
1000
1001
1002
1003
1004
0
5cm

第116図　石鏃(6)